

五位堂駅前北第二土地区画整理事業にともなう

下田東遺跡発掘調査概報 II

—平成15・16年度—



2006.3

香 芝 市

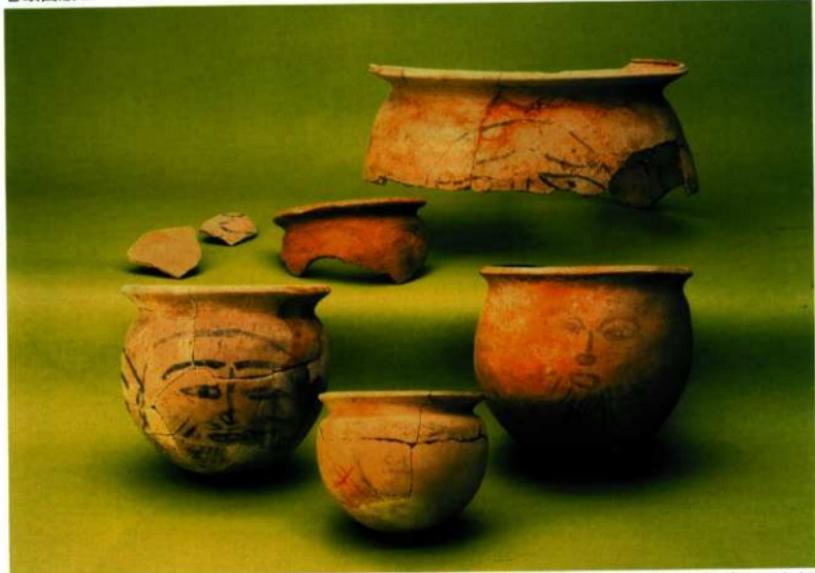
香 芝 市 教 育 委 員 会



1 木製鞍（五位堂区画第3次・旧河道3001出土、上：内側、下：外側）



2 木製鋤（五位堂区画第4次・左：旧河道3001、右：旧河道3000出土）



1 人面墨書き土器（五位堂区画第4次・旧河道3000出土）



2 墨書き土器（五位堂区画第4次・旧河道3000出土、中央：円鏡）

序 文

本市は、奈良県北西部・奈良盆地の西端に位置し、古代の『万葉集』にもうたわれた二上山を背景に市域がひろがります。

大阪都市圏に含まれる地理的条件から、現在71,000人を超える人口を擁するベッドタウンとして発展しており、なお人口増加の一途をたどっています。

古くから自然環境に恵まれていた地勢にあり、現代まで受け継がれてきた埋蔵文化財をはじめ、各種の文化財が数多く残されています。

なかでも、二上山で産出するサヌカイトを利用した石器製作遺跡である二上山北麓遺跡群や飛鳥時代の国宝・威奈大村骨蔵器出土土地や市中央には前方後円墳の狐井城山古墳、市北部に所在する飛鳥時代の平野塚穴山古墳や寺院跡である尼寺廃寺などは、ひろく学会に知られているところです。

このたび、平成15年度および16年度国土交通省国庫補助金事業の一環として下田東遺跡の発掘調査を実施しました。当地は縄文時代から中世にかけての遺跡として知られるようになりましたが、今回は古墳時代から平安時代までの河川の利用実態とその変遷がわかつてきました。その成果をまとめ、発掘調査概報を発刊することとなりました。

この発掘調査を実施するにあたりまして、ご協力賜りました地元の方々をはじめ、その他関係者の皆さまに深く感謝を申し上げますとともに、この調査概報が多くの方に目にふれ、本市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ、幸甚に存じます。

また、今後とも埋蔵文化財行政に邁進していく所存ですので、関係各位のよより一層のご指導、ご協力をお願いする次第です。

平成18年3月

香芝市教育委員会

教育長 山 田 勝 治

例　　言

1. 本書は、奈良県香芝市下田東3丁目および孤井に所在する下田東遺跡、瓦口森田遺跡、木命名の遺物散布地2箇所における発掘調査の成果をまとめた概要報告書である。なお、今後調査地一帯を「下田東遺跡」に再編する予定で、本書も下田東遺跡として報告する。
2. 発掘調査は、平成15・16年度国土交通省国庫補助金事業の一環として実施した。

事業名：大和都市計画・五位堂駅前北第二地区画整理事業
事業者：香芝市
調査担当：香芝市教育委員会事務局　生涯学習課　香芝市二上山博物館
発掘調査員　湯本　整、金松　誠、波多野　篤（平成15・16年度）
臨時職員　賀　義夫（平成15・16年度）
3. 現地調査から遺物整理、本書作成に至る間、下記の調査補助員を雇用し、業者とは業務委託した（敬称略・50音順）。

調査補助員：赤松佳奈、有馬絢子、池田貴之、大竹正裕、奥見佳央、金村茂子、黒沼保子、小林由弥、近藤真紀、島村果苗、清水　隆、須崎憲一、竹田静子、田中久美子、中川香織、中川清一、野水宏美、原田うの、山根弓果、吉崎紘史、吉武紗代、米澤陽一、綿谷静夏
現地調査：㈱香芝市シルバー人材センター、㈱金剛建設、㈱高垣建設、
安西工業㈱、旭建機㈱
測量業務：㈱バスコ、㈱ウエスコ、日本テクノ㈱
遺物保存処理・材質同定：㈱吉田生物研究所
遺物復元：㈱スタジオ三十三
4. 本書挿図の座標軸は国土座標第VI座標系に拠り、標高は海拔高（東京湾標準海面）で示している。また、土色は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』2000年版を用いている。
5. 発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録…切及び出土遺物は、香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山1丁目17-17）内で保管している。
6. 現地調査および出土遺物の検討等の本書作成に関しては、下記の方々より有益な御教示・御協力を戴いた。御芳名を記して感謝の言葉にかえさせていただく（敬称略・50音順）。

青木勘時、井川　聰、泉森　岐、伊藤健司、牛丸友門、大野　薰、大西貴夫、奥山誠義、岡田憲一、岡村直樹、金子裕之、神谷正弘、小池香津江、小泉俊夫、左海正路、佐藤並聖、清水昭博、鈴木裕明、竹内茉里男、田中正利、千賀　久、斗賀野桂、豊岡卓二、中井一夫、林部　均、廣岡孝信、福出さよ子、松田真一、丸山哲夫、山川　均、米田　一、和田　翠
7. 本書の執筆と編集は、湯本がおこなった。

目 次

I	位置と環境	(掲本)	1
II	調査の契機と経過	(〃)	4
III	平成15年度(五位堂区画第3次)調査概要	(〃)	9
1	はじめに		9
2	各調査区の概要		10
3	出土遺物		31
IV	平成16年度(五位堂区画第4次)調査概要	(〃)	34
1	はじめに		34
2	各調査区の概要		34
3	出土遺物		52
V	まとめ	(〃)	56

挿図目次

- 図1 香芝市と調査地位置図 (S=1:50,000)
図2 下田東遺跡の範囲と周辺遺跡分布図 (S=1:12,500)
図3 調査区配置図 (S=1:3,000)
図4 A・B地区 上層・下層造構配置図 (S=1:400)
図5 A・B地区 柱穴・土坑・溝断面図 (S=1:40)
図6 C地区 第44~52トレンチ配置図 (S=1:500)
図7 C地区 第1~2造構面造構検出状況平面図 (S=1:400)
図8 C地区 第1~2造構面造構配置図 (S=1:400)
図9 C地区 環濠居館跡3010・3011上層断面配置図 (S=1:400)
図10 C地区 環濠居館跡3010・3011各所上層断面図 (S=1:40)
図11 C地区 井戸3016平面図・断面図・立面図1 (S=1:50)
図12 C地区 土坑・井戸平面図・断面図・立面図2 (S=1:40)
図13 D地区 第40トレンチ北半西壁土層断面図 (S=1:100)
図14 D地区 造構配置図 (S=1:400)
図15 D地区 柱穴・井戸・溝平面図・断面図1 (S=1:40)
図16 D地区 ピット・土坑・井戸平面図・断面図2 (S=1:40)
図17 D地区 井戸195平面図・断面図・立面図3 (S=1:20)

- 図18 E地区 本調査中央西区・中央東区 上層・下層遺構配置図 (S=1:400)
- 図19 E地区 柱建物・井戸・旧河道平面図・断面図・立面図 (S=1:80)
- 図20 五位堂区画第3次・C地区出土 土器実測図1 (S=1:4)
- 図21 五位堂区画第3次・C地区出土 土器・石製品実測図2 (S=1:4)
- 図22 五位堂区画第3次・D地区出土 上器実測図 (S=1:4)
- 図23 五位堂区画第3次・C地区出土 木製品実測図 (S=1:3, 1:4)
- 図24 五位堂区画第3次・D地区出土 木製品実測図1 (S=1:8)
- 図25 五位堂区画第3次・D地区出土 木製品実測図2 (S=1:20)
- 図26 C地区 第3遺構面遺構配置図 (S=1:400)
- 図27 C地区 旧河道3000・3001断面図1 (S=1:100)
- 図28 C地区 潟井戸平面図・断面図・立面図2 (S=1:25)
- 図29 F地区 第54トレンチ平面図・断面図 (S=1:80)
- 図30 F・G地区 上層遺構配置図 (S=1:400)
- 図31 F・G地区 下層遺構配置図 (S=1:400)
- 図32 F・G地区 柱建物実測図1 (S=1:40)
- 図33 F・G地区 土坑・溝平面図・断面図2 (S=1:40)
- 図34 F・G地区 井戸平面図・断面図・立面図2 (S=1:40)
- 図35 G地区 土坑3649・井戸3650平面図・断面図・立面図3 (S=1:20)
- 図36 C地区・旧河道3000出土 上器実測図 (S=1:4)
- 図37 C地区・旧河道3000出土 上師器実測図 (S=1:4)
- 図38 C地区・旧河道3000出土 墨書き土器・人面墨書き土器実測図 (S=1:4)
- 図39 C地区・旧河道3000出土 土師器・黒色土器・土製品・金属製品実測図 (S=1:4)
- 図40 C地区・旧河道3000出土 須恵器実測図 (S=1:4)
- 図41 C地区・旧河道3000出土 瓦・埴実測図 (S=1:4)
- 図42 C地区・旧河道3001出土 繩文土器・石器実測図 (S=1:4)
- 図43 C地区・旧河道3001出土 土師器実測図1 (S=1:4)
- 図44 C地区・旧河道3001出土 土師器実測図2 (S=1:4)
- 図45 C地区・旧河道3001出土 須恵器実測図 (S=1:4)
- 図46 F地区・第54トレンチ出土 上師器実測図 (S=1:4)
- 図47 F・G地区出土 土器実測図1 (S=1:4)
- 図48 F・G地区出土 土器実測図2 (S=1:4)
- 図49 G地区・井戸3650出土 瓦実測図 (S=1:4)
- 図50 五位堂区画第4次・C地区出土 木製品実測図1 (S=1:6)
- 図51 五位堂区画第4次・C、G地区出土 木製品実測図2 (S=1:2, 1:4, 1:6, 1:8)

図版目次

卷頭図版 1	1 木製鞍 (五位堂区画第3次・旧河道3001出土、上：内側、下：外側)	
	2 木製鞚 (五位堂区画第4次・左：旧河道3001、右：旧河道3000出土)	
卷頭図版 2	1 人面墨書き土器 (五位堂区画第4次・旧河道3000出土)	
	2 墨書き土器 (五位堂区画第4次・旧河道3000出土、中央：円面鏡)	
図版 1	1 調査地全景 (西上空から、平成15年12月16日撮影)	
図版 2	1 A・B地区全景 (南上空から)	
	2 A地区 上層遺構検出状況 (西から、奥：第35トレーニング)	
	3 A地区 下層遺構検出状況 (東から)	
	4 B地区・第38トレーニング ピット群完掘状況 (北から)	
	5 38トレーニング 溝1808土層断面 (北から)	
図版 3	1 C地区全景 (南上空から)	2 C・F・G地区 調査前風景 (西から)
	3 C地区 西上坡・第44トレーニング全景 (東から)	4 C地区 北土壇・第46トレーニング全景 (西から)
	5 C地区 東土壇・第48トレーニング全景 (西から)	
図版 4	1 C地区 第50トレーニング全景 (南から)	2 第50トレーニング 南壁土層断面 (北から)
	3 第50トレーニング 西壁土層断面 (東から)	4 第50トレーニング 遺物出土状況 (南東から)
	5 木製鞍 (東から)	6 古式土師器小型鉢 (西から)
	7 古式土師器直口壺 (西から)	8 山陰系古式土師器甕 (南から)
	9 C地区 第51トレーニング全景 (東から)	
図版 5	1 C地区 環濠居館跡 (東から、濠3010・3011)	2 濠3011-a・b断面 (北から)
	3 土師器羽釜 (西から)	4 濠3011-c'断面 (西から)
	5 濠3010-h断面 (東から)	6 濠3010-f断面 (北から)
	7 濠3010-j'断面 (西から)	8 漆塗椀 (北から)
図版 6	1 濠3011-l・m断面 (北から)	2 環濠居館跡西側区域調査風景 (東から)
	3 柱建物2 (北から)	4 潟井戸3017遺物出土状況 (南から)
	5 土坑3018半截状況 (南西から)	6 井戸3016蓋材検出状況 (南から)
	7 井戸3016枠材1段目検出状況 (南から)	8 環濠居館跡下層遺構全景 (東から)
図版 7	1 井戸3039遺物出土状況 (南から)	2 漆器椀 (西から)
	3 潟井戸3035・3036半截状況 (北から)	4 濠3030遺物出土状況 (南東から)
	5 斜行素掘溝NS1000~1006完掘状況 (南西から)	6 旧河道3000左岸・足跡群検出状況 (南から)
	7 旧河道3000・3001検出状況 (南東から)	8 旧河道3000遺物出土状況 (北から、濠3011内法面)
図版 8	1 D地区全景 (南上空から)	2 第40トレーニング遺構完掘状況 (北から)
	3 第40トレーニング遺構完掘状況 (南から)	4 第40トレーニング北半 西壁土層断面 (東から)
	5 土器埋納遺構102半截状況 (南から)	6 井戸232半截状況 (西から)
	7 井戸232枠材半截状況 (西から)	
図版 9	1 井戸235 (西から、手前：井戸232)	2 井戸195半截状況 (東から)
	3 井戸195枠材検出状況 (西から)	4 土坑114半截状況 (北東から)
	5 第43トレーニング遺構検出状況 (西から)	6 第43トレーニング遺構半截状況 (西から)
	7 井戸69半截状況 (北西から)	8 第53トレーニング遺構完掘状況 (西から)
	9 第53トレーニング遺構完掘状況 (東から)	10 潟6遺物出土状況 (南から)
図版10	1 E地区全景 (南上空から)	2 本調査中央西区全景 (西から)

- 3 本調査中央東区全景（西から） 4 井戸2224・2225半截状況（東から）
 5 井戸2223枠材検出状況（西から） 6 流路66上層検出状況（南西から）
 7 旧河道2203土層断面e・f（南から） 8 本調査中央東区雨水路北側部全景（南から）
- 図版11 1 C地区 旧河道3000検出状況（西から） 2 旧河道3000完掘状況（西から）
 3 旧河道3000完掘状況（南東から、右：溝3040） 4 堤防状遺構（南東から）
 5 堤防状遺構杭列検出状況（南東から） 6 堤防状遺構遺物出土状況（南東から）
 7 堤防状遺構木製軸出土状況（南西から） 8 護岸状遺構（南東から）
- 図版12 1 護岸状遺構杭列検出状況（南西から）
 2 旧河道3000右岸・土器集中地点1遺物出土状況（東から）
 3 凝灰岩切石（北から）
 4 旧河道3000・杭列遺構3検出状況（北西から）
 5 旧河道3000左岸・土器集中地点2遺物出土状況（北から）
 6 土器集中地点2遺物出土状況（北から）
 7 土器集中地点2遺物出土状況近景（東から）
 8 旧河道3000・河床内遺構（西から）
- 図版13 1 円筒形埴輪 2 盾持人物形埴輪 3 人面墨書き土器
 4 斧 5 土馬 6 馬齒
 7 複弁八弁蓮華紋軒丸瓦 8 整唐草紋軒平瓦 9 黒色土器
 10 黒色土器 11 蛇紋岩製勾玉 12 素文鏡
 13 旧河道3001完掘状況（南東から） 14 旧河道3000・3001分歧点土層断面（南東から）
 15 旧河道3001木製品出土状況（南東から） 16 木製鋤・建築部材（南から）
 17 繩文土器要素多角形底（西から）
- 図版14 1 F・G地区全景（西上空から） 2 第54トレンチ全景（西から）
 3 F地区全景（西から） 4 F地区 東壁土層断面（南西から）
 5 G地区 東壁上層断面（南東から） 6 柱穴3229・土坑3231半截状況（南から）
- 図版15 1 区画溝3203遺物出土状況（東から） 2 土坑3333-2遺物出土状況（北から）
 3 G地区柱建物群（東から） 4 柱建物16（北から）
 5 柱建物17（南から） 6 井戸3500枠材検出状況（北から）
 7 井戸3500上器転用枠（北から） 8 井戸3501-a位置（北から）
- 図版16 1 井戸3501-b位置（北から） 2 井戸3501-c位置（北から）
 3 木製横櫛（北から） 4 井戸3501-f位置（北から）
 5 井戸3501-g位置（北から） 6 井戸3647半截状況（南から）
 7 井戸3650上層半截状況（東から） 8 井戸3650遺物出土状況（西から）
 9 井戸3650下層半截状況（東から）

写真目次

- | | | | |
|-----|----------------------|-----|-----------------|
| 写真1 | 出土遺物整理作業風景 | 写真2 | 記録類作成風景 |
| 写真3 | 報道機関への記者発表風景 | 写真4 | ふたかみ史遊会一行現地来訪 |
| 写真5 | ふたかみ発掘体験（2004.11.20） | 写真6 | 市民の皆さんによる土器洗い風景 |
| 写真7 | 市民の皆さんによる発掘風景 | 写真8 | 蛇紋岩製勾玉が出たよっ！ |

I 位置と環境

香芝市は奈良県北西部に位置し、地形的には奈良盆地西部の一角を占める（図1）。東側は大和高山市・北葛城郡広陵町・同郡上牧町、西側は大阪府柏原市・羽曳野市・南河内郡太子町、南側は葛城市、北側は北葛城郡王寺町と接している。大阪府側から発達してきた鉄道・国道・高速道路などの交通網により、都市通勤圏のベッドタウンとして近年著しく人口が増加し、平成3（1991）年に県内10番目の市制を施行した。

下田東遺跡の所在する市の南西部は、標高52～54mの沖積低平地が広がっており、宅地開発が進む10年前まで、10～11世紀頃に奈良盆地一帯で施行された条里制地割の水田地帯が明瞭に残されていた。その地割南北軸に直線水路状に改修された小河川は、東から熊谷川・山崎川・杉橋川・初田川・鳥居川と名付けられて北流し、人和川水系の葛下川に注ぎ込んでいる（文献1）。平地の北側には、標高60～80mのなだらかな馬見丘陵の南西側が横たわり、丘陵縁端を葛下川が北西に流れてその境界をなしている。

周辺の遺跡を概観してみる（図2）。国内でも有数の旧石器時代の遺跡として知られる二上山北麓遺跡群が西方にあり（文献2）、馬見丘陵の南西方にはナイフ形石器が出土した鈴山遺跡（85、図2に対応し、以下同じ。）が存在する（文献3）。縄文時代では、前期の北白川下層Ta式～大歳山式の土器、石器や獸骨が大量に出土した狐井遺跡（71）、ほかに下田遺跡（97）がある（文献4・5）。後期末の宮滝式～滋賀里I式の土器が旧河道から出土した瓦口森田遺跡（84）があるが、いずれにしても確実な遺構検出例はない（文献6）。弥生時代においては更に遺跡の存在は希薄であり、法楽寺山遺跡（96）で後期の土器を伴った土坑が検出されているに過ぎなかった（文献7）。しかし、近年調査された下田東1丁目に所在する下田味原遺跡から、後期の土器が出土する溝が検出されている（文献8）。

古墳時代に入ると市域内の土地利用は活発化する。葛下川周辺の地盤安定がその要因の一つと考えられる。護岸構造などが検出された前期～中期の鍛田遺跡（文献9）、土坑や水路などが確認された中期～後期の藤ノ木丁遺跡（103）などの集落域も既往の発掘調査より判明している（文献10・11）。

また、古墳は馬見丘陵とその南西側の平地に散在する（文献12）。古墳時代前期には丘陵南端に前方後円墳の土山古墳（77）、直径約10mの円墳の長谷山古墳（89）が現れる程度であるが、後期になると御坊中第1号墳（86）と同第2号墳（87）と同第3号墳（88）、御坊山第1号墳（91）と同第2号墳（92）、勘平山第1号墳（93）と同第2号墳（94）のように直径10～25m程度の円墳が各尾根斜面上を単位として築かれる。坊主山古墳（78）、ケシキ山第3号墳（95）、真美ヶ丘59地点（90、瓦口古墳）などは詳細が不明であるが、丘陵上では埴輪を再使用する古墳が幾つかあり、今後の類例確認が期待される（文献13）。平地側では、中期後半に全長140mの前方後円墳である狐井城山古墳（69）や狐井稻荷古墳（70）、最近調査で確認された下田東古墳がある（文献14）。

古代の遺跡としては、丘陵上に瓦散布地が点在する。中世には平地に莊園「平田庄」が開発され、丘陵上には、瓦城跡（83）、鈴山城跡（85）、下田城跡（102）、古墳を利用した狐井城跡（69）や、防御的機能を備えた良福寺環濠（73）、五位堂環濠（75）、瓦口環濠（76）などが成立し、現在の景観の原形となった（文献15・16）。

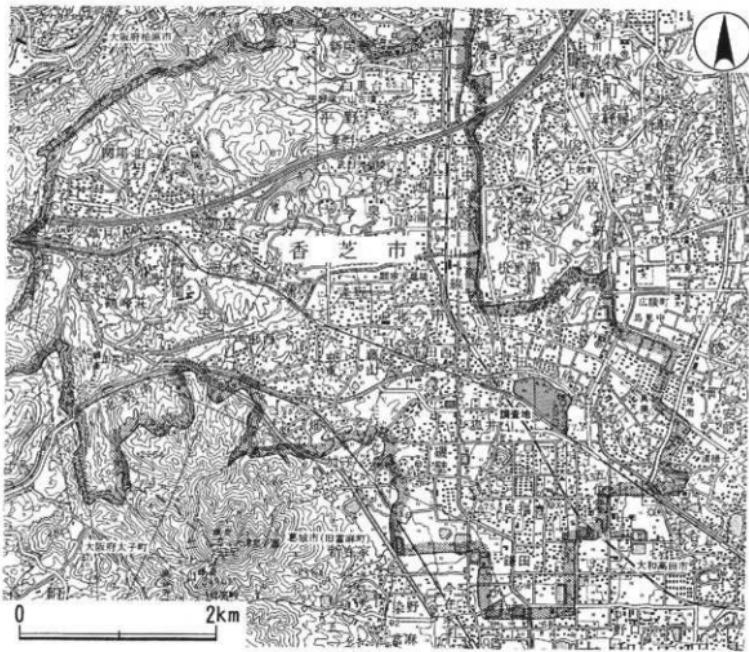
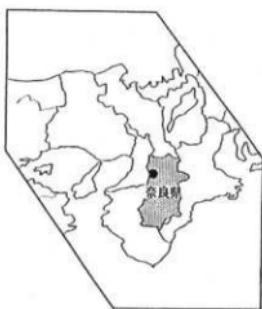


図1 香芝市と調査地位置図 (S = 1 : 50,000)

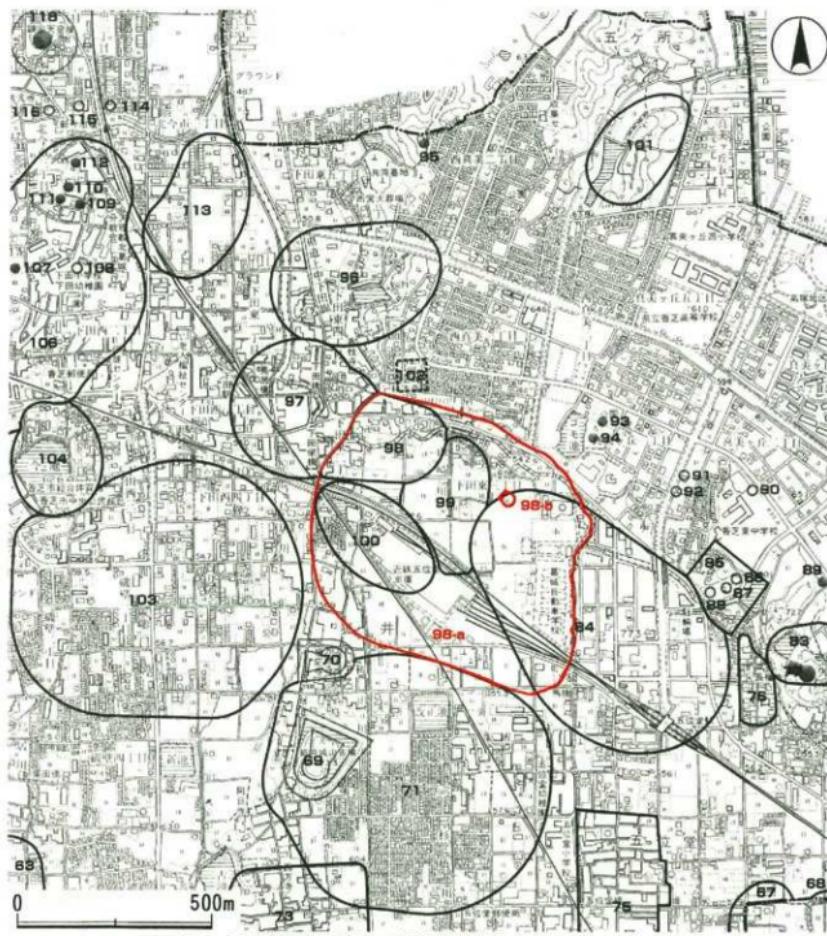


図2 下田東遺跡の範囲と周辺遺跡分布図 (S=1:12,500)

63 磐壁遺跡	85 鈴山城跡・鈴山遺跡	97 下田遺跡	109 北今市第1号墳
67 遺物散布地	86 御坊中第1号墳	98 下田東遺跡(周知範囲)	110 北今市第2号墳
68 遺物散布地	87 御坊中第2号墳	98-a 下田東遺跡(想定範囲)	111 北今市第3号墳
69 狐井城山古墳	88 御坊中第3号墳	98-b 下田東古墳(新規)	112 北今市第4号墳
70 狐井輪荷古墳	89 長谷山古墳	99 遺物散布地	113 下田味原遺跡
71 狐井遺跡	90 真美ヶ丘59地点	100 遺物散布地	114 古墳状隆起(顕宗陵陪冢)
73 良福寺環濠	91 御坊山第1号墳	102 下田城跡	115 古墳状隆起(顕宗陵陪冢)
75 五位堂環濠	92 御坊山第2号墳	103 藤ノ木丁遺跡	116 古墳状隆起(顕宗陵陪冢)
76 瓦口環濠	93 勘平山第1号墳	104 今池遺跡	118 「顯宗陵」治定地
77 土山古墳	94 勘平山第2号墳	106 藤山遺跡	
83 丸城跡	95 ケシキ山第3号墳	107 藤山第1号墳	
84 瓦口森田遺跡	96 法楽寺山遺跡	108 藤山第2号墳	

香芝市教育委員会編 2001「香芝市遺跡地図(平成13年度改訂版)」提

文献

- (1) 山川 均 1995『条里制と村落』『歴史評論538』
- (2) 松藤和人 1979『二上山・桜ヶ丘遺跡－第1地点の発掘調査』(奈良県史跡名勝天然記念物報告 第38集) 奈良県立橿原考古学研究所
- (3) 佐藤良二 1985『鈴山城跡・鈴山遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- (4) 香芝市教育委員会編 1994『狐井遺跡第7～9次』『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2』香芝市教育委員会
- (5) 香芝町教育委員会編 1989『瓦ノ森田遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会
- (6) 香芝市教育委員会編 1997『法楽寺山遺跡第1次』『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報8』香芝市教育委員会
- (7) 十文字健 2004『下山遺跡』『奈良県遺跡調査概報 2003年度』奈良県立橿原考古学研究所
- (8) 潤木 整 2002『下田味原遺跡第1次』『奈良県遺跡調査概報 2001年度』奈良県立橿原考古学研究所
- (9) 香芝市教育委員会編 1993『鎌田遺跡』『平成4年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- (10) 香芝町教育委員会編 1989『藤ノ木』遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会
- (11) 香芝市教育委員会編 1994『藤ノ木』遺跡第6～11次』『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2』香芝市教育委員会
- (12) 泉森 敏 1976『古墳時代』『香芝町史』香芝町役場
- (13) 湯本 整 2002『馬見古墳群における埴輪の再使用例について』『古代近畿と物流の考古学』学生社
- (14) 佐藤良二・湯本 整 2003『下田東古墳』『考古学ジャーナル500』
- (15) 奈良県教育委員会編 1998『奈良県遺跡地図 第2分冊』
- (16) 香芝市教育委員会編 2001『香芝市遺跡地図(平成13年度改訂版)』

II 調査の契機と経過

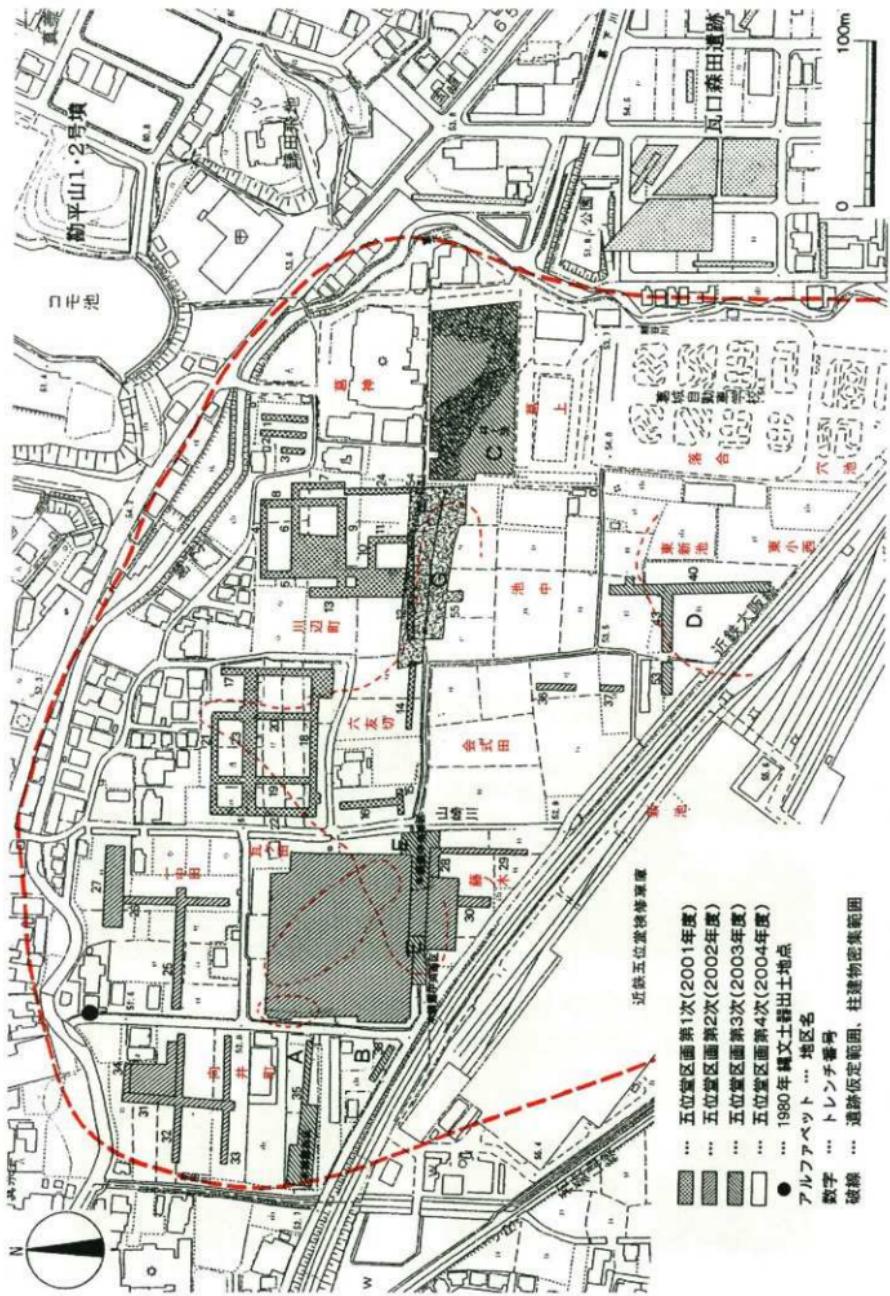
今回の調査は、香芝市が施行する五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。本事業は平成13(2001)年度から開始されたが、経緯については同時刊行した『下山東遺跡発掘調査概報1』に詳述しているので参照されたい(註1)。

下田東遺跡は、香芝市下田東3丁目および大字・狐井にかけての平地上に広がる縄文時代早期～江戸時代の集落跡を中心とした複合遺跡である(図3)。昭和55(1980)年の水路改修に伴う縄文土器などの採集がその存在を知られる契機となった(註2)。その後、本格的な発掘調査は長年実施する機会が訪れなかったが、本事業が数年に亘って実施されるのに伴い、大規模に展開されるに至っている。博物館・資料館での出土品展示、各機関刊行のパンフレット、資料集、展示図録などでその調査成果速報に努めてきた結果、今日では具体的な遺跡の様子が分かるようになってきた(註3)。

本事業での調査対象面積は開発予定の約17haで、初年度の第1次調査(註4)は事業地北東区域約2.5haのうち6,097m²について調査した。墳丘長21mの帆立貝式古墳(「下田東古墳」と命名)が検出され、周濠からは出土した円筒埴輪や家・器財・馬・鳥・人物などの形象埴輪から古墳時代中期末の築造と考えられた。旧河道からは、飛鳥時代～平安時代の土師器・須恵器のほか、軒瓦・鶴尾・埠・切石材などの古代寺院を想起させる遺物、円面鏡、墨書き土器、人面墨書き土器、土馬など都城的性格の遺物が出土した。

平成14(2002)年度の第2次調査は、事業地西側区域約4.5haのうち16,264m²を調査した。古墳時

図3 調査区配置図 (S = 1 : 3,000)



代～平安時代の柱建物群を多数検出した。特に古墳時代後期には区画溝を伴う平地式建物、流路上層からは多数の完形の須恵器の出土が確認され、奈良時代～平安時代に方位を意識して配置された大型柱建物が検出されたことは今後遺跡の性格を考える上で注目される。この他、縄文土器や石器が出土した流路下層などの河川跡や中世に至るまでの水田耕作痕が調査地各所で確認されている。

本書で報告するのは、第3次調査と第4次調査についてである。

平成15(2003)年度の第3次調査は、開発部局との協議の結果、未着手だった事業地の東側区域(C地区)と南側区域(D地区)を調査対象とした。事業地全域での遺跡の広がりの様子を把握することに努めた。なお、前年度の調整池新設および河川改修予定地で遺構が集中して確認された本調査北区・中央区・南区の未調査部分の拡張区(E地区)を設定することとした。また、上層遺構検出に止めていたその西側区域(A・B地区)は継続調査した。

平成16(2004)年度の第4次調査は、第3次調査での成果を踏まえて協議し、C地区で確認した下層遺構の継続調査から再開した。また、開発部局の工事行程と調整を図りながら、事業地中央についてF・G地区の本調査と試掘・確認調査を実施した。

註

- (1) 香芝市教育委員会編「2006「下田東遺跡発掘調査概報」」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報21」
- (2) 小泉俊夫・辻 俊和・山下隆次 1980「押型文土器を出土した香芝町下田東遺跡(一)・(二)」「青陵」46・47 奈良県立橿原考古学研究所
- (3) 五位堂区画第1次～第4次調査の成果展示としてはこれまでに以下の機会があった。



写真1 出土遺物整理作業風景



写真2 記録類作成風景



写真3 報道機関への記者発表風景



写真4 ふたかみ史遊会一行現地来訪

- A) 香芝市二上山博物館 2002『第7回春季企画展 香芝はっくつ2001』4月25日に各報道機関への記者発表を行い、5月12日の調査報告会では佐藤良二が報告した。
- B) 香芝市二上山博物館 2003『第8回春季企画展 香芝はっくつ2002』5月1日に各報道機関への記者発表を行い、5月17日の調査報告会では湯本整が報告した。
- C) 独立行政法人奈良文化財研究所・古代瓦研究会 2002『第6回古代の瓦づくりシンポジウム』3月8日・9日に軒瓦を出品・展示了。
- D) 香芝市二上山博物館 2004『第9回春季企画展 香芝はっくつ2003』4月28日に各報道機関への記者発表を行い、企画展に先立って木製軒の特別陳列を実施した。5月15日の調査報告会では湯本が報告した。
- E) 香芝市二上山博物館 2005『第10回春季企画展 香芝はっくつ2004』2月10日・4月26日に各報道機関への記者発表を行い、企画展に先立つスポット展示で人面墨書き土器を出品した。5月14日の調査報告会では湯本が報告した。
- F) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2002『2001年度発掘調査速報展 大和を掘る20』埴輪などを出品。
- G) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2003『2002年度発掘調査速報展 大和を掘る21』土器・瓦などを出品。
- H) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2004『2003年度発掘調査速報展 大和を掘る22』木製鞍・土器などを出品。8月21日の土曜講座では湯本が報告した。
- I) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2005『2004年度発掘調査速報展 大和を掘る23』人面墨書き土器・瓦などを出品。
- J) 馬の博物館 2005『はにわうま』馬形埴輪を出品。
- また、同調査の報告として以下の既刊文献がある。
- 佐藤良二・湯本 整 2003『下田東古墳』『考古学ジャーナル500』
 - 香芝市教育委員会編 2003『下田東遺跡一五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う平成13・14年度発掘調査の成果』香芝市都市整備部地区画整理課・香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
 - 香芝市教育委員会編 2005『下田東遺跡一五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う平成15・16年度発掘調査の成果』香芝市都市整備部地区画整理課・香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
 - 佐藤良二・湯本 整・金松 誠・波多野 篤・山下隆次他 2003『下田東遺跡の出土瓦』『古代瓦研究Ⅲ』古代瓦研究会
 - 香芝市秘書広報課編 2004『発掘調査の成果報告一下田東遺跡1』『広報かしば444』香芝市役所
 - 香芝市教育委員会編 2003『下田東遺跡第2次調査の成果』『平成14年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
 - 香芝市教育委員会編 2004『下田東遺跡（五位堂区画3次）の発掘調査』『平成15年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
 - 香芝市教育委員会編 2005『下田東遺跡（五位堂区画4次）の発掘調査』『平成16年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
 - 湯本 整 2003『下田東遺跡』『大和を掘る21』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
 - 湯本 整 2004『下田東遺跡（五位堂区画第3次）』『大和を掘る22』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
 - 湯本 整 2005『下田東遺跡（五位堂区画第4次）』『大和を掘る23』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- (4) 調査名については、本事業に伴う調査では「五位堂区画」を冠した。例えば、第1次調査は「五位堂区画第1次」となる。これは従前の下田東遺跡地内の調査次数と混同しないためであり、今後の同遺跡範囲の修正とともに既往調査次数の整理作業が進行する中で、正式採用もしくは変更されることを念頭においての措置である。なお、本文中においては、「五位堂区画」を省略して報告している。

III 平成15年度（五位堂区画第3次）調査概要

1 はじめに

第3次調査は、前述した事業地東側と南側区域、前年度からの継続の西側区域での約2haを調査対象とし、試掘・確認調査と本調査を合わせて、8,596m²を調査した。

調査できなかった東西方向の市道部分（E地区）から始めることとした。ここは、河川改修部分にあたり、周辺では前年度に調整池新設・河川改修予定地を先行して工事が行なわれる部分を本調査北区・中央区・南区として調査したが、本調査中央区の両側が未調査区として残された。このため、今回はその両側を本調査中央西区・中央東区と呼称して調査した。

市道の北側沿いには、幅1mの農業用水路が付設しているが、条里型地割の坪界にあたる。施工時期を判断するための坪界を調査する絶好の機会ではあったが、調査区は工事都合上、用水路を含めない道路両側のコンクリート製擁壁に挟まれた区域となった。中央東区では擁壁を越えて南区まで広げることが可能となり、用水路を挟んで北側も調査区（用水路北側部分）を設けることができた。擁壁部分については、工事撤去の後、立会調査を行い、遺構・遺物の確認を行った。この他、調査区は基本的に次年度予定している開発工事計画部分について実施した。計画のない部分では、幅4mで必要に応じた長さで試掘・確認トレンチを設けた。

事業地西端の初田川に面する河川部分をA地区とし、試掘第35トレンチ、本調査西区を設けて調査した。B地区は河川用地南側に試掘第38トレンチを設定した。C地区は事業地東端の河川及び道路用地について調査を行った。現況で3箇所の高まり部分に十字型の試掘第44～48トレンチ配置した後、下層の試掘第50～52トレンチを設けた。D地区は、事業地南側の区画道路部分の調査である。第40～43・53トレンチを設定し、工事の都合で先送りとなった第41・42トレンチを除いて、第40・43・53トレンチの調査を実施した。

調査区の設定は2003年5月に行い、調査は本調査中央西区・中央東区・A地区・B地区的順で進め、2003年9月30日に航空測量を行った。その後、C地区・D地区的調査を行い、航空測量は2003年12月16日にD地区を、同年12月25日にC地区を行った。調査総面積は8,596m²である。

調査期間は、2003年6月3日～2004年3月19日で、最終的に3月31日に完了した。実働188日を要した。

調査区ごとに概要是次節以降のとおりである。

2 各調査区の概要

(1) A地区の調査（図4・5）

第35トレンチ 調査対象地の東側で設定した、幅4m×長さ35mの東西調査区である。標高52.1mに位置し、基本層序は第1層が耕作土（堆積の厚さ0.2m）、第2層が床土（0.05m）、第3層が褐色砂質土（平均0.3m）、第4層が暗褐灰色砂質土（平均0.4m）であり、第5層の黄橙色粘質土を基盤として遺構が展開する。ここは、平成14年度調査した本調査北区が東隣しており、旧河道9の延長部を確認した。川床は平坦ではなく、凹凸状を呈しており、遺物には土器が含まれておらず、サスカイト片が含まれていた。トレンチ東からやや中央よりで川岸を検出し、黄橙色粘

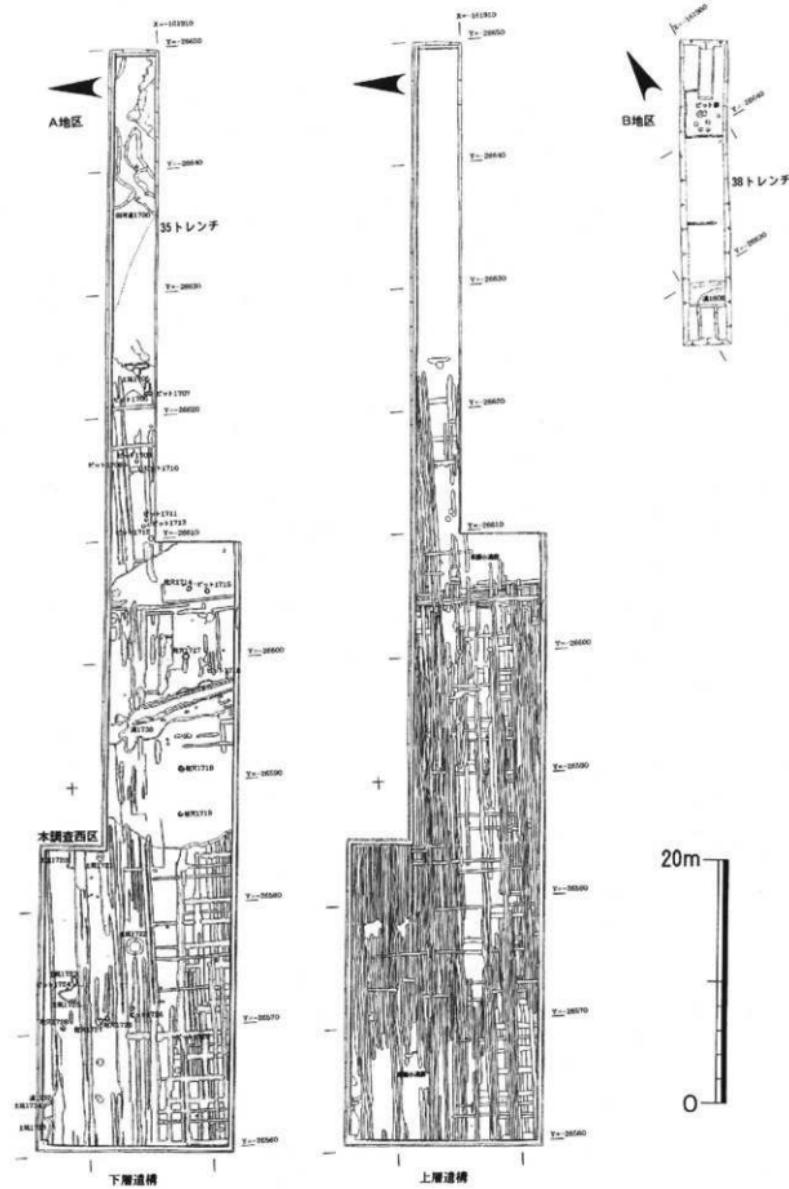


図4 A・B地区 上層・下層遺構配置図 (S=1:400)

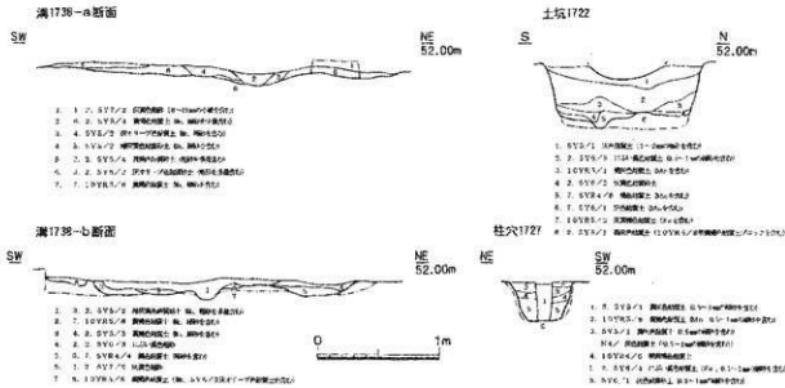


図5 A・B地区 柱穴・土坑・溝断面図 ($S = 1:40$)

質上の基盤上に素掘小溝が東西・南北走向にそれぞれ15条、22条検出された。ピットは6基を確認した。いずれも小さく遺物をほとんど含まない。

本調査西区 調査対象地の西側、河川付け替工事部分を含む区域である。第35トレンチの西側に接続する位置で設定した675m²の調査区。基本層序は第1層が耕作土（堆積の厚さ0.2m）、第2層が床土（0.05m）、この下で黄褐色粘質土の基盤層を確認し、遺構が展開する。このため、ここでは35トレンチの第3層と第4層が確認できない。基盤層上に素掘小溝が東西・南北走向にそれぞれ208条、56条検出された。この下層にピット12基、土坑2基があり、調査区中央に溢地・流路1条が存在する。ピットのうち調査区南側の5基は3m間隔をおいて並んでおり、柵の可能性がある。そのほか、全体的には遺構分布が閑散としており、遺物の出土量も極めて少ない。古代の遺構面はもともと存在しない可能性が高い区域と考えられる。

(2) B地区的調査

A地区の南側、河川付け替工事部分の調査である。三角形状の調査対象地に対して、現況南側市道に平行して第38トレンチを設定して遺構の有無確認を行った。

第38トレンチ 幅4m×長さ25mで設定した100m²の調査区。当初標高53.0mであった。基本層序は第1層が造成土で厚さ1mに及ぶところも存在した。以下、耕作土（堆積の厚さ0.2m）、第2層が床土（0.05m）、この下で明黄褐色粘質土の基盤層を確認し、ピット7基、流路1条を検出した。ピットはトレンチ東側で検出し、埋土は5cm程度と残りが悪く、遺構面自体が削平されていると考えられた。それを証明するかのように素掘小溝もまったく検出されなかつた。現代になってから地盤全体が下げられ、造成土がおかれた可能性が高いと思われる。トレンチ西側で検出した流路（溝1808）は幅3m、深さ1mを測る。南西→北東方向に流下方向をとり、A地区本調査西区の中央で検出した流路（溝1738）につながるものと考えられる。遺物は皆無であった。A地区同様、古代の遺構はもともと存在の希薄な区域であったことが考えられる。

(3) C地区の調査

C地区の調査対象面積は約6,730m²である。ここには現況で3つの高まりが確認されていて、平成13年度に付近で行われた第1次調査の成果から、古代寺院に関連する建物基壇の可能性が考えられていた。まず、その配置関係を把握する為に実地測量から調査を開始した(図6)。高まりは調査区内での配置から「西上塙」「北土塙」「東土塙」と命名して、十字型に試掘トレンチを設定して調査することとした。

第44・45トレンチ C地区の西側にある「西上塙」の頂点で直交して「十」字型に設定した、幅2m×長さ10mの試掘溝。東西方向が第44トレンチ、南北方向が第45トレンチである。除草すると腐植土の下からは造成土が厚さ0.5mで全体を覆っていることが確認できた。また、一部は土壌改良材の混入により堅固であった。その下部には旧耕作土、床土が広がっており、褐色砂質土の包含層の下で第5層相当層(暗褐色粘質土)が確認できた。ガラス瓶・鉄製缶が出土した。

第46・47トレンチ C地区の北側にある「北土塙」の頂点で直交して「十」字型に設定した、幅2m×長さ10mの試掘溝。東西方向が第46トレンチ、南北方向が第47トレンチ。ガラス瓶・鉄製缶・農業用プラスチック製品が出土した。

第48・49トレンチ C地区の東側にある「東土塙」の頂点で直交してほぼ「十」字型に設定した、幅2mの試掘溝。東西方向が第48トレンチで長さ10m、南北方向が第49トレンチで長さ6mである。他の2箇所の土壌より低く、ガラス瓶・鉄製缶・農業用プラスチック製品が出土した。

第50トレンチ C地区東側、幅6m×長さ55mの南北調査区。褐色砂質土から土師器の細片が1袋出土した。第8層から山陰系在地産の古式土師器、第10層から前期～晩期の縄文土器の破片、サヌカイト剝片、製品が出土した。

第51トレンチ C地区東側、第50トレンチ北端から西へ直交する位置で設定した、幅6m×長さ15mの東西調査区。褐色砂質土から土師器の細片が1袋出土した。

第52トレンチ C地区東側、第50トレンチ南端から西へ直交する位置で設定した、幅6m×長さ30mの東西調査区。ここでは、第1次調査第5層相当層の上部で検出することを心がけた。平坦な面を形成していることが把握でき、トレンチを拡張するように本調査に切り替えていった。褐色砂質土から土師器の細片が1袋出土した。

C調査区 C地区での第44～52トレンチの試掘・確認調査の成果を踏まえて、全面調査することとなった。C調査区では、標高52.0m前後の黄褐色粘質土の硬い地盤(第3造構面)に造構が残されている。ここを何度も河川の氾濫によって地表面が嵩上げされているため、第1造構面は標高52.3m前後、第2造構面は標高52.1m前後から多くの造構が掘り込まれている(図7)。

第1～2造構面では、調査区の北東側と南西側に、東西・南北方向の素掘小溝群と井戸が確認されており、第2造構面では、調査区の南側に環濠居館の存在が確認された(図8)。

・環濠居館跡(狐井葛上環濠) 今年度の調査で初めて確認した深い大溝(濠)で周囲を区画した中世の有力者の館で、濠3010と濠3011を伴う東西一辺96m以上、南北一辺20m以上の長方形の中世の環濠居館(図9・10)。東西方向は北辺濠を検出した。南北方向は東辺濠、西辺濠、中央濠を確認した。上空から見ると「山」字型に検出した。濠に区画される内側には、標高52.6mまで盛

り上により嵩上げされた東側区画と西側区画と呼称した屋敷地が存在する。西側区画には、柱建物1棟と井戸2基、土坑2基を検出した。東側区画では遺構は存在しない。

・濠3010(環濠) 幅5.0~7.0m、深さ1.5~2.0mを測る。西側区画を画する。今回は北辺濠西半・中央濠・西辺濠の「コ」字状の濠部分を指す。西側区画には、居館主屋となる柱建物が存在するため濠の規模が大きい。中央の濠では東側区画から投棄されたと考えられる拳大の石が出土している。

・濠3011(環濠) 幅3.6~4.1m、深さ1.0~1.2mを測る。東側区画を画する。今回は濠3010から接続して北辺濠東半、東辺濠の「L」字状の濠部分を指す。

・柱建物2 西側区画には、柱間1間が2.6mの礎盤を置いた柱建物を梁行4間、桁行1間分を検出した。全体の4分の1を検出し、梁行4間、桁行4間の平面プランの縦柱建物と考えられる。1間が2.25mを測ることから、中間に東柱を用いて支えていたと考えられる。屋敷地の中心に位置することから上屋に相当すると考えられる。

・井戸3016 環濠居館跡西側区画の北西隅で検出した掘形直径6.0m、深さ5mの井戸(図11)。井戸枠上部は建築部材の古材を格子状に組んだ蓋材で覆われていた。井戸枠は、幅20cm、長さ180cmの板材を立てて円形に並べ、編んだ竹材で束ねて組んだ結桶を3段に重ねている。井戸枠の外側に「郡役所」と墨書きされており、明治時代に管理され、それ以前に構築されたことが判明した。掘削途上で崩壊の危険性を察知し、深度5mまでとした。

・溜井戸3017 環濠居館跡西側区画、柱建物2の北西側で検出した一辺2.0m、深さ0.6mの方形土坑である(図12)。瓦質土器の羽釜・火鉢の細片、土師質土器の小皿8点が出土した。

・土坑3018 環濠居館跡西側区画、溜井戸3017の南西側で検出した一辺2.0m、深さ0.6mの方形の土坑。遺物は全く出土しなかった。

・土坑3020 環濠居館跡西側区画、中央濠に近い位置で検出した。一辺1.0m、深さ0.3mの方形土坑。遺物は全く出土しなかった。

・溝3030 調査区の中央を南東から北西にかけて延びる素掘溝。幅2m、深さ0.5m、長さ50m分を検出した。埋土は、上層が黒褐色粘質土、中層が灰褐色砂質土、下層が灰色粗砂～砂質土で、遺物は土師器の杯・甕・壺があり、須恵器・ハソウからみて5世紀末から6世紀初めの開削と考えられる。遺物はそれぞれが間隔をおいて単体で出土していることから、意図的に廃棄された可能性が考えられる。

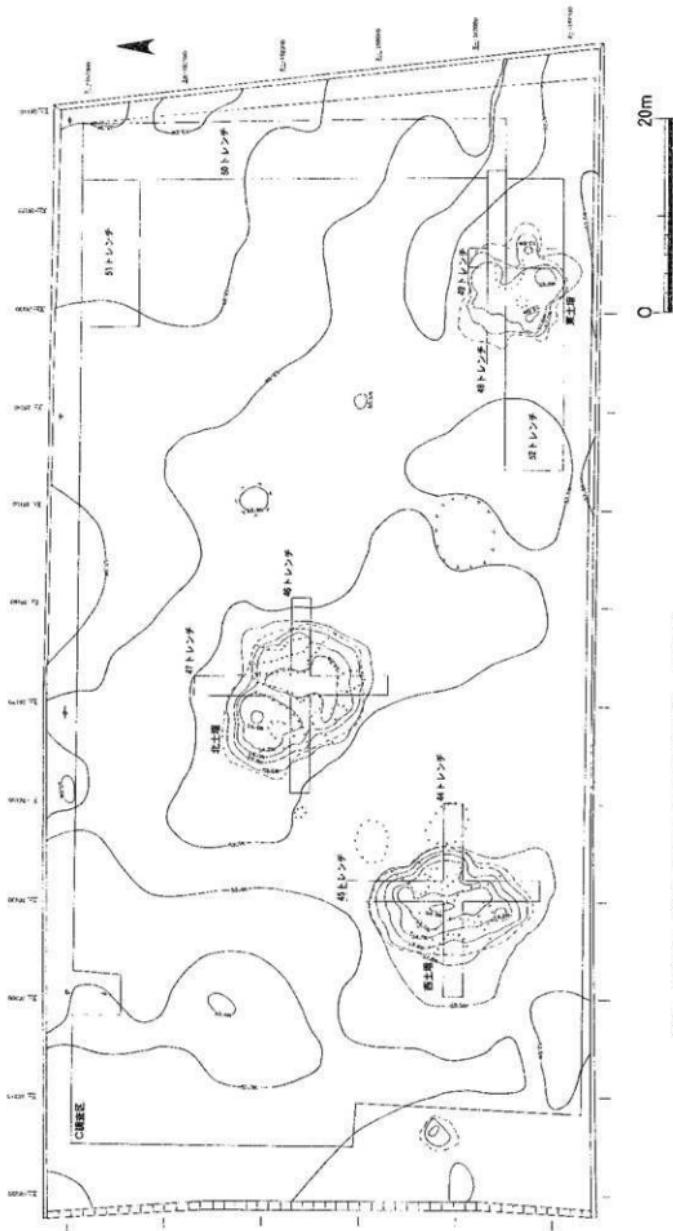
・溜井戸3031 調査区中央、直径0.8m、深さ0.2mの円形溜井戸。掘形中央に曲物を配しており、溜井のような機能を果たしていたと考えられる。

・溜井戸3035 調査区中央で検出した、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.4mの溜井戸。底部中央に直径0.35m、高さ0.15mの円形曲物側板の井戸枠材が据えられていた。土層断面を観察すると上面まで痕跡を確認できるため、もう1段積み重ねあげられていたことが判明した。

・溜井戸3036 調査区中央、溜井戸3035の北西隣で検出した、長辺0.95m、短辺0.9m、深さ0.55mの溜井戸。底部北西隅に直径0.2m、深さ0.2mの円形曲物側板の集水施設が据えられていた。

・井戸3038 調査区中央で検出した、直径1.0m、深さ1.2mの円形井戸。下部に木製漆塗柵が1点出土した。

図 6 C 地区 第44~52 レンチ配置図 ($S = 1 : 500$)



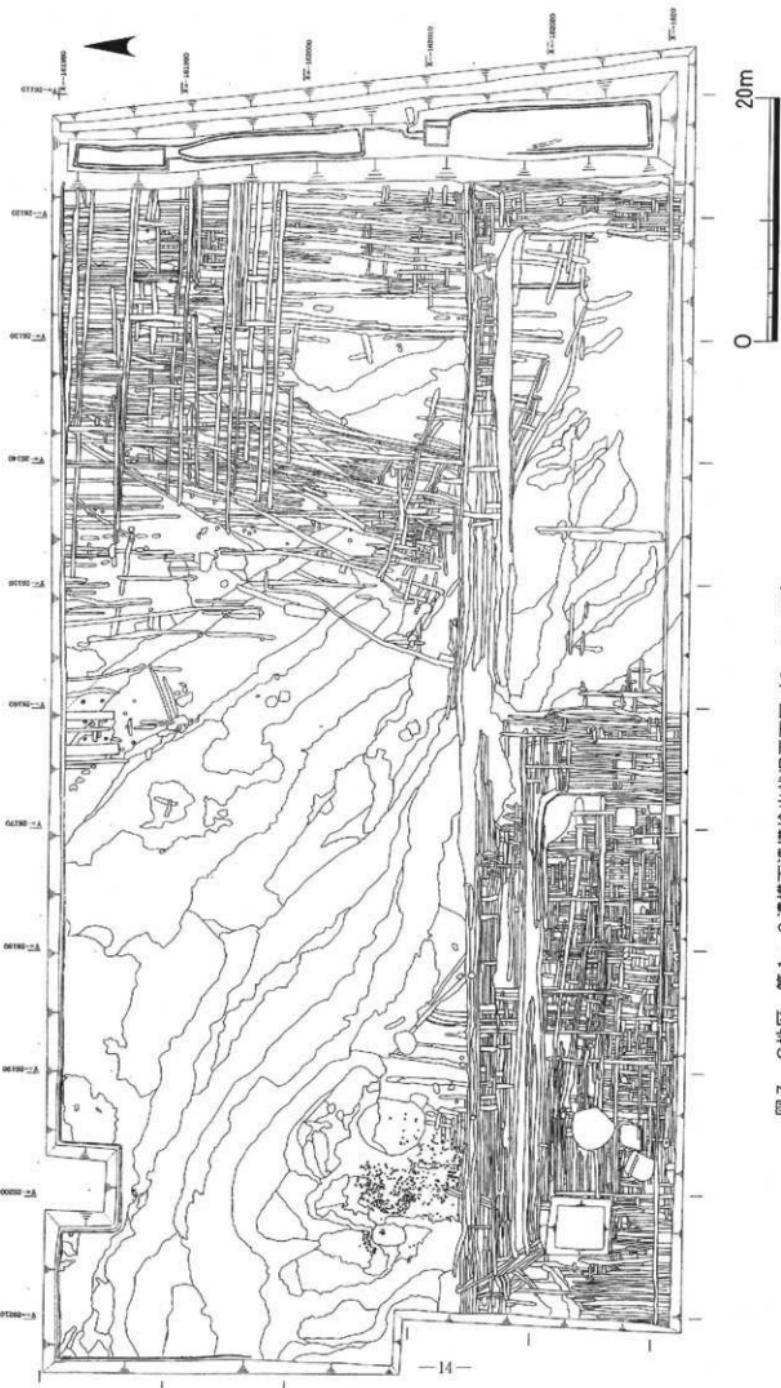


图7 C地区 第1~2层横面遺構検出状況平面図 (S=1:400)

20m
0

图 8 C 地区 第 1 ~ 2 道横面连接配图 (S = 1:400)

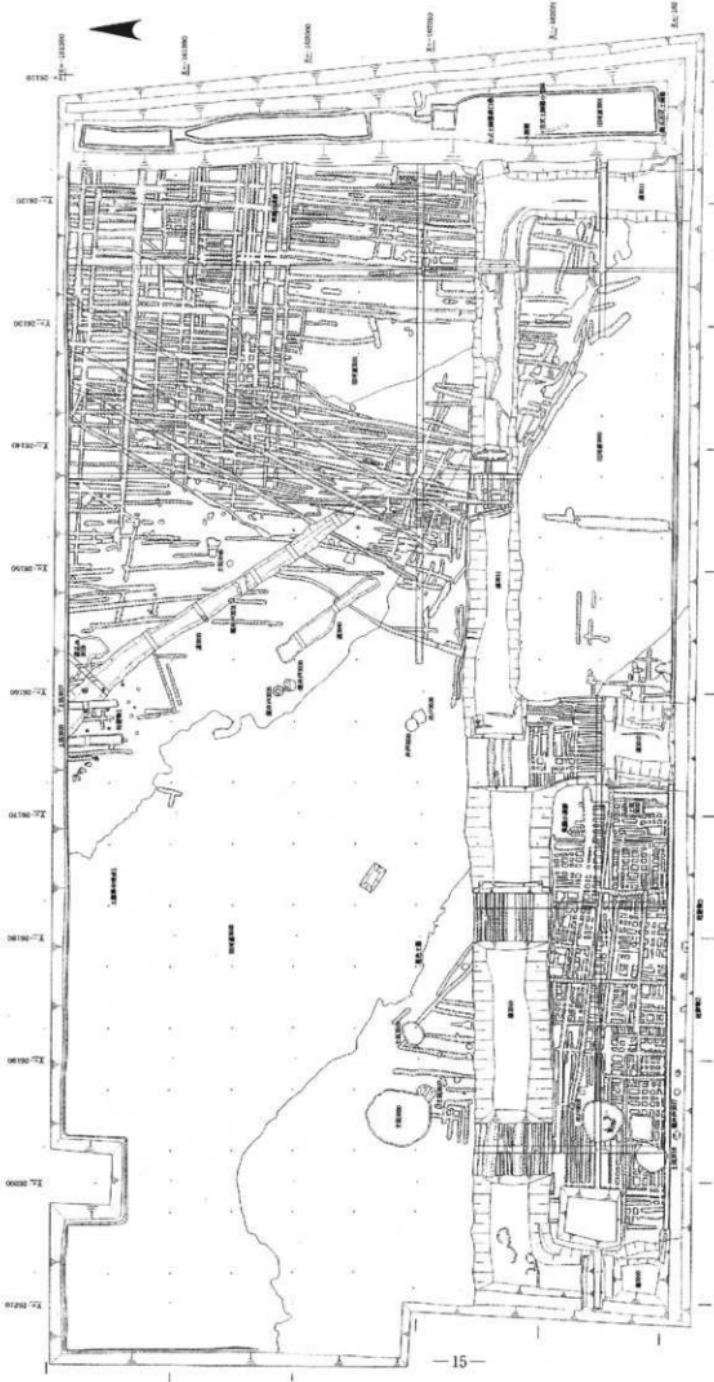
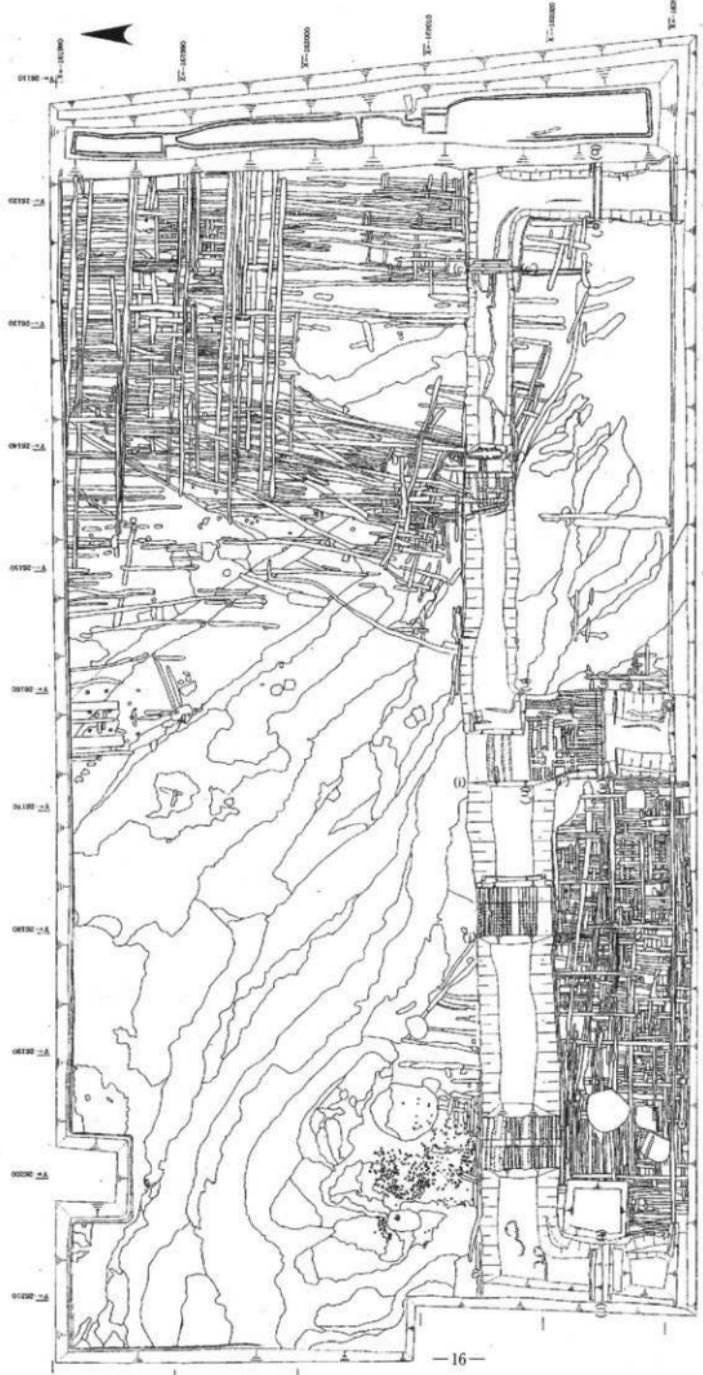


図9 C地区 環境屋敷地3010・3011土層断面配置図 (S=1:400)



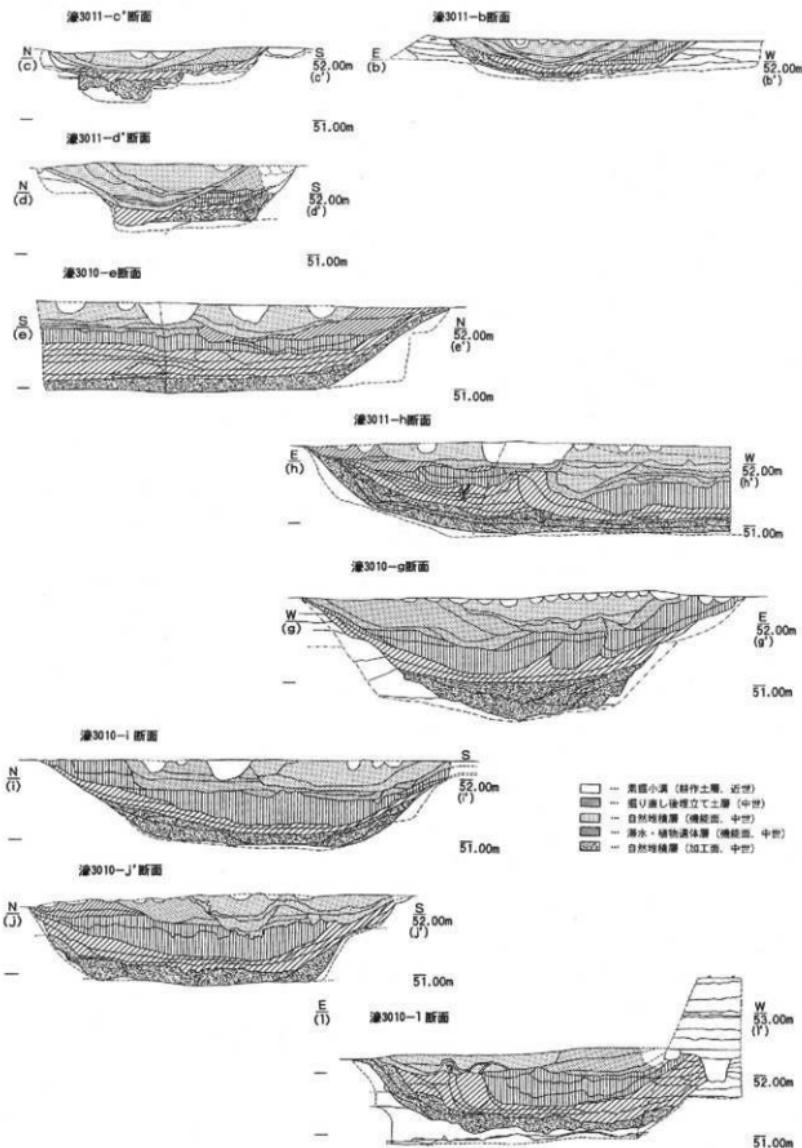


図10 C地区 環濠居館跡浜3010・3011各所土層断面図 (S=1:40)

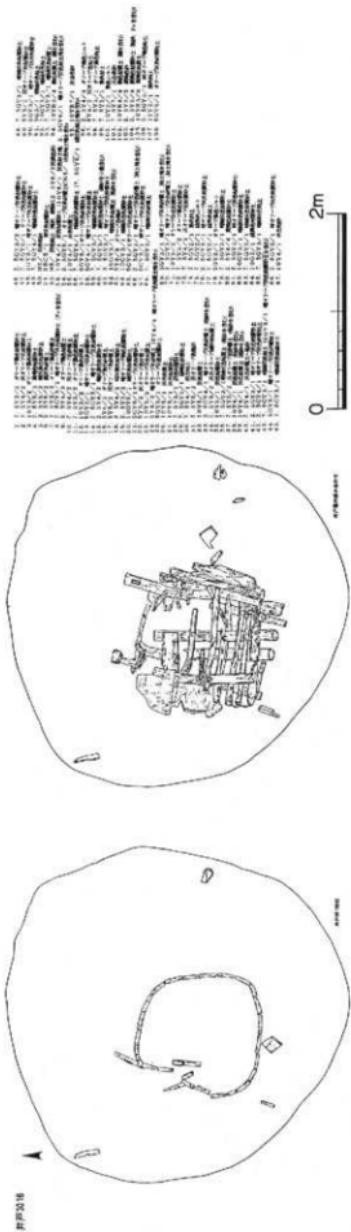
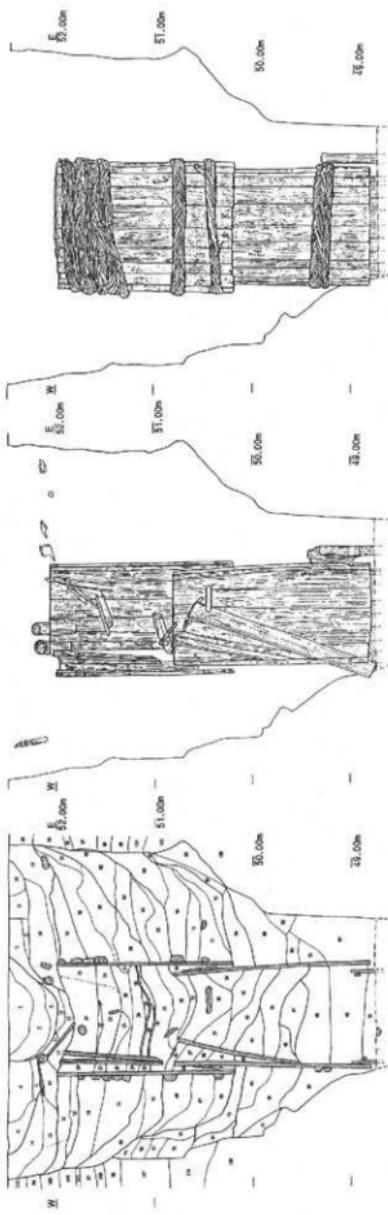


図11 C地区 井戸3016平面図・断面図・立面図 1 (S=1:50)



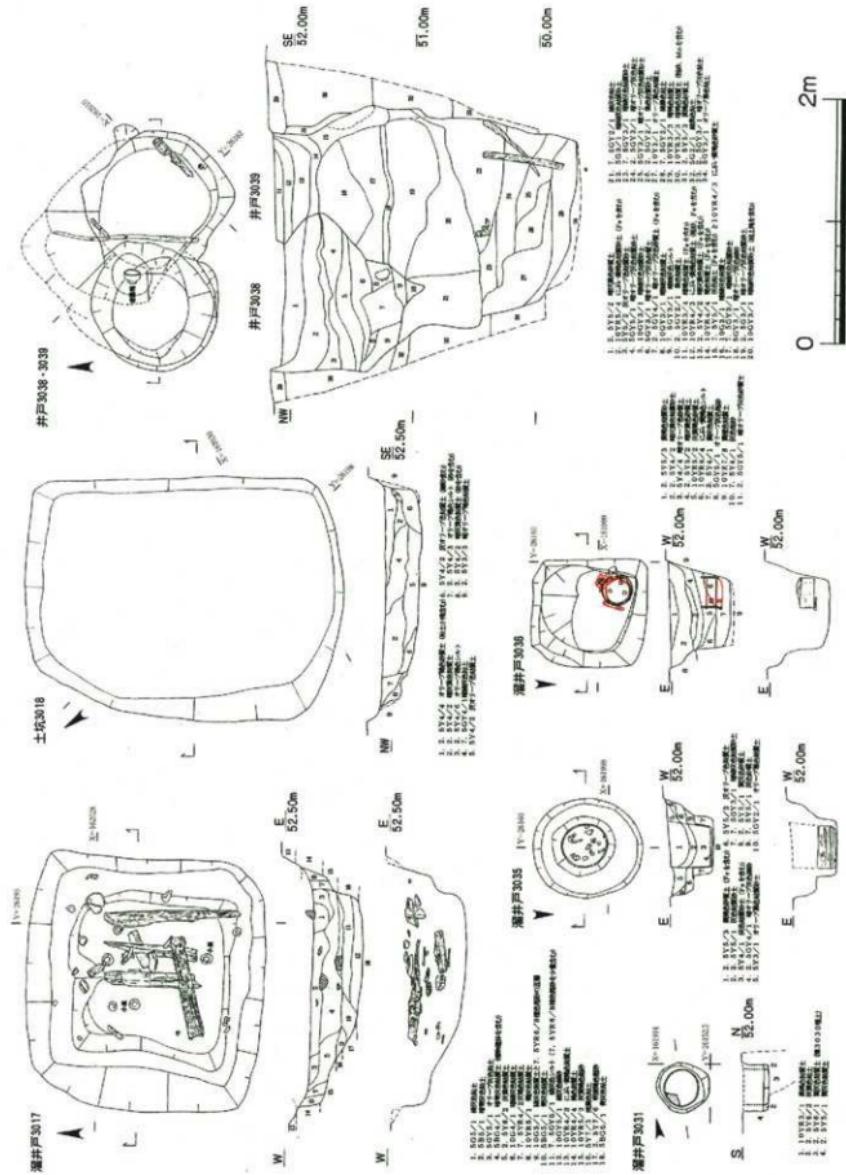


図12 C地区 土坑・井戸平面図・断面図・立面図 (S = 1 : 40)

- ・井戸3039 調査区中央、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ2.5mの長方形井戸。上方を井戸303Sに破壊されている。
- ・溝3040 調査区の中央を南東から北西にかけて延びる素掘溝で、溝3030の西側に平行して存在する。幅2m、深さ0.5m、長さ20m分を検出した。埋土は、上層が黒褐色粘質土、下層が灰褐色砂質土で、遺物は上師器、須恵器の細片が出上した。溝3030と同時に築かれたと考えられる。
- ・斜行素掘溝NS1000～i006 調査区の北東、旧河道3001の西岸で7条を検出した。長さ10～40m、幅0.3m、深さ0.2mほどで、約2m間隔をおいて南北一北東方向に掘り込まれていた。

土師器、須恵器の細片のほか、7世紀代の平瓦が含まれて出土した。この時点では旧河道3001は埋没し終える過程にある。旧河道3001の流れに平行して築かれているあたり、河岸を意識しているものと考えられる。湿地となっていたこの地点の土地開発に伴う排水溝と考えられる。

(4) D地区の調査（図13～17）

D地区は近鉄大仏線に面した、事業地南東側にあたる6,752m²を対象とした調査である。その中央を貫く区画予定街路部分に、第40・43・53トレンチを設定した。

第40トレンチ 第40トレンチは、幅6m×長さ100mの南北調査区。第1層・耕作土0.2m、第2層・床上0.1m、第3～4層・暗褐色粘質砂土の遺物包含層(0.4m～0.6m)が存在する。この下では標高52.6～52.8m付近の明灰褐色砂質土～粗砂を基盤層として遺構が広がることを確認した。この遺構面は第40～43トレンチ東半で広がっている。5世紀（古墳時代中期）～8世紀（奈良時代）の流路・土坑・井戸・柱穴・溝など、約250基の遺構が全城に広がっていることを確認した。遺構が穿たれている地盤は、しっかりした粘質土のほかに、湧水が著しい砂層が広がっていた。トレンチ北側では、第3層からは素掘小溝が掘り込まれており、ここに南北40条、東西10条の素掘り小溝群を確認した。これに切られる遺構があり、南西～北東へ蛇行する流路1条、ピット10基を検出した。第1層から陶器、第3層から瓦質土器片、第4層から黒色土器が出土したほか、流路からは、古墳時代後期の上師器・鉢・甕の破片、ピットからも土師器の破片が出土した。

トレンチ南側では、直径1m・深さ0.5mの円形土坑、一辺約1.2m・深さ0.2mの方形土坑のほか、直径0.2m～0.7mの柱穴・ピット群が多数検出されている。柱穴には柱材が残されているものも存在する。

・溝6 調査区中央で蛇行して検出した、幅6m、深さ0.5mの浅い南西～北東方向に延びている溝。元米、黄褐色砂質土ないしは粗砂へと変化する部分で砂層となっている埋没している旧河道の名残と考えられる。埋土を観察すると、流路走向に筋状に埋没しており、川底形状も流路にそった形状となっている。これは自然流路を人工的に改修した可能性があることを示唆している。また、溝6左岸の素掘小溝は、東西走向に掘られ、右岸のものは南北走向に築かれている。埋没後の上地境界に区画される位置として意識されていたと考えられる。遺物は、土師器の壺、鉢が各1点出土した。

・土器埋納遺構102 トレンチ中央北寄りで検出した、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.8mの楕円形土坑である。土坑の中央には口縁部を南側にして横倒しにして古墳時代中期の土師器・甕2点、

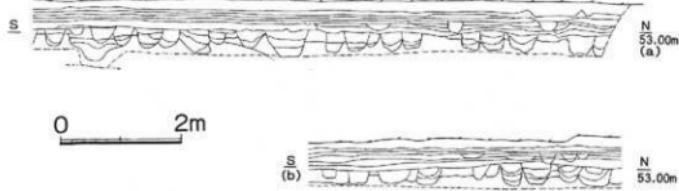


図13 D地区 第40トレンチ北半西壁土層断面図 (S=1:100)

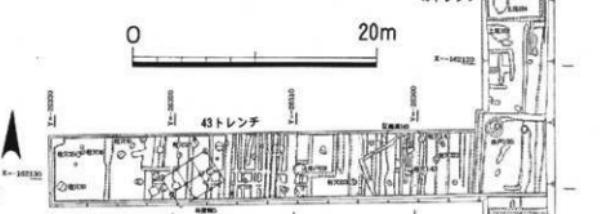


図14 D地区 遺構配置図 (S=1:400)

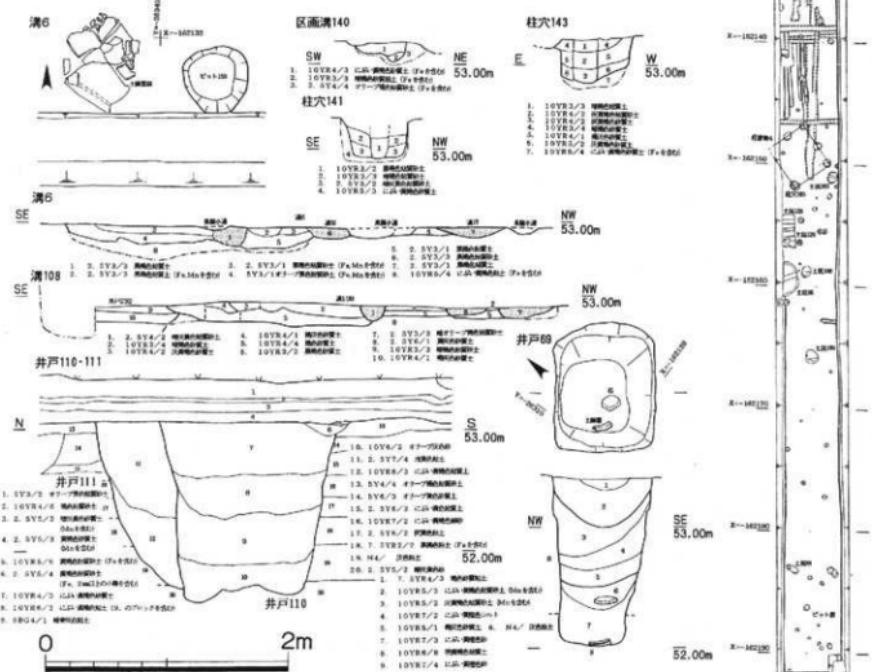
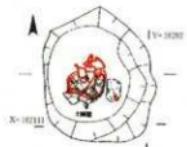


図15 D地区 柱穴・井戸・溝平面図・断面図1 (S=1:40)

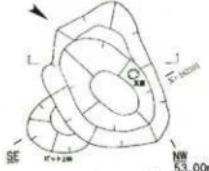
土器埋納遺構 102



E
W 53.00m

1. LOYR3/2 鉢内埋納
2. 鉢内埋納
3. 鉢内埋納
4. 鉢内埋納
5. 1. STY5/2 鉢内埋納
6. 1. STY4/2 鉢内埋納
7. 1. STY4/2 セーフティコットン
8. 1. STY4/1 鉢内埋納
9. 1. STY4/1 鉢内埋納
10. 1. STY4/1 鉢内埋納
11. 1. STY4/1 鉢内埋納

土坑 114

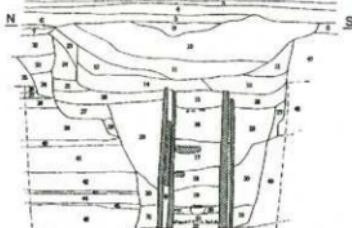
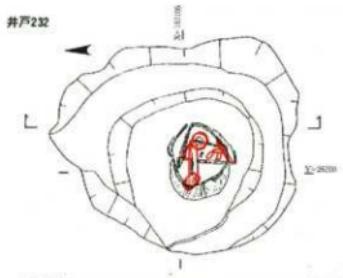


ピット 116

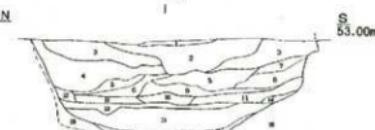
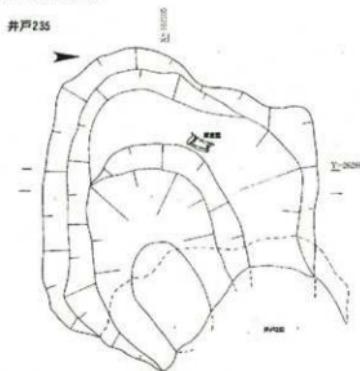


1. LOYR2/1 鉢内埋納
2. LOYR2/2 鉢内埋納
3. LOYR2/3 鉢内埋納
4. LOYR2/4 鉢内埋納

井戸 232

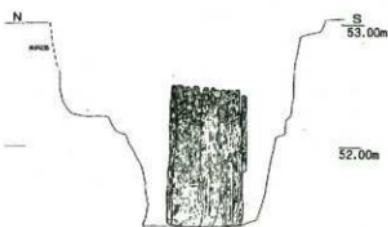


井戸 235



1. LOYR3/2 鉢内埋納
2. LOYR4/2 鉢内埋納
3. LOYR4/3 鉢内埋納
4. LOYR4/4 鉢内埋納
5. LOYR3/2 鉢内埋納
6. LOYR3/3 鉢内埋納
7. LOYR3/4 鉢内埋納
8. LOYR4/1 鉢内埋納
9. STY4/1 鉢内埋納
10. STY4/2 鉢内埋納
11. STY4/3 鉢内埋納
12. STY5/2 鉢内埋納
13. 2. STY4/1 鉢内埋納
14. 2. STY4/2 鉢内埋納
15. 1. STY4/1 鉢内埋納
16. 1. STY4/2 鉢内埋納
17. 1. STY4/3 鉢内埋納
18. 2. STY4/4 鉢内埋納

N

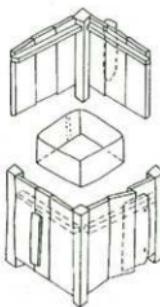
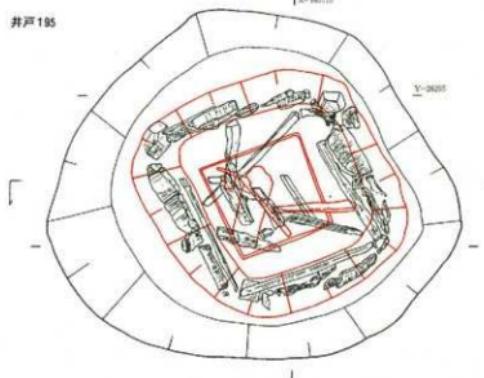


O
2m

図16 D地区 ピット・土坑・井戸平面図・断面図2 (S = 1 : 40)

井戸 195

[X=102.75]



井戸枠組合せ模式図

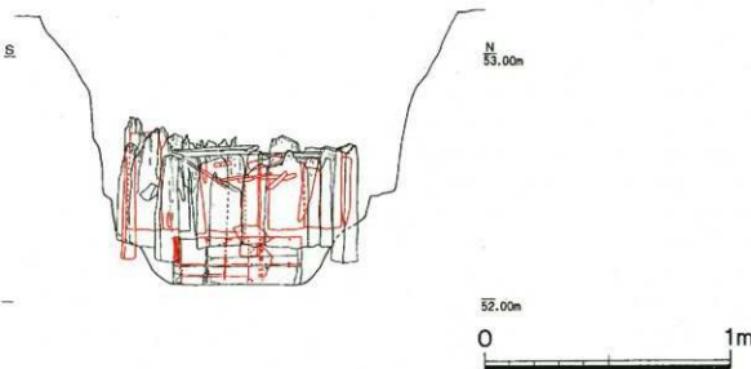
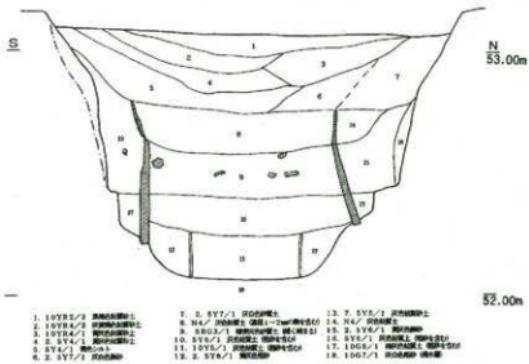


図17 D地区 井戸195平面図・断面図・立面図3 (S = 1 : 20)

壺1点が埋納されていた。

・井戸110・111 トレンチ中央やや北寄りで検出した、素掘りの円形井戸である。井戸110は直径1.5m、深さ1.5m、井戸111は直径1.1m、深さ1.4mを測る。井戸110が井戸111を破壊して構築されている。中近世のものと考えられる。

・土坑114 トレンチ北側で検出した、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.6mの椭円形土坑である。埋土は5層にレンズ状に重なり、第4層の黒褐色粘土層中に瓦質土器・壺1点を確認した。平安時代末期のものと考えられる。

・ピット116 トレンチ北側で検出した、直径0.5mの円形ピットである。層中で上師器1点を確認した。

・井戸195 トレンチ中央で検出した、長軸3.0m、短軸1.5m、深さ2.1mの円形井戸である。埋土は4層に重なる。井戸枠は外側の四隅に隅柱を立て、縦板材を一辺1.4mの方形に組んでいる。縦板横桟隅柱留めの井戸枠内には、一辺0.8m、高さ0.4mの方形曲物側板を転用して渠水枡がある。曲物側板は、湧水時の細砂流入を防ぐ目的で設置されている。土師器・甕數点を確認している。

・井戸232 トレンチ中央で検出した、長軸2.2m、短軸2.0m、深さ2.5mの円形井戸である。埋土は7層に重なり、第6層中に上師器・壺1点を確認している。井戸底部には、多数のドングリが出土した。井戸枠は、直径1mのケヤキを半截して刎り貫き、合わせ口にした井戸枠が使用されていた。土師器・須恵器のほかにシノノミ、クルミ等の堅果類も出土した。

・井戸235 トレンチ中央で検出した、長軸2.0m、短軸1.8m、深さ1.8mの円形井戸である。埋土は6層に重なり、第1層中に須恵器・甕1点を確認した。

第43トレンチ 第40トレンチ中央から西側に延びる区画予定街路部分に設定した、幅6m×長さ36mの東西調査区。途中、農業用水路が存在したためにトレンチを分割し、西側を第53トレンチとして調査した。東半では柱穴・ピット・区画溝を検出した。

・区画溝140 検出長4.8mの西端で直角に接続する3.5m、残存幅約0.3m、深さ約0.1～0.3mの矩形の溝。この内側に柱穴がいくつもあり、プランを見出せないが建物が存在するとみられる。この建物に付属する溝であろう。

・井戸69 一辺0.8m、深さ1.4mの方形の素掘り井戸で、現在でも湧水が著しい。中層から扁平な石が1点、底部から土師器甕口縁破片が1点出土した。

・柱建物4 梁行2間、桁行3間の総柱建物である。

・柱建物5 梁行2間、桁行3間の建物である。

・柱穴141 捜査は円形で、長軸0.6m、短軸0.55m、深さ0.35m。柱根が直径15cmの柱穴である。

・柱穴143 捜査は円形で、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.36m。柱根が直径20cmの柱穴である。

第53トレンチ 第43トレンチの西側延長上、幅6m×長さ15mの東西調査区。造成土（厚さ0.2m）下、耕作土0.2m、床土0.1m、暗褐色粘質砂土の遺物包含層（0.4m～0.6m）が存在する。この層中には素掘小溝が無数に掘り込まれており、耕作面が数面存在すると考えられる。この下からは黄褐色粘質土～シルトの基盤層が広がることを確認した。ここに南北10条、東西10条の素掘小溝群を確認した。これに切られる造構があり、南西～北東へ蛇行する流路1条、ピット10基を検出した。第1層から陶器、第3層から瓦質土器片、第4層から黒色土器片が出土したほか、

流路からは、古墳時代後期の土師器・鉢、甕の破片、ビットからも土師器の破片が出上した。

- ・溝6 最大幅3.3m深さ0.2mの浅い溝で、南西から北東方向へ蛇行していたと考えられる。河床内は掘り返された痕跡が認められ、古墳時代後期の土師器鉢、甕が出上している。
- ・ビット150 直径0.5m、深さ0.15m。溝6内で確認した。

(5) E地区的調査（図18・19）

平成14年度に調査を行った本調査北区・中央区・南区に挟まれた市道残部の調査である。市道は条里制の坪界にあたり、両区間の違構連続部分を明らかにするとともに条里界に関わる移行の存在が期待された。本調査中央区を挟んで東西に分かれるため、本調査中央西区・同東区と呼称することにした。

- ・本調査中央西区 調査面積は123m²である。基盤層は黄褐色粘質上で、本調査北区の自然河道部分を検出した。この埋土上に築かれている柱建物は2棟以上あり、方位に沿って建てられている。

- ・柱建物61 梁行2間、桁行2間以上の南北方向の建物。本調査北区での建物分類III類に属す。
- ・柱建物62 梁行2間、桁行2間の南北方向の建物。本調査北区での建物分類VI類に属す。

- ・本調査中央東区 調査面積は、418m²である。ここでは掘立柱建物群、井戸を検出した。本調査北区の北側の旧河道66の延長部分（旧河道2203）を検出し、縄文土器、サヌカイトが多数出土した。

- ・井戸2223 直径2.6m、深さ5.1mの円形掘形に、隅柱横桟縦板組枠を2段重ねた井戸。近世以降の農業用灌漑用のものであろう。

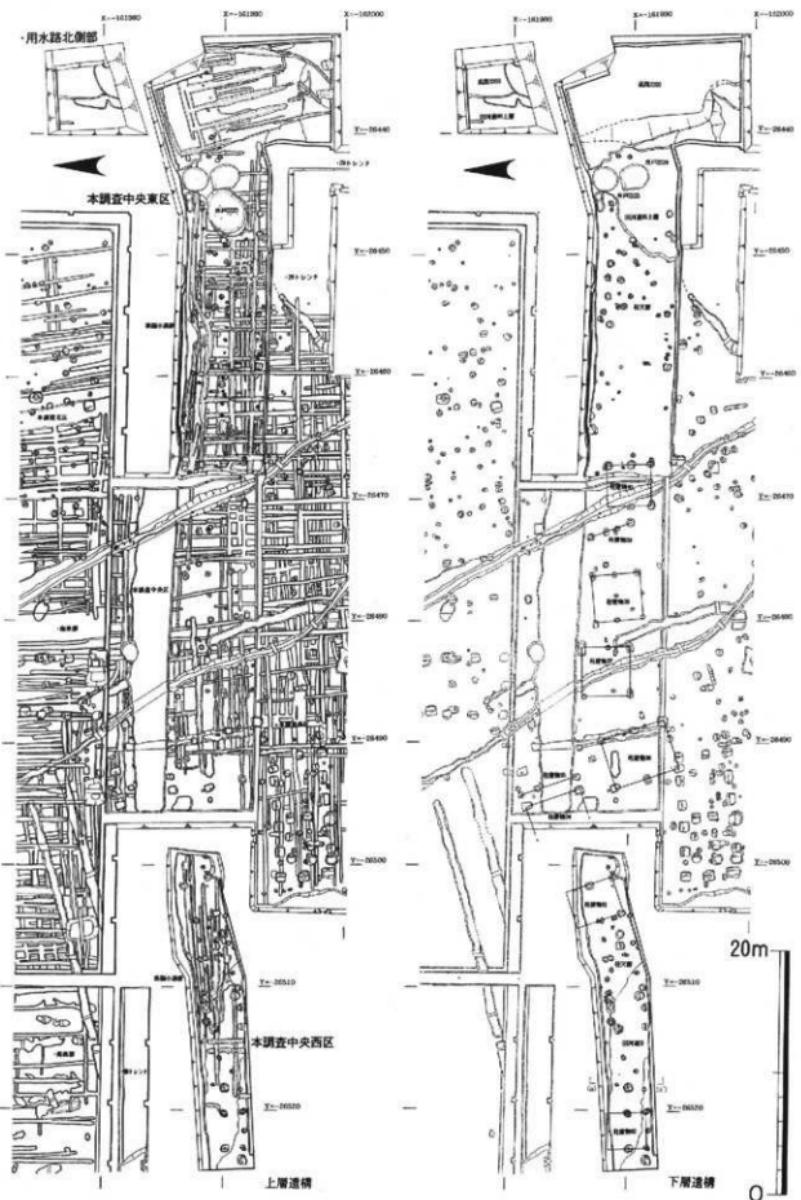


図18 E地区 本調査中央西区・中央東区 上層・下層遺構配置図 (S = 1:400)

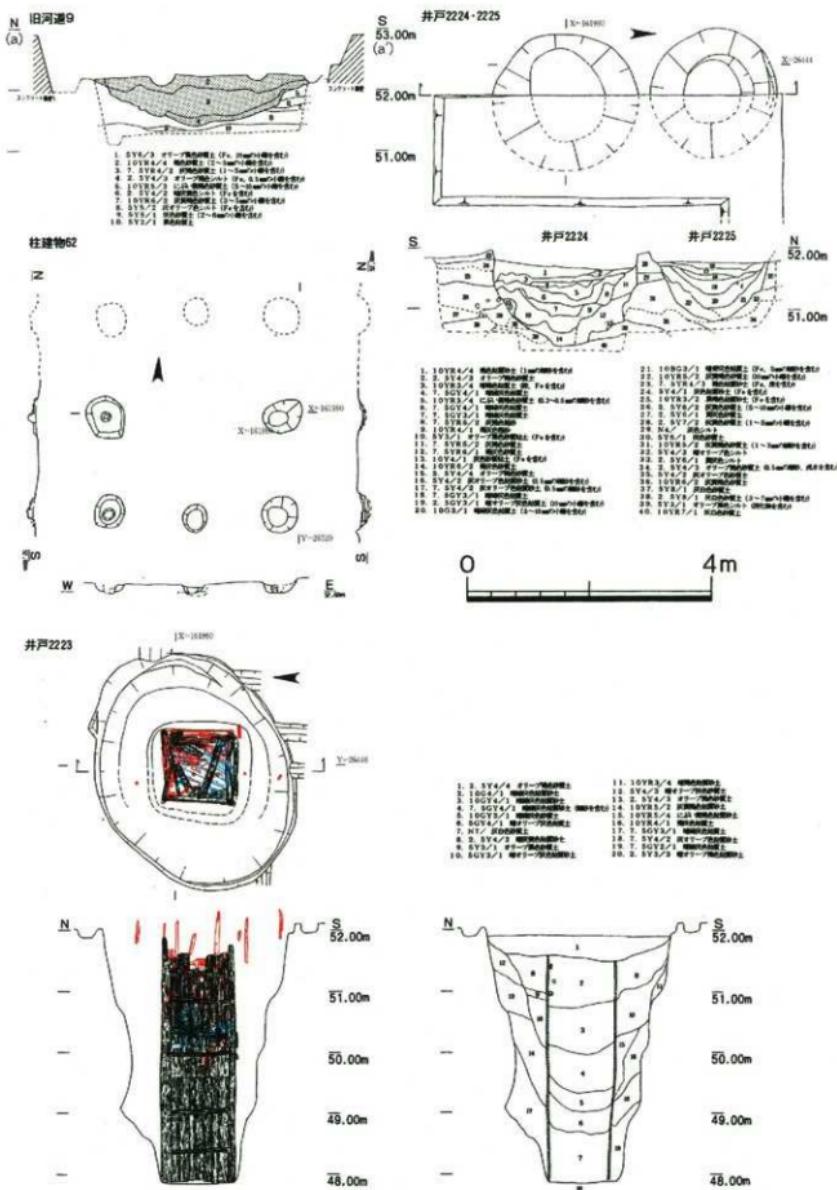


図19 E地区 柱建物・井戸・旧河道平面図・断面図・立面図 (S=1:80)

3 出土遺物

出土遺物は、コンテナにして100箱分が出土した。その種類は、サスカイトの石核・剥片・未成品・製品、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塙土器、円筒埴輪、黒色土器、上師質土器、瓦質土器、瓦（平瓦・丸瓦）、陶器、磁器、木製品（綱・曲物・柵）、石製品（凝灰岩切石・磨石・砾石・紡錘車）、錢貨（兔永通宝）、種子（ドングリ・クルミ）である。

整理・復元作業を経て実測可能なものは図化し、その幾つかを報告する（図20～25）。

1～10はA地区で出土した。1は上師質土器の甕である。2は土師質土器の小皿である。3は磁器染付の椀で、高台を含めた底部が残存する。4は磁器染付の椀で、口縁部の破片である。5～9は須恵器である。5は有蓋高杯の蓋である。6は杯身で、口径11.0cm、器高5.2cm、最大厚0.7cmである。7は杯身で、口径11.9cm、器高4.8cm、最大厚0.8cmである。8は杯身で、口径12.7cm、器高4.9cm、最大厚0.8cmである。9は高杯で、脚部は欠損する。杯部口径15.6cm、器高6.7cm、最大厚0.8cm、脚部厚1.3cmである。10は上師器甕である。口径14.3cm、器高17.2cm、胴径15.0cm、最大厚1.0cmである。

11～15はE地区で出土した。いずれも縄文土器である。

16～25はC地区で出土した。16～23は古式土器である。16は小型丸底鉢。17～19は直口壺。20は甕で、胴部は球形を呈す。口径13.2cm、器高24.0cm、胴径22.3cm、最大厚0.7cm。21～23は山陰系の甕である。21は、口頭部が残存する。外面はナナメハケ、内面はヘラケズリを施している。胎土が白っぽい。口径25.2cm、残存高9.2cm、最大厚0.7cmを測る。22は口頭から胴部にかけて残存している。口径23.7cm、残存高19.7cm、最大厚1.2cmを測る。23は口縁部が欠損する。残存高34.7cm、胴径29.4cm、最大厚1.2cmを測る。24は須恵器・有蓋高杯の蓋である。口径12.2cm、器高5.3cm、最大厚0.7cm、つまみ径3.2cm、高0.8cmを測る。25は須恵器の杯蓋である。口径13.8cm、器高5.8cm、最大厚0.7cmである。

26～44はC地区から出土した。25～30は七師質土器の小皿で、瀬井戸3017から出土した。いずれも口径10.0cm前後、器高2.0cm前後、最大厚0.5cm前後。内外面ともナデと指頭圧による調整。32・33は上師質土器の土釜である。32は口径20.7cm、器高8.5cm以上、鈎部径27.4cm、最大厚0.7cm。口端部から1cm程が胴部をほぼ直角に内傾して口縁部を形成している。外面は板ナデ。内面は押工具痕が残る。大和型。33は口径23.3cm、器高8.5cm、鈎部径30.6cm、最大厚0.8cm。外面が板ナデ、内面にヨコハケが認められる。和泉型。34は瓦質土器の擂鉢である。口径33.5cm、器高12.5cm以上、最大厚1.2cm。35～38は土師質土器の小皿である。瀬3010・3011から出土した。35・36は口径8.0cm前後、器高1.5cm前後、37・38は口径10.0cm前後、器高1.7cm前後で、いずれも最大厚0.4cmである。内外面ともナデと指頭圧による調整。39は瓦質土器・奈良火鉢の深鉢で、井戸3017から出土。口径32.7cm、器高17.3cm以上、最大厚1.3cm。口頭部に小凸帯を2条ずつ造らせ、その空間に長方形の押型文を連続している。40・41は井戸3016から出土。40は陶器の椀で、高台を含む底部が残存。高台径4.3cm、器高2.5cm、最大厚0.7cm。41は磁器・染付の椀で、高台が残存。高台径4.2cm、器高1.5cm。42は須恵器の杯で、旧河道3100から出土した。口径20.0cm、器高5.5cm、最大厚0.5cmを測る。43は凝灰岩製不明石製品。規模は長辺21.5cm、短辺12.6cm、最大厚10.7cm。切石材で片面は平滑にして幅3.0cm程の縁取りを削りだ

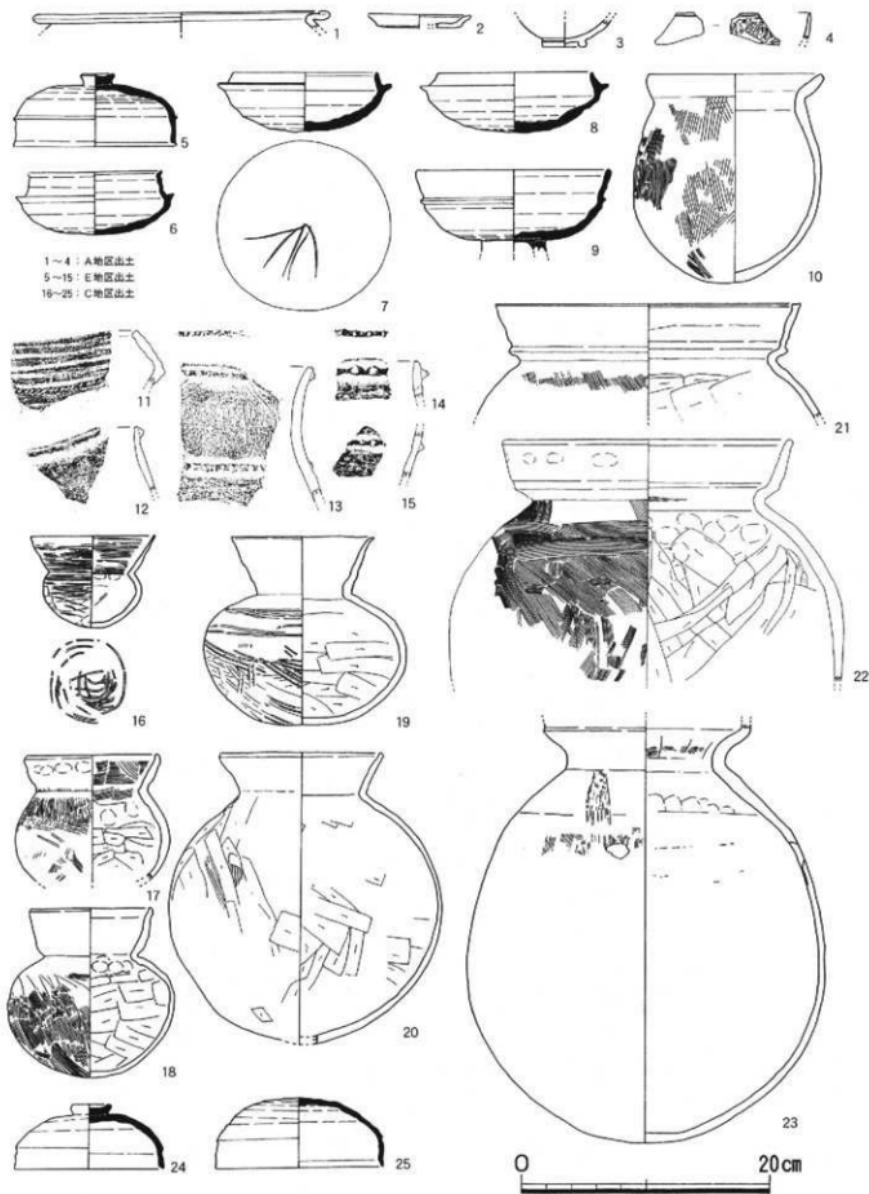


图20 五位堂区画第3次・A、C、E地区出土 土器実測図1 (S=1:4)

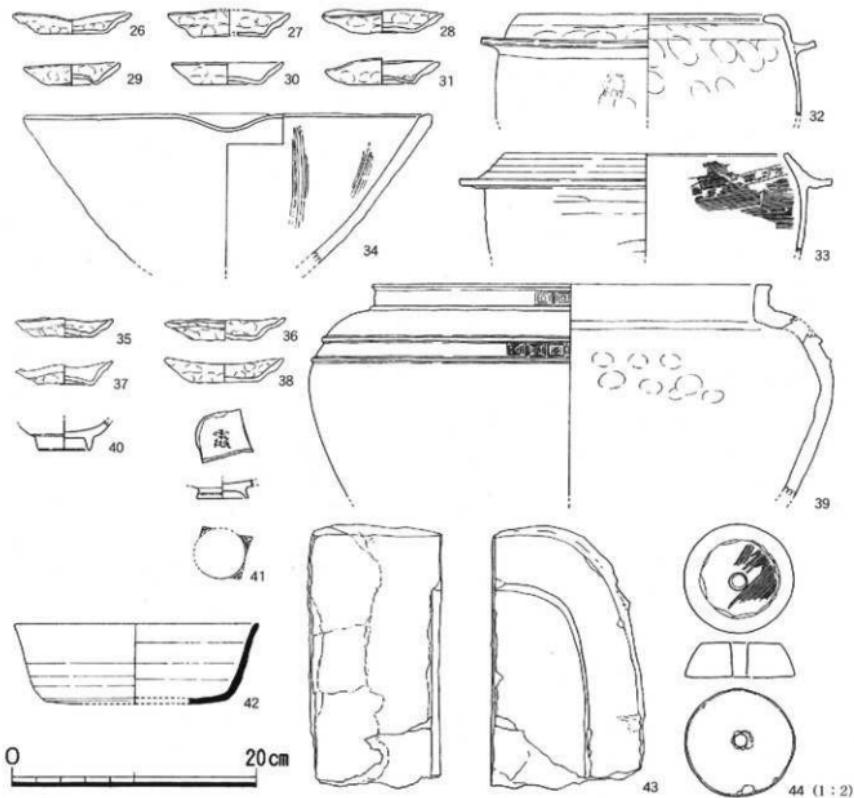


図21 五位堂区画第3次・C地区出土 土器・石製品実測図2 (S=1:4)

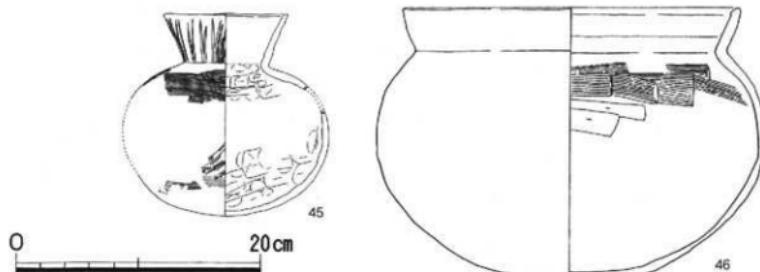


図22 五位堂区画第3次・D地区出土 土器実測図 (S=1:4)

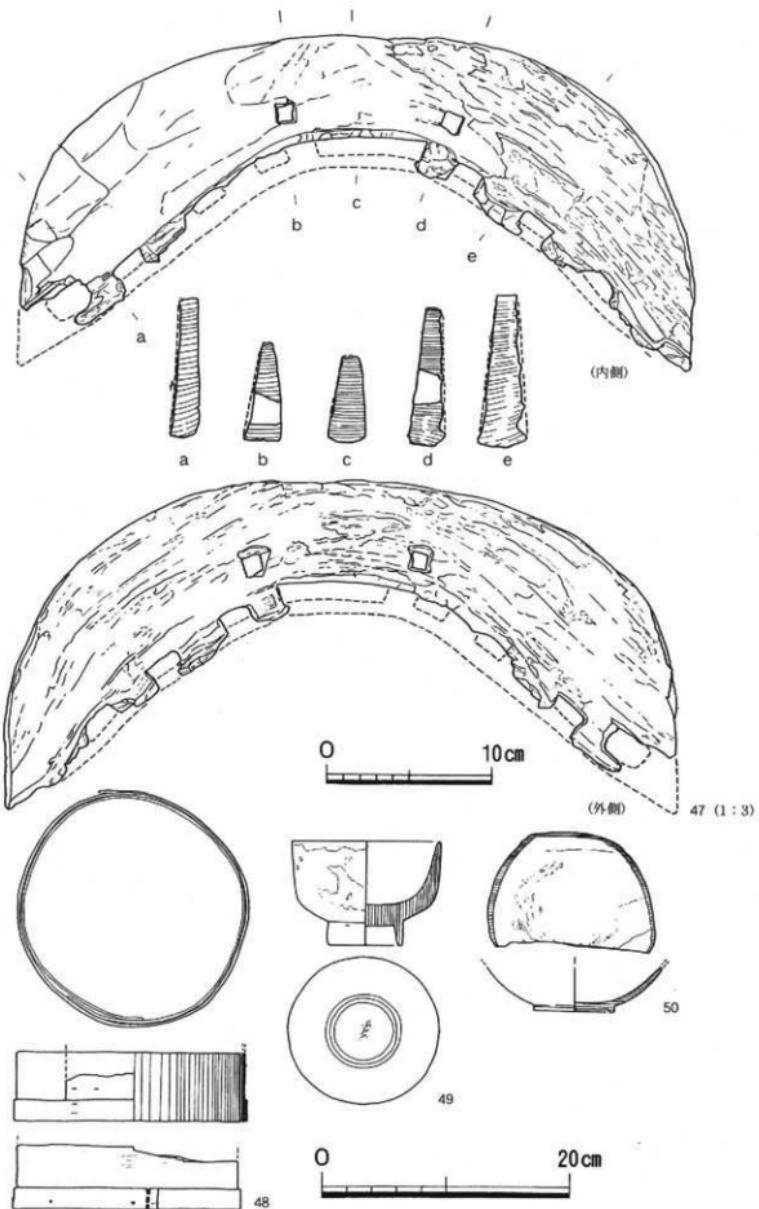
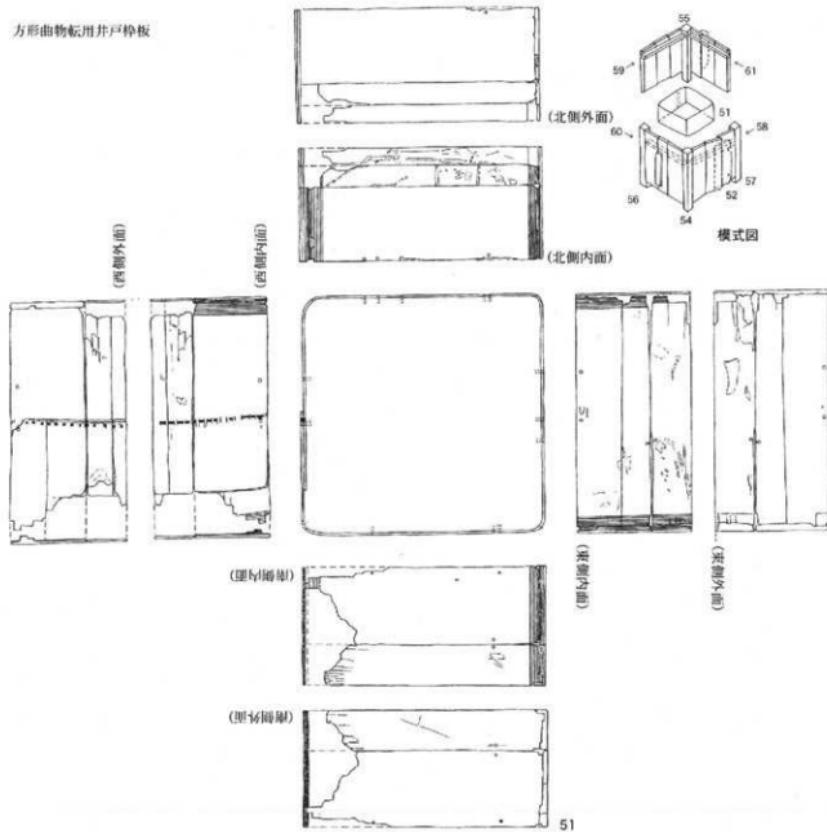


図23 五位堂区画第3次・C地区出土 木製品実測図 (S=1:3, 1:4)

方形曲物転用井戸枠板



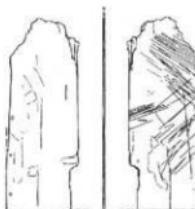
方形曲物底板転用井戸枠板



52



方形曲物底板転用組板



53



図24 五位堂区画第3次・D地区出土 木製品実測図1 (S=1:8)

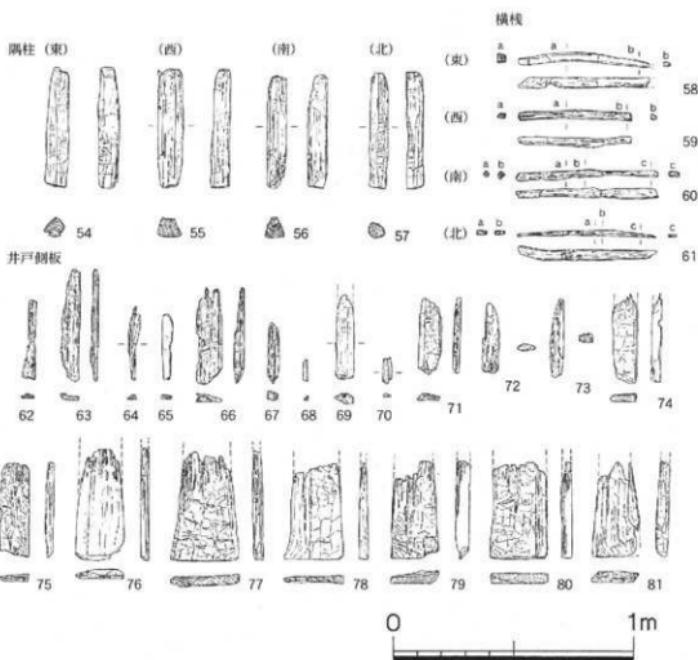


図25 五位堂区画第3次・D地区出土 木製品実測図2 (S=1:20)

している。被熱しており、側面にはこの削りだし面から2.0cm程までしか被熱していないため、削りだし面を上面として下部を地面に埋め込んで使用したと考えられる。切石材であるため、複数個を組み合わせた鋳型のようなものが想定できる。44は滑石製筋鍤車である。直径4.5cm、最大厚1.4cm、円孔0.38cmを測る。45・46はD地区で出土した。45は土師器の直口壺で、土器埋納遺構102から出土した。口径10.2cm、器高と胴径は16.8cm程である。外面は口頸部がタテミガキ、胴部がヨコハケ。内面は成形後ヘラケズリが認められる。46は土師器の鉢で、溝6から出土した。口径27.5cm、器高22.3cm、胴径31.7cm、最大厚0.8cm。外面は摩滅、内面は肩部でヨコケズリが認められる。47~50はC地区で出土した木製品である。47は木製鞍で、後輪であろう。旧河道3001から出土した。48は円形曲物側板で、井戸3035で出土した。49は黒漆塗椀で、井戸3038から出土した。50は丹塗椀で、濠3010から出土した。51~81はD地区・40トレンチ井戸195から出土したものである。51は方形曲物側板で、井戸枠材として転用されていた。52は方形曲物底板で、井戸枠材として転用されていた。53は方形曲物底板で、刃物傷の残存から俎板として使われた後、井戸に投棄されたと考えられる。54~57は井戸枠の隅柱材である。58~61は隅柱材と組んで井戸枠の骨組みを構成する横棟である。62~81は骨組みがなされた井戸枠に立て列べられた井戸側板である。

IV 平成16年度（五位堂区画第4次）調査概要

1 はじめに

平成16年（2004）度の第4次調査は、前年度に上層調査を実施したC地区（小字・葛上）の下層調査を継続して実施した。ここから西側に延長する河川付け替え工事予定地（小字・川辺ノ町）の調査を行い、T字計画の都合により、河川予定流路巾軸線より北側をF地区、南側をG地区と分割して調査を行った。F地区では北東隅で小規模な試掘調査（第51トレンチ）を行い、G地区では街区道路予定地の一部を第55トレンチと称して調査を行った。

調査区の設定は2004年5月に行った。調査はC地区的下層調査から始めて、2004年11月4日・5日に実地測量を行った。その後、F地区的調査を行い、2004年11月17日に航空測量を行った。続いてG地区的調査を行い、2005年2月22日に航空測量を行った。調査面積は4,743m²である。

調査期間は2004年5月29日～2004年3月19日で、最終的には3月27日で完了した。実働201日を要した。

調査区ごとに概要は次節以降のとおりである。

2 各調査区の概要

（1）C地区の調査（図26～28）

C調査区 前述したように、事業地東端の河川付け替え計画地と周辺街路予定地を含めた調査である。調査対象面積は6,730m²であるが、上層遺構についての調査（5,333m²）は、前年度に終えているため、上層の基盤層として検出していた旧河道2条部分（1,640m²）について、調査を実施した。

・旧河道3000 調査区の南東隅から北西隅を対角線状に検出した、幅20～30m、深さ0.7～1.2mの旧河道である。河床標高より、南東隅から北西隅方向に流下していたと考えられる。埋土は砂層、粘土層、砂質土層の3つに大別でき、河道内での時期別流路がある程度推測可能である。河道内には木製杭を使用した遺構が検出された。直徑0.1～0.3mで、長さが1.5mほどである。これぞ列状に並べて護岸状遺構、堤防状施設、橋脚施設を構築している。護岸施設は、調査区南東側・中央部・北西部で検出し、堤防状施設は、調査区北西部で検出した。直徑0.1m未満、長さ2.0m未満の木製杭を数条列べて打ち込み、内側に土砂を入れて構築している。河川を横断せずに北岸から途中で途切れ、橋脚遺構が南岸に残されている。南側に迂回して流水していたことが河道形状より判断できる。大阪府・五反島遺跡に類似がある。橋脚遺構は直徑0.3m程の木柱2本で一対をなして直立させて打ち込んでいる。直近では同様の木柱は存在せず、距離をおいて検出することができる。大阪府・巣本遺跡に類似がある。調査時、漁労施設の「釣」に似た遺構として2条の杭列を釣状遺構としたものは、護岸状遺構である。大阪府・佐草遺跡に類似が知られる。

遺物は、サヌカイト剥片、土師器、須恵器、被焼痕のある凝灰岩切石が各所で出土する。これらに混じって円筒埴輪、蛇紋岩製の勾玉、木製駒や、検出面下約2mの褐色粗砂の河床では、川原寺式軒丸瓦、仏陀寺型式の壇、斎串などの飛鳥時代の古代寺院を想起させる遺物があり、堤防、橋脚以降周辺では、複弁八弁蓮華紋軒丸瓦、均整唐草紋軒平瓦、墨書き土器、人面墨書き土器、上馬、馬齒などの奈良時代の「祓え」の儀式に使用される律令祭祀に関わる遺物が出土した。中央南岸

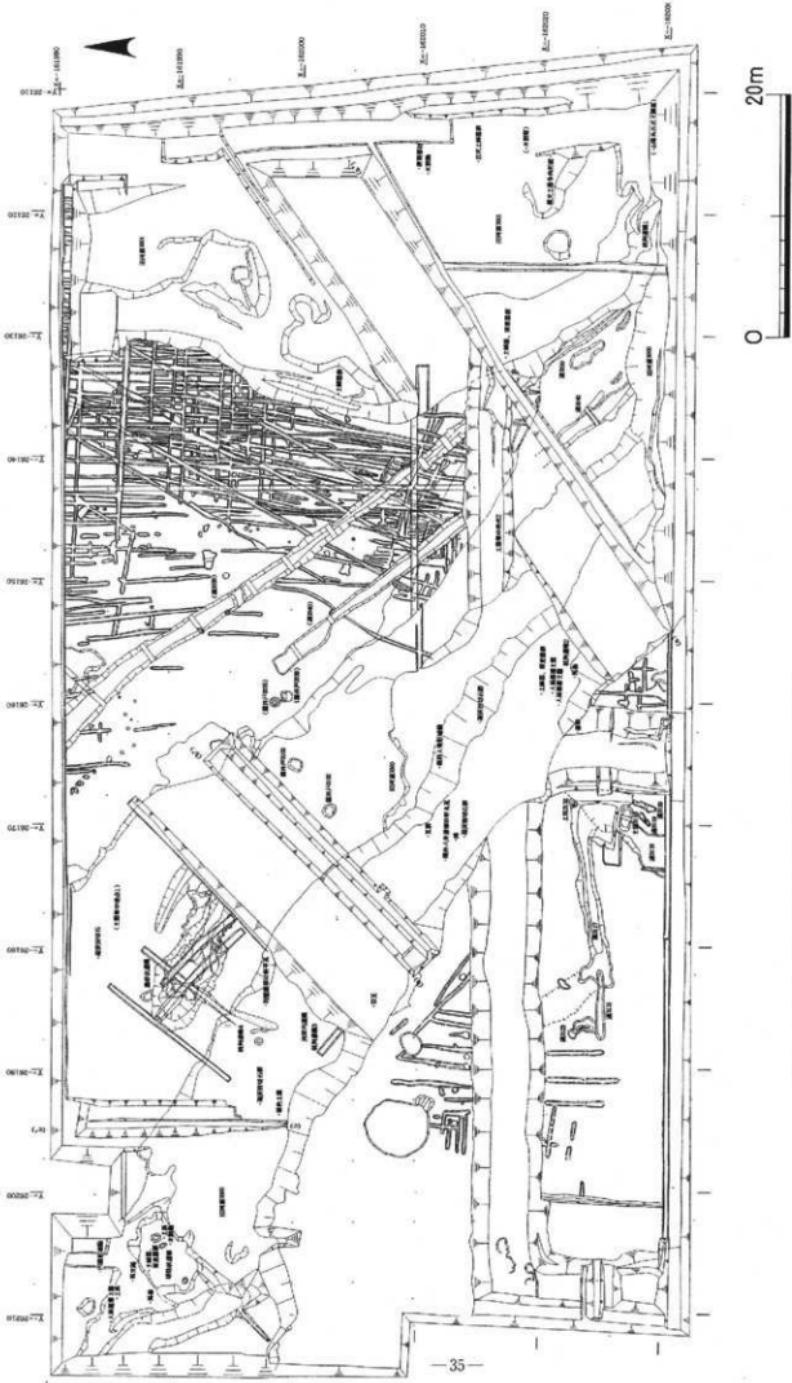


图26 C地区 第3道槽面支撑配置图 ($S = 1 : 400$)

で平安時代の土師器が出土し、旧河道の埋没年代を示すものである。これらの各時代の遺物が集中する地点と土層断面を対応させ、粘土～砂～シルトの互層の埋土はおおよそ3時期に大別される。それぞれの層厚は折り重なるように堆積して形成されているため地点ごとに異なるが、これらに含まれる遺物の種類や量から、流路の位置が変化していることが判別できる。完形品が多く含まれ、付近で投棄されたと考えられる。

・旧河道3001 調査区の南東隅から北東隅までの東側を占めるように検出した自然河道である。調査区南東隅で旧河道3000と重複関係にあり、現在でも東隣を現在の葛下川が北へ流下している。幅は東岸が検出できていないため30m以上、延長60m分を「く」字型に検出した、深さ0.7~1.2mを測る。河床標高より、南東隅から北東隅方向に流下していたと考えられる。埋土は粗砂層、粘土層、砂質土層の3つに大別でき、上層の種類と量から河道内での時期別流路がある程度推測可能で、東側幅20m分が4~5世紀（古墳時代前期～中期前半）、西側幅20mが5~6世紀（古墳時代中期後半～後期）と流路区分できる。古墳時代前期から後期にかけての流路が存在する。古墳時代前期の遺物には古式土師器（山陰系）、木製軸があり、後期には土師器、須恵器がある。古墳時代前期～中期前半の流路からは、木製品と土器が出土している。木製品では輪（長さ1.2m）と穴が加工された建築部材が砂層の下の黒色粘土層から出土した。粘土層は外気との密閉度が高く保水も充分だったため、完全な形を保っていた。その黒色粘土層の下の砂層から出土した鞍は注目される。古墳時代の木製鞍としては、全国17例目（奈良県内で3例目）にあたる。鞍の直近では、5世紀前半（古墳時代中期）の古式土師器が多く出土していることから、全国でも最古級にあたる。わが国における乗馬風習は、この時期に朝鮮半島南部から伝えられたと考えられており、近畿地方では生駒山麓の北西側（大阪府四条畷市周辺）に馬飼い集団が移り住み、馬を放牧しながら馬具を製作していたと考えられている。馬見丘陵の南西側には、比較的早い段階で乗馬の風習が伝わっていたことがこの出土によって考えることが可能である。

・溝3030 第3造構面は、調査区全域の硬い粘質土を地盤として存在する。それまでの造構がこの地盤を掘り込んでいるので、素掘小溝など造構が重なり合っているところでは、遺存度が低かった。しかし、それ以外でのこの地盤から掘り込まれているのは、古墳時代～奈良時代の2つの河川跡と溝3030など数基であった。第3次調査の検出部分より南側延長部分を調査し、確認した。

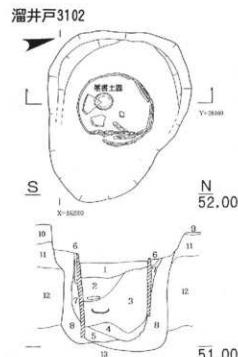
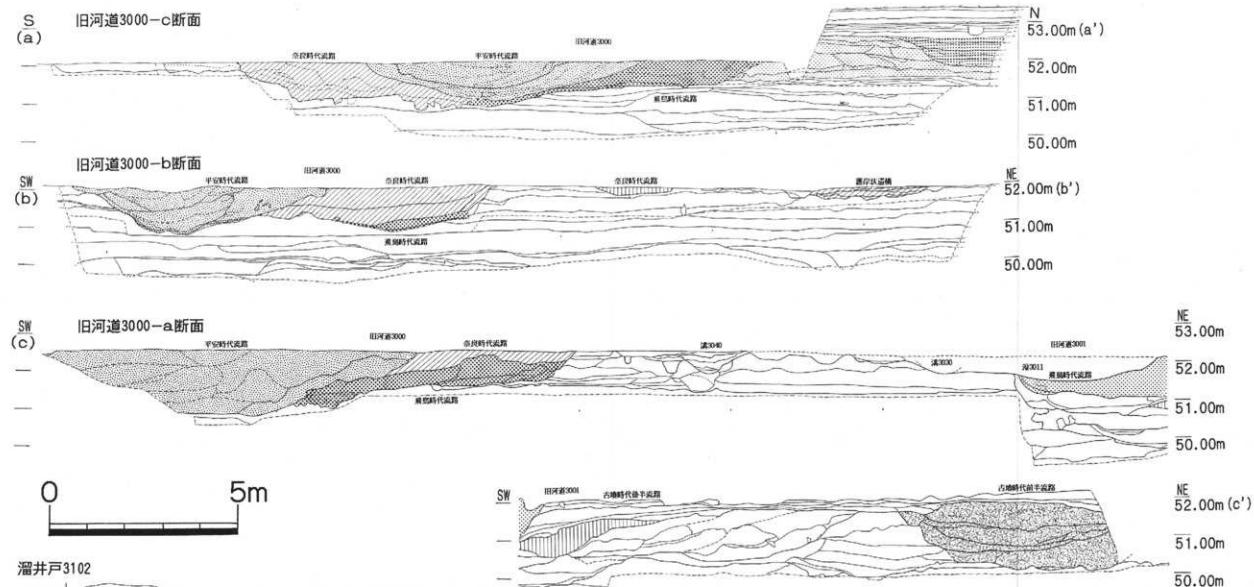
・溝3040 第3次調査で検出された部分より南側延長部分で調査し、確認した。

・溜井戸3102 調査区中央、旧河道3000右岸で検出した円形溜井戸で、直径0.95m、深さ0.8mを測る。

・溜井戸3103 調査区中央、旧河道3000右岸で検出した方形土坑で、長辺1.1m、短辺0.8m、深さ0.35m。

(2) F地区の調査

葛下川改修の付け替え地として、C地区からの西側延長部分である。工事行程の都合で北半を、F地区、南半をG地区として調査した。厚さ約0.4mの耕作土・床土下に褐灰色・黄褐色粘質土の遺物包含層下に明黄褐色粘質土の地盤が現われる。ここに東西・南北走向する素掘小溝以外に柱穴、区画溝、井戸など450基ほどの遺構を検出した。柱建物は総柱建物を含めて20数棟分を確認した。飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物が出土し、遺構は該期にそれぞれ帰属する。主な概



1. 5Y4/2 鉄オリーブ色細砂
2. 5Y5/2 鉄オリーブ色細砂
3. 5Y5/1 鉄オリーブ色粘土
4. 5Y5/1 オリーブ色粘土
5. 2. SY4/2 Rオリーブ色細砂
6. 2. SY4/2 Rオリーブ色細砂
7. 2. SY4/2 Rオリーブ色細砂
8. 5Y5/1 鉄色粘土
9. 5Y5/1 鉄色粘土
10. 1.OYRS/6 鉄色粘土 (Feを含む)
11. 2. 5Y6/2 鉄色粘土 (Feを含む)
12. 3.G3/1 鉄色粘土 (Feを含む)
13. SG3/1 鉄色粘土

1. 5Y4/2 鉄オリーブ色細砂
2. 5Y5/2 鉄オリーブ色細砂
3. 5Y5/1 鉄オリーブ色粘土
4. 5Y5/1 オリーブ色粘土
5. 2. SY4/2 Rオリーブ色細砂
6. 2. SY4/2 Rオリーブ色細砂
7. 2. SY4/2 Rオリーブ色細砂
8. 5Y5/1 鉄色粘土
9. 5Y5/1 鉄色粘土
10. 1.OYRS/6 鉄色粘土 (Feを含む)
11. 2. 5Y6/2 鉄色粘土 (Feを含む)
12. 3.G3/1 鉄色粘土 (Feを含む)
13. SG3/1 鉄色粘土

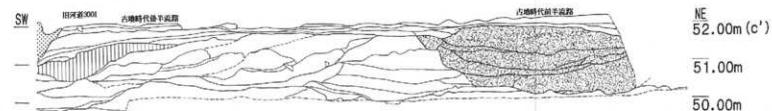
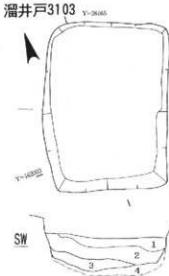


図27 C地区 旧河道3000・3001断面図1 (S=1:100)



1. 2. 5Y6/2 鉄黄褐色砂
2. 2. 5Y6/3 にじみ、黄褐色砂 (Fe、粘土塊を含む)
3. 5BG4/1 黄褐色砂 (Feを含む)
4. 2. DG15/1 鉄オリーブ色粘土



図28 C地区 溜井戸平面図・断面図・立面図2 (S=1:25)

要は以下のとおりである。

第54トレンチ C地区の北西隣、用水路を挟んで北側を4m×10mの東西調査区を設けて、試掘調査を実施した(図29)。造成土(層厚0.2m)以下、耕作土(層厚0.2m)、床土(層厚0.1m)を検出した後、褐色砂質上の遺物包含層(層厚0.7m)を挟んで、明黄褐色粘質土の基盤層を検出した。ここで、南北1条、東西1条の2条の素掘溝、井戸1基を検出した。

・溝3200 東西方向の素掘溝。幅1m、深さ0.5mを測る。溝3201と交差する位置で土師器の皿1点・甕3点が集中して出土した。

・溝3201 南北方向の素掘溝。幅0.7m、深さ0.5mを測る。調査区北壁付近で石組列を検出した。

・井戸3202 直径2mの円形掘形を持ち、立て板を方形形状に組んだ井戸枠を検出した。

・旧河道3000 基盤層以下で砂層を検出し、C地区から継続が想定される旧河道3000と判断した。ここでは須恵器・長颈壺1点が出土した。

旧河道の存在を確認し終えた後、F地区的本調査に移っていった。両区間の遺構連続部分を明らかにするとともに条里界に関わる遺構の存在が期待された。

F調査区 基本層序は、第1層が褐灰色砂質土層(層厚約20cm)の現水田耕土、第2層は明褐色砂質土層(層厚約5cm)で現水田床土、第3層灰オーリーブ砂質土層(層厚約5cm)、第4層は黄灰色砂質土層(層厚約10cm)で、いずれも古墳時代～近世の遺物包含層、第5層は黄褐色粘質土層(層厚約20～40cm)で、古墳時代～中世の遺構基盤層となっている。以下、第5層上面で検出した遺構について概要を述べる(図30～34)。

条里界に関わる遺構の検出は、後世の用水路改作により搅乱されており、確認されなかった。

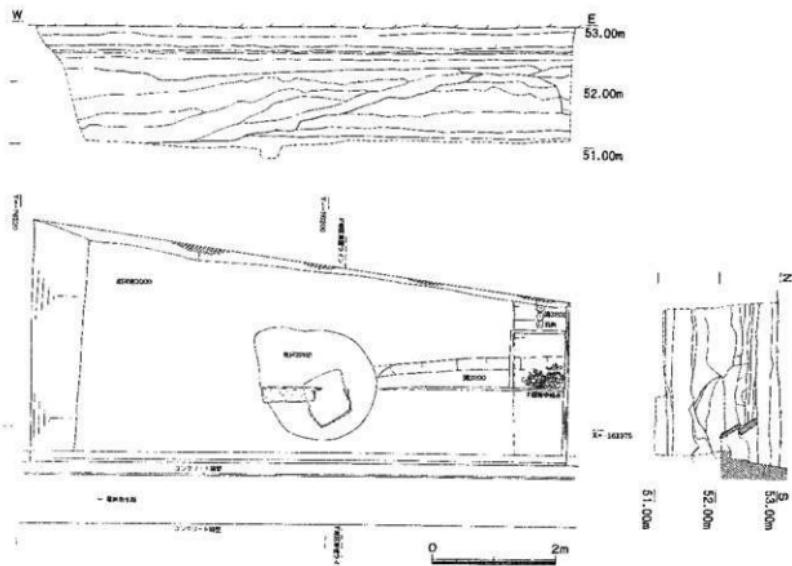


図29 F地区 第54トレンチ平面図・断面図 (S=1:80)

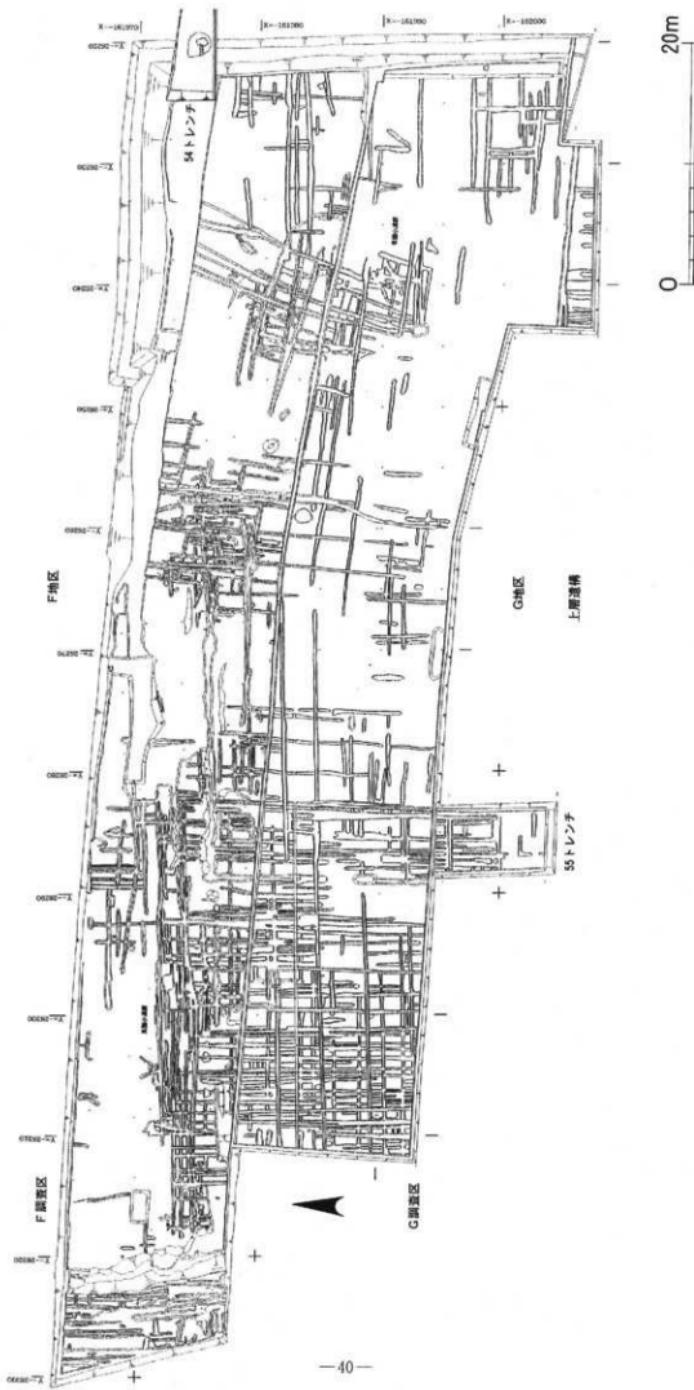


図30 F・G地区 上層遺構配置図 ($S = 1:400$)

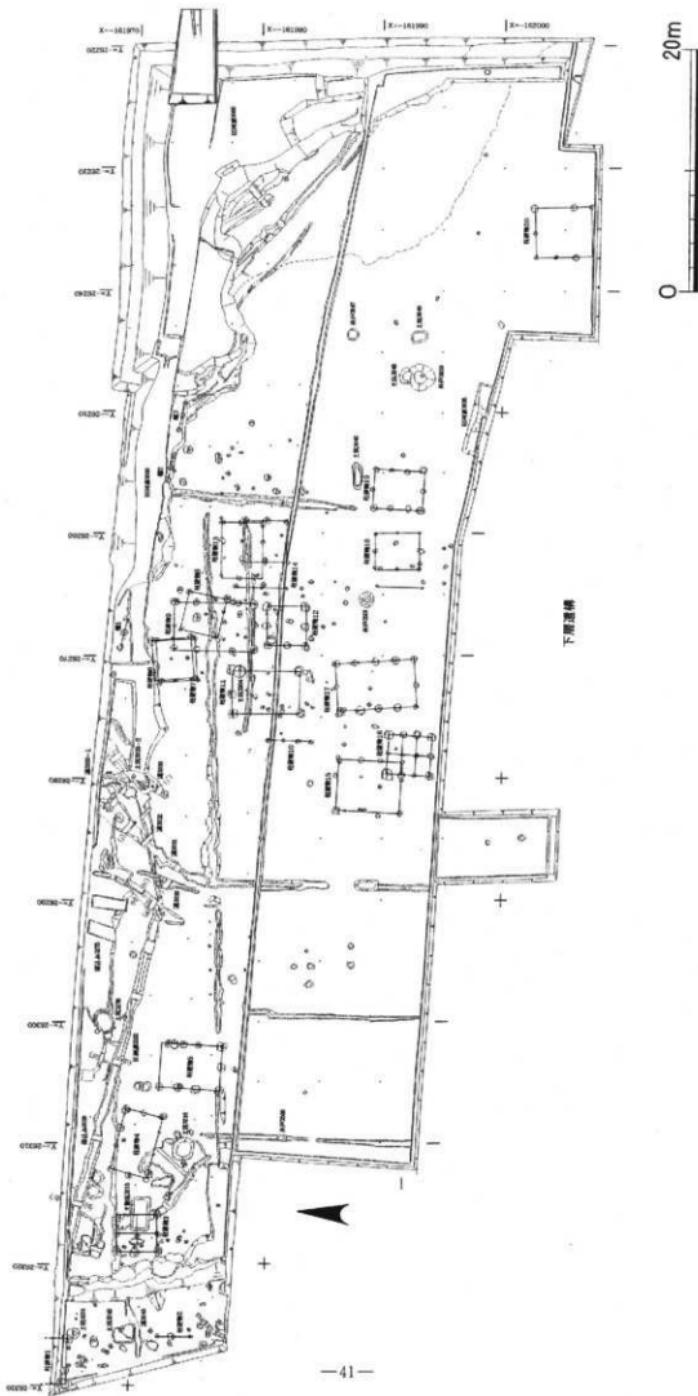


圖31 F+G地區 下層遺構配置圖 ($S=1:400$)

(3) G地区の調査

G調査区 基本層序はF地区と同じであり、以下、第5層上而で検出した遺構について概要を述べる（図30～35）。

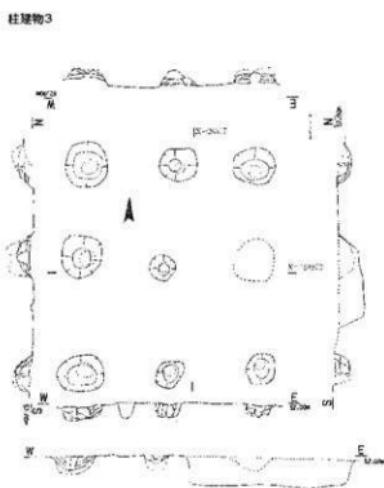
- G地区では、柱建物が数棟検出できた。
- ・柱建物10 南北3間分。隠し塙の可能性が考えられる。
 - ・柱建物15 梁行2間、桁行3間の南北方向の建物。
 - ・柱建物16 梁行2間、桁行3間の南北方向の総柱建物。
 - ・柱建物17 梁行2間、桁行4間の南北方向の建物。
 - ・柱建物18 梁行2間、桁行2間の南北方向の建物。
 - ・柱建物19 梁行2間、桁行3間の南北方向の建物。
 - ・柱建物20 梁行2間、桁行3間の南北方向の建物。
- この他、井戸を検出している。
- ・井戸3500 調査区西側にある直径0.8m・短径0.5m、深さ0.45mの楕円形井戸。8世紀の所産の上師器の把手付蓋の底が抜けた2個体を上下に重ね合わせて、2段積みの井戸枠とする。
 - ・井戸3501 調査区中央にある直径1.2m、深さ1.1mの方形の井戸。上方は方形になるように板材を立て並べ、下方は曲物側板を3段に積み上げて井戸枠としている。井戸枠内からは鉄製刀子、木製櫛の他に墨書き器6点が含まれていた。皿の裏側には、「天」「東」「西」などの漢字や記号が記されており、柱建物群の呼称や機能に関わって使用された可能性が考えられる。
 - ・井戸3647 調査区東側にある直径0.9m、深さ0.85mの円形の井戸。内部からは平安時代の土師器が出土している。
 - ・井戸3650 直径4.2m、深さ1.4mの円形の井戸。飛鳥時代の斜格子叩目平瓦を集水施設に転用していた。内部からは上師器、須恵器のほか、墨書き器も含まれていた。

この地区でも東西・南北走向に素掘小溝が存在するが、井戸3500はその上面を素掘小溝によって破壊され、井戸3647は素掘小溝を壊して築かれている。これにより、素掘小溝の築かれた時期が判断できる（平安時代後半）。

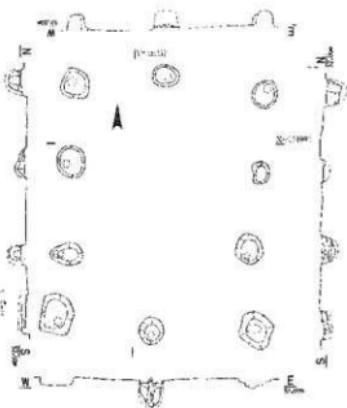
条界に関わる遺構の検出は、後世の用水路改作によって攢乱されており、ここでは確認されなかつた。

第55トレンチ G地区南側に設定した幅6m、長さ10mの南北トレンチ。素掘小溝、ピットを確認した。

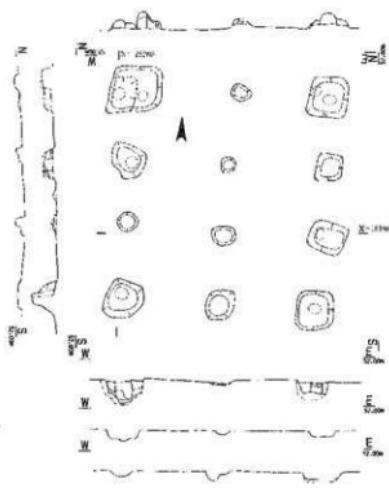
柱建物3



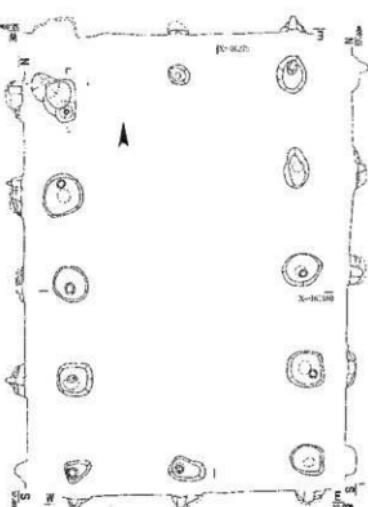
柱建物19



柱建物16



柱建物17



0 2m

図32 F・G地区 柱建物実測図1 (S=1:40)

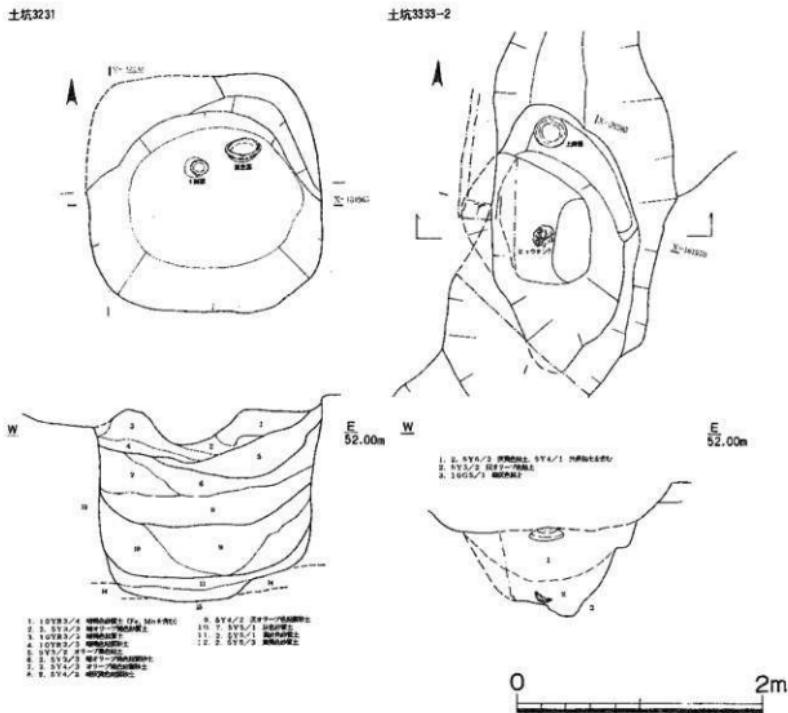
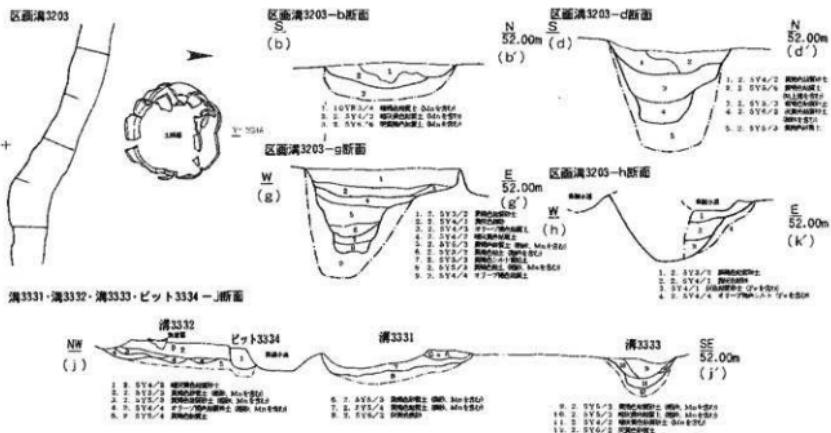


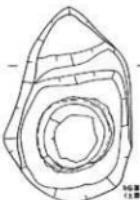
図33 F・G地区 土坑・溝平面図・断面図2 (S=1:40)

井戸3500

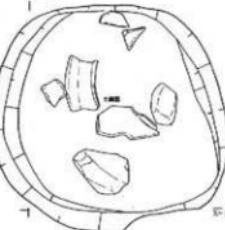
Y>20163



X>16182



井戸3647



X>16186

E

W

52.00m



W

52.00m

E

52.00m

1. SYA/4 ソーフ窓上
2. 2. SYA/3 ソーフ窓下
3. SYA/3 窓下
4. SYA/3 窓上
5. SYA/3 ソーフ窓上
6. SYA/3 ソーフ窓下
7. SYA/4 窓上
8. SYA/4 窓下
9. SYA/4 ソーフ窓上

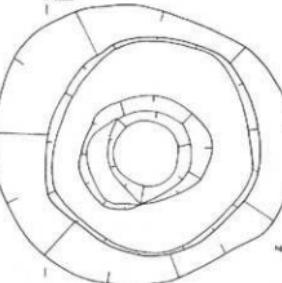
井戸3501

X>20205

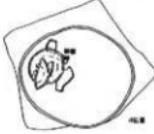
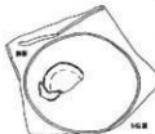


X>161761

Y>20205



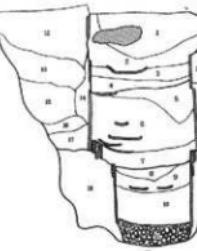
X>20205



E

W

52.00m



1. SYA/3 ソーフ窓上
2. SYA/1 ソーフ窓下
3. SYA/1 窓下
4. SYA/1 窓上
5. SYA/1 ソーフ窓上
6. SYA/1 ソーフ窓下
7. SYA/1 ソーフ窓上
8. SYA/1 ソーフ窓下
9. SYA/1 ソーフ窓上
10. SYA/1 ソーフ窓下
11. SYA/1 ソーフ窓上
12. SYA/1 ソーフ窓下
13. SYA/2 ソーフ窓上
14. SYA/2 ソーフ窓下
15. SYA/2 ソーフ窓上
16. SYA/2 ソーフ窓下
17. SYA/2 ソーフ窓上
18. SYA/2 ソーフ窓下
19. SYA/2 ソーフ窓上
20. SYA/2 ソーフ窓下



51.00m

O

2m 51.00m

図34 F・G地区 井戸平面図・断面図・立面図2 (S=1:40)

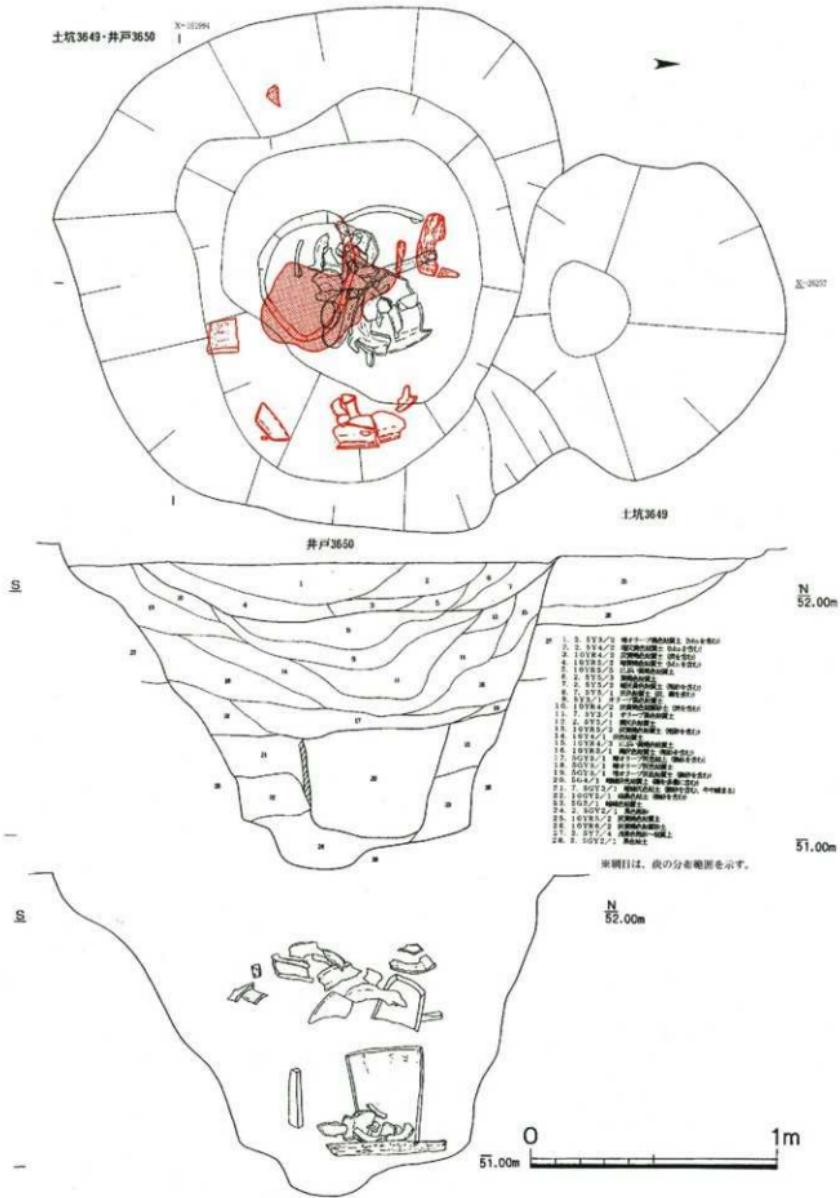


図35 G地区 土坑3649・井戸3650平面図・断面図・立面図3 (S=1:20)

3 出土遺物

調査区で多くの遺物が出土している(図36~51)。

82~84は埴輪で、いずれも旧河道3000から出土した。82は円筒形埴輪。5段目を欠損しているが4条5段とみられる。粘土紐輪積み成形後、外面は粗いナナメハケ、基底部はヘラケズリである。内面は全体に指頭圧痕があり、基底部付近はタテナデが見られる。83は盾持ち人物形埴輪で胴部が遺存している。外面はナデ調整を行なっている。盾部分でもある鱗部分は一部遺存しており、朱彩された痕跡が認められる。84は馬形埴輪で眼孔から鼻孔までの頭部の部分である。鼻孔、二字形鏡板、一文字形の口は明瞭に残されており、眼孔は左側が確認できる。

85~92は土師器である。いずれも旧河道3000から出土した。85~87は長胴甕で、87は底部を穿孔する。88は把手付甕である。89・90は甕である。90は外面が板状工具によるミガキである。91・92は土釜である。

93・94は人面墨書き土器で、いずれも旧河道3000から出土した。土師器の甕の胴部に人面が描画されており、口元に髭が描かれており男性である。93は溝り合った憂鬱な表情の2面の人面が、94は開口して笑顔を呈する1面が認められる。

95~102は墨書き土器である。いずれも土師器の杯もしくは皿の外面に1文字が墨書きされており、判読可能なものが多い。97が溜井戸3101から出土した他は旧河道3000から出土した。95は「日」。96は「山」もしくは「出」。97は「妙」。98は「東」。99は梵字の「ペイ」。100・101は記号「一に〇」。102は「十」。

103は土師器の鉢。103~119も旧河道3000から出土した。104は土師器の甕。105は綠釉陶器で底部が残る。

106は素文甕で、直径3.2cm。外縁半周分が欠損する以外は、ほぼ完存。

107~112は土馬で、完存する個体はない。107は頭頂部で、眼・鼻・口はヘラ描きで、耳は粘土貼り付けによる細かい表情描写が成される。108は胴部から左後脚部。胴部、外面には前輪・後輪の鞍枝の表現があり、内部中空である。109・110は脚部。111は胴部から左前後脚部で、鞍枝の表現がある。112は胴部から右後脚・尻尾部。

113~116は上質土器の小皿。117・118は黒色土器の碗で、内面は密なヘラミガキが施されるが、117は外面がヘラケズリである。118は密なヘラミガキで、高台は大きく外反する。119は甕の一部で、被熱により赤褐色を呈する。

120~136は須恵器で、いずれも旧河道3000から出土した。

137~139は軒丸瓦、140~142は軒平瓦、143・144は平瓦で、いずれも旧河道3000から出土した。137は、複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、川原寺式である。138・139は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、平城宮式6282型式である。140・141は四重弧紋軒平瓦。142は均整唐草紋軒平瓦で、平城宮式6721型式である。

143・144は格子叩目平瓦。145は堺で旧河道3000から出土した。表面は一定方向の粗いケズリで調整するが被熱しており、表面全体に亀裂が生じて煤の付着が認められる。片側面と裏面は同心円状工具によるタタキが見られることから、仏陀寺型式の堺に含まれる。

146~151は繩文土器。152は、弥生土器の底部であろう。153は叩き石。

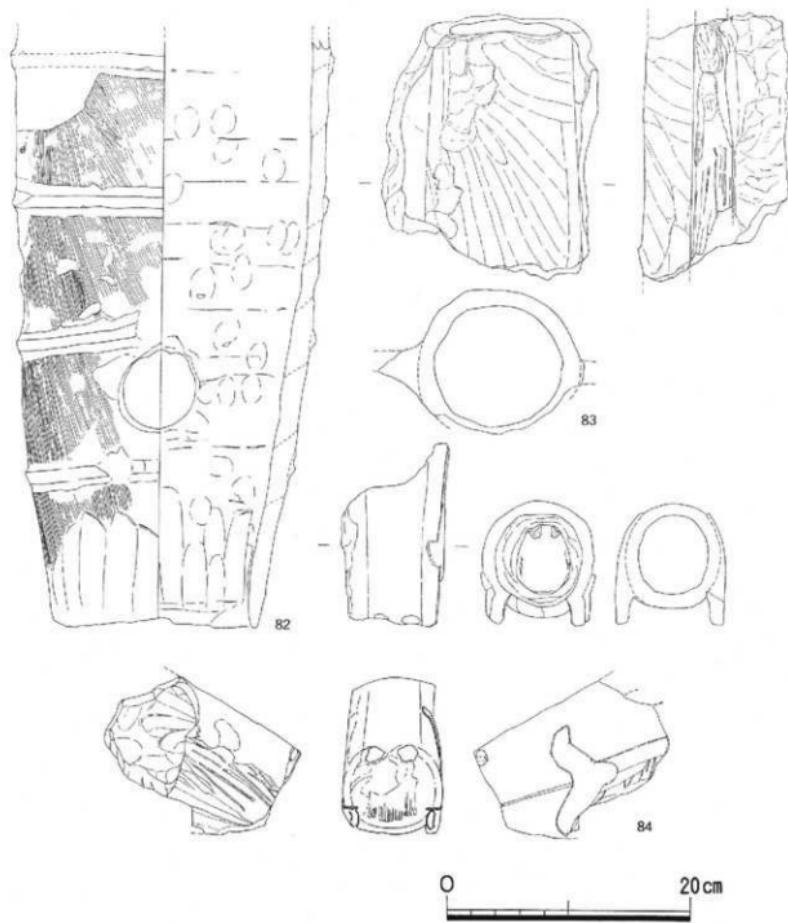


図36 C地区・旧河道3000出土 土器実測図 (S=1:4)

154～165は土師器の壺で、旧河道3001から出土した。

166～171は土師器の長胴甕で、旧河道3001から出土した。

172～187は土師器で、旧河道3001から出土した。172は製塩土器である。173は壺。174はミニチュア壺。175は土師器の小型壺である。

176～183は鉢。184～187は高杯である。

188～197は須恵器の杯蓋で、旧河道3001から出土した。198・199は須恵器・有蓋高杯の蓋である。200～210は須恵器の杯身で、旧河道3001から出土した。211・212は須恵器・無蓋高杯で、旧河道3001から出土した。213は須恵器の壺で、旧河道3001から出土した。

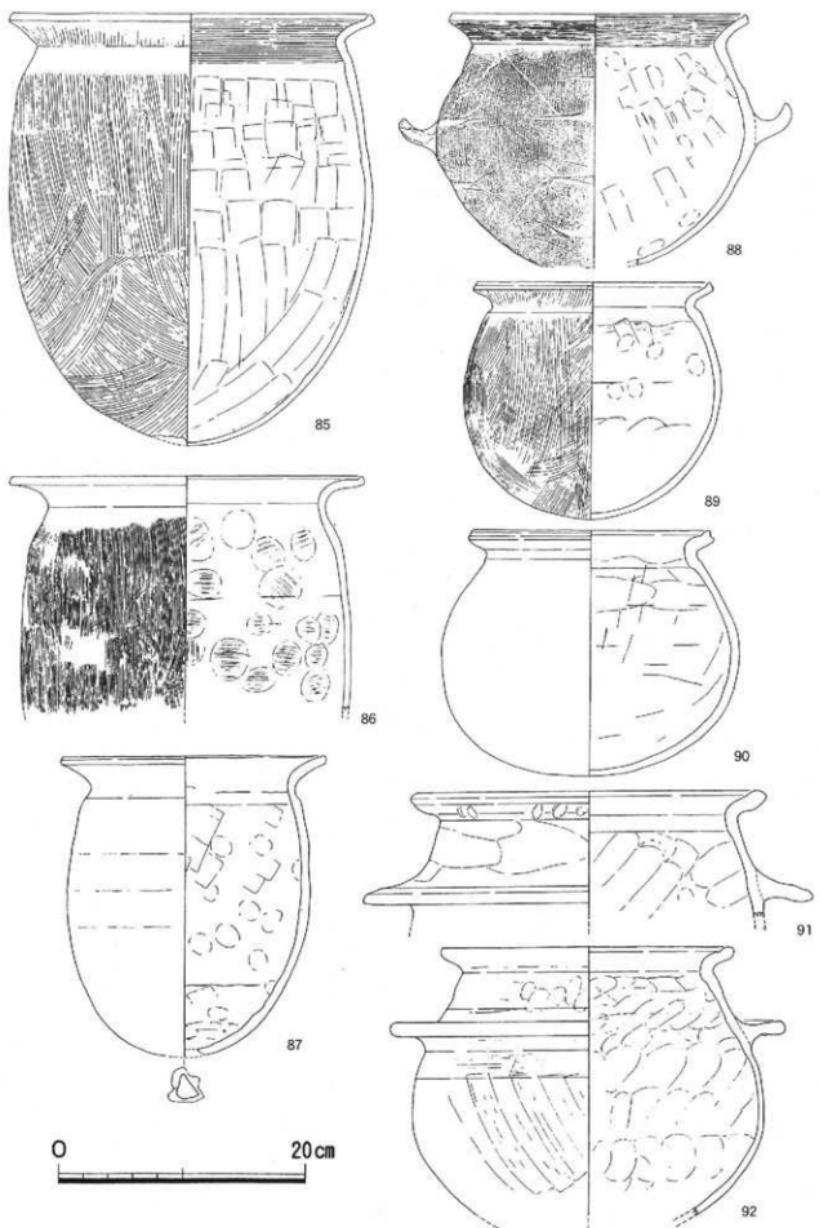


图37 C地区・旧河道3000出土 土器実測図 (S=1:4)

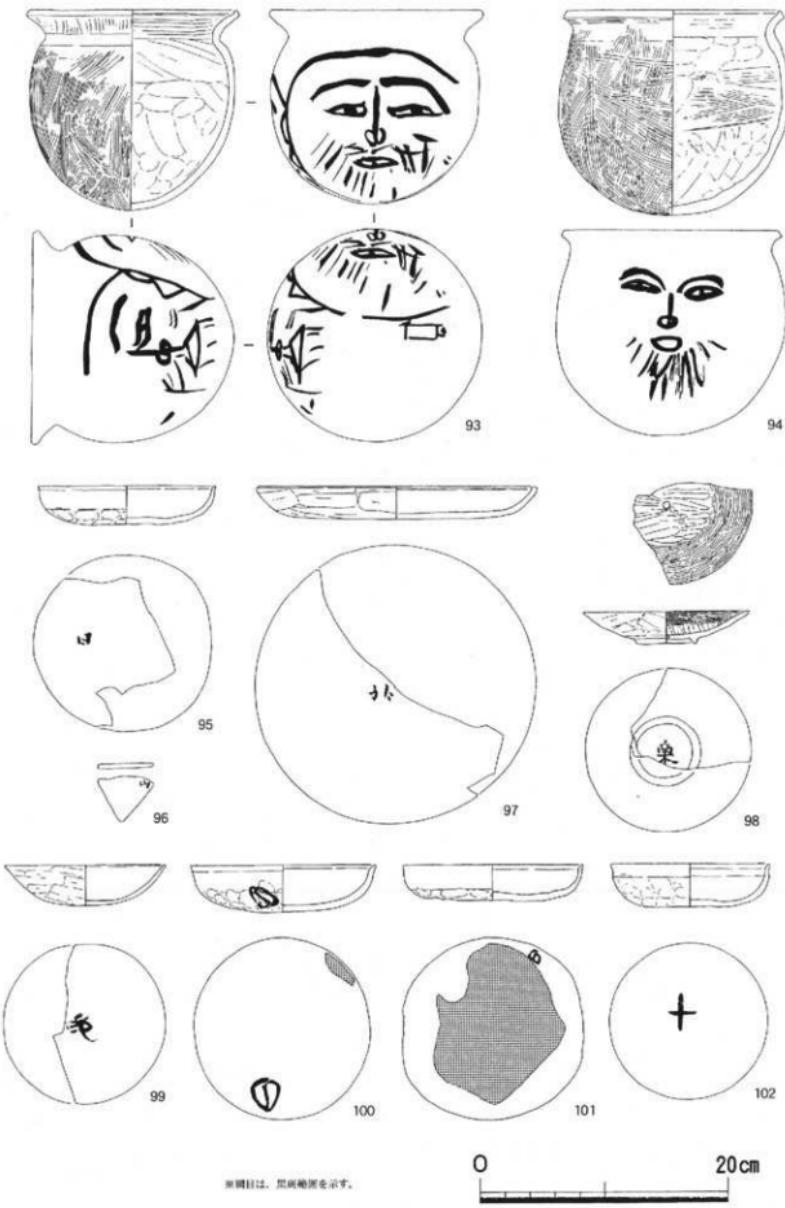


図38 C地区・旧河道3000出土 墨書き土器・人面墨書き土器実測図 (S=1:4)

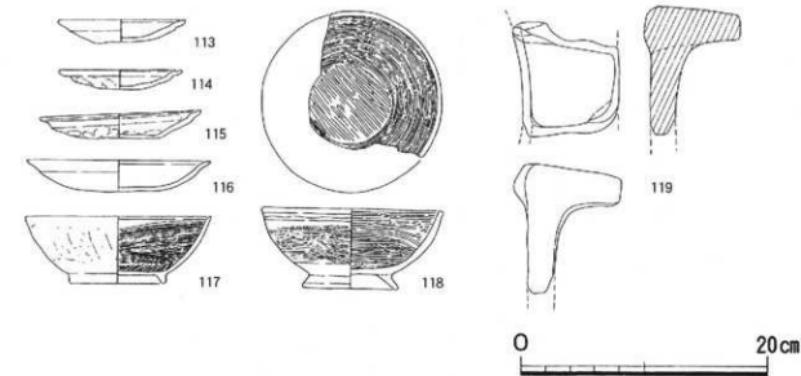
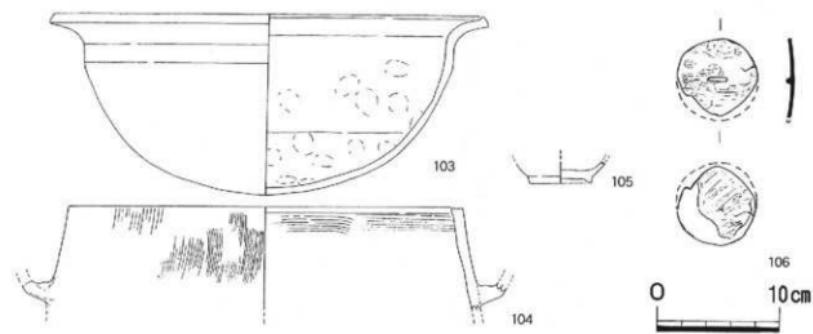


図39 C地区・旧河道3000出土 土師器・黒色土器・土製品・金属製品実測図 (S=1:4)

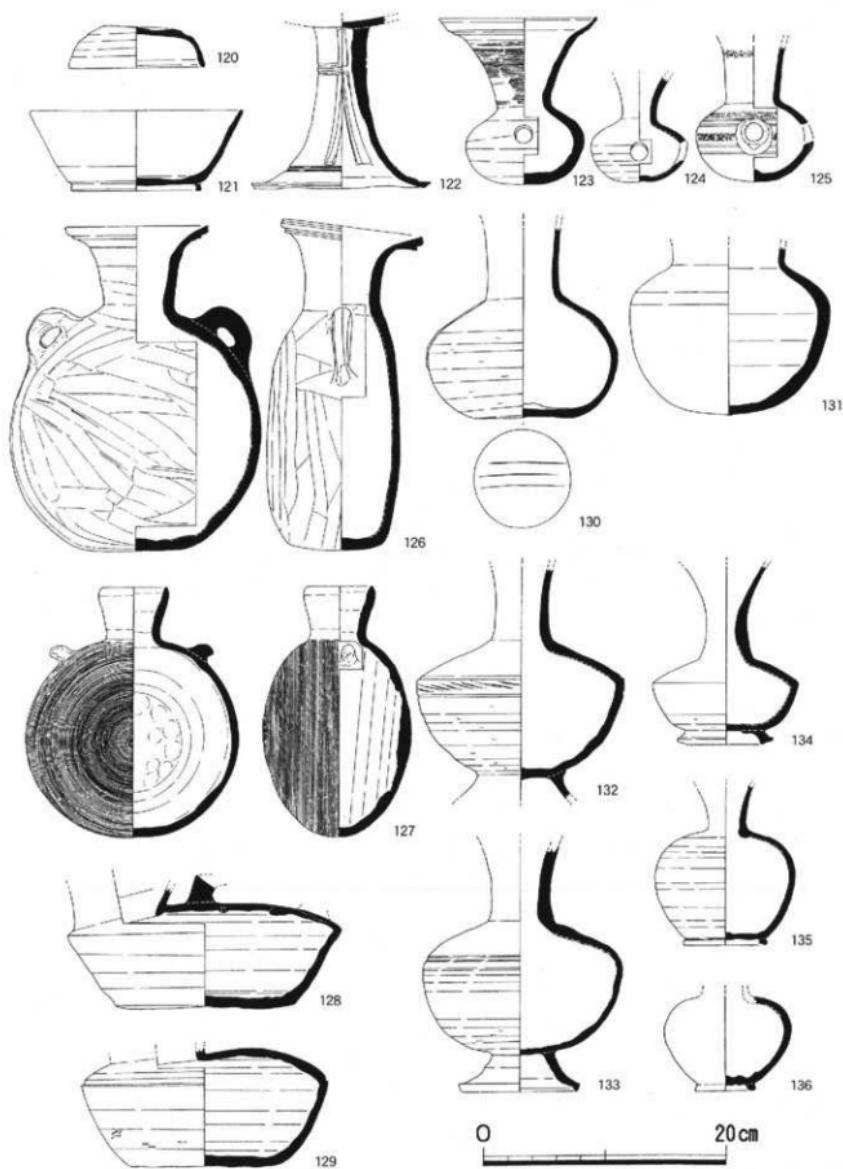


図40 C地区・旧河道3000出土 須恵器実測図 (S=1:4)

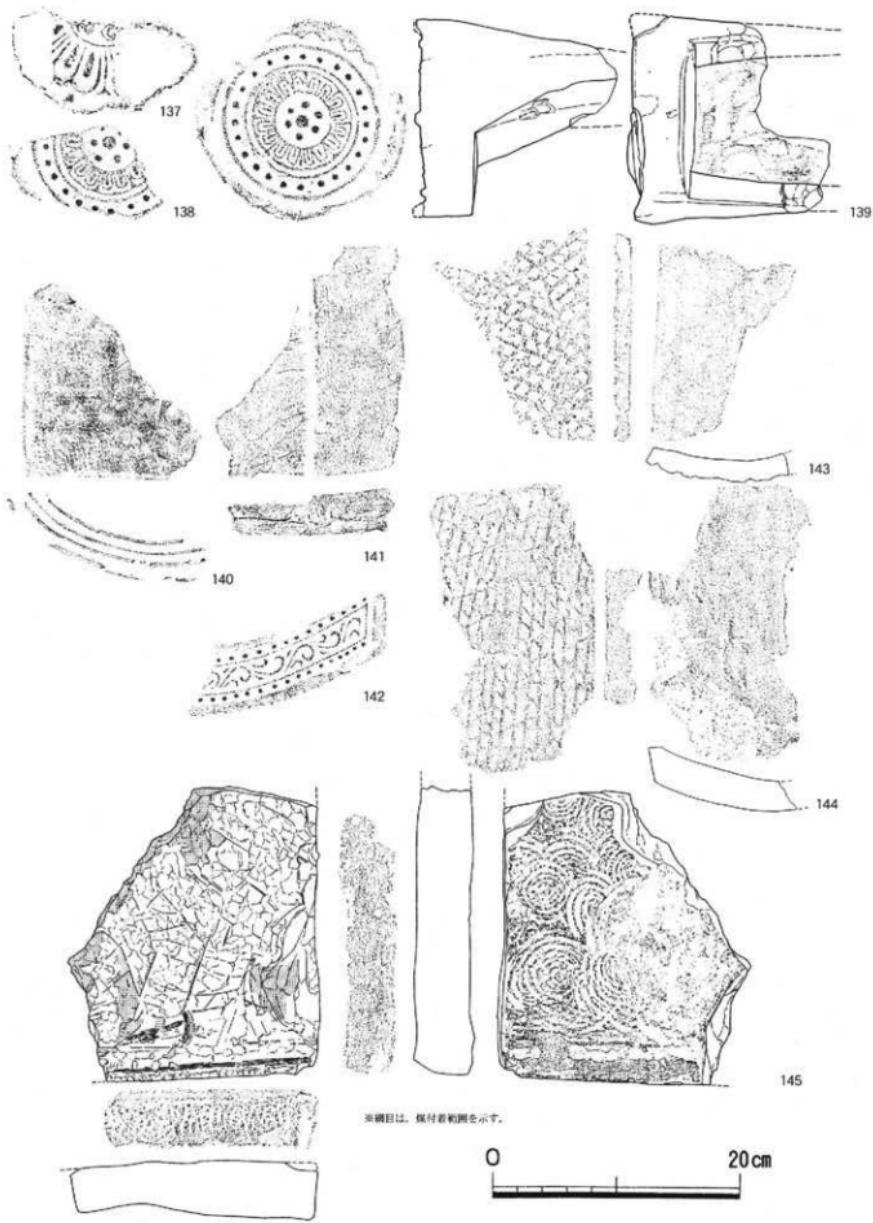


図41 C地区・旧河道3000出土 瓦・埠実測図 ($S=1:4$)

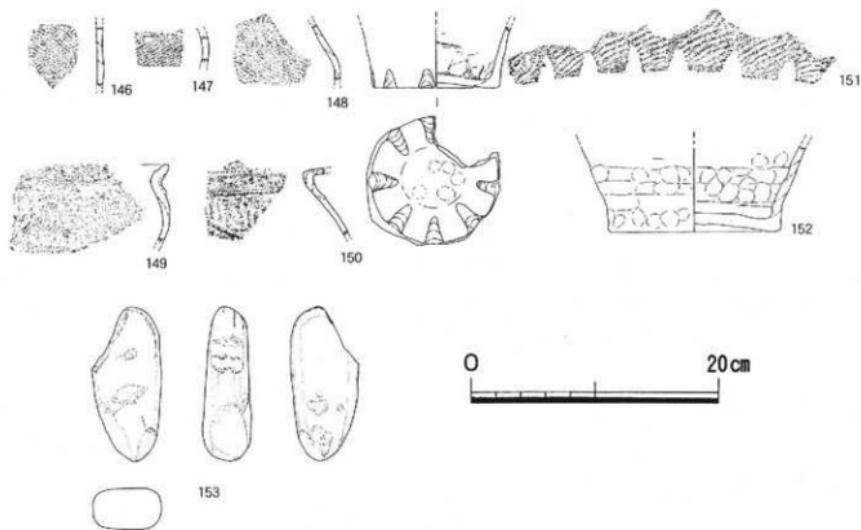
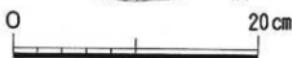
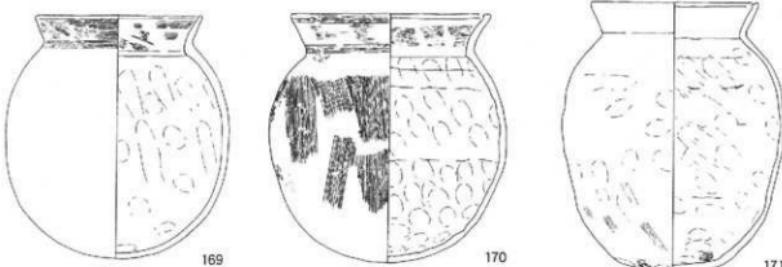
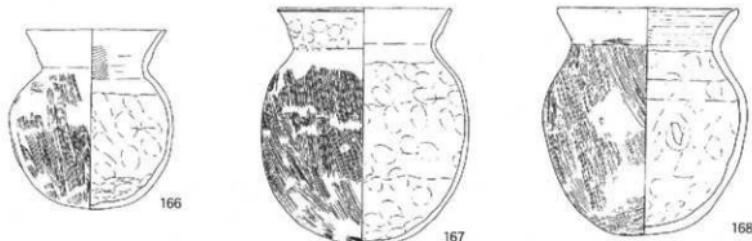
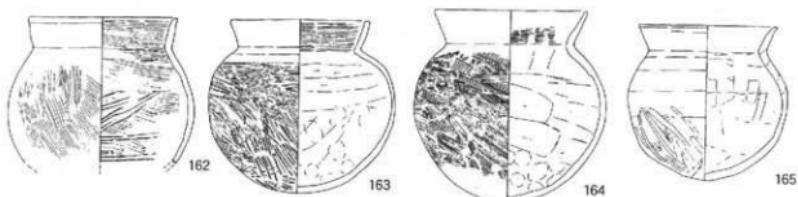
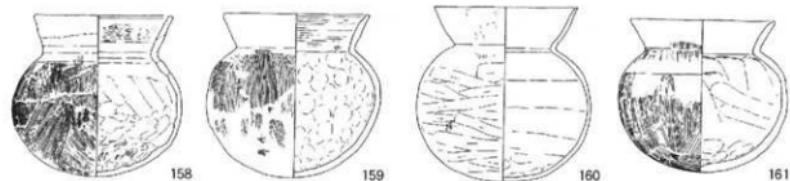
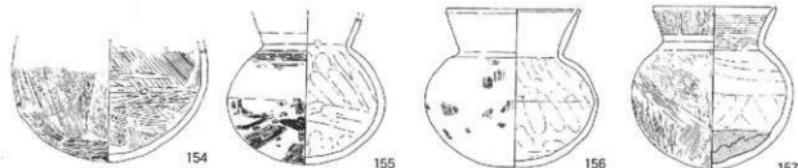


図42 C地区・旧河道3001出土 繩文土器・石器実測図 ($S=1:4$)



※網目は、炭化物付着範囲を示す。

図43 C地区・旧河道3001出土 土師器実測図1 (S=1:4)

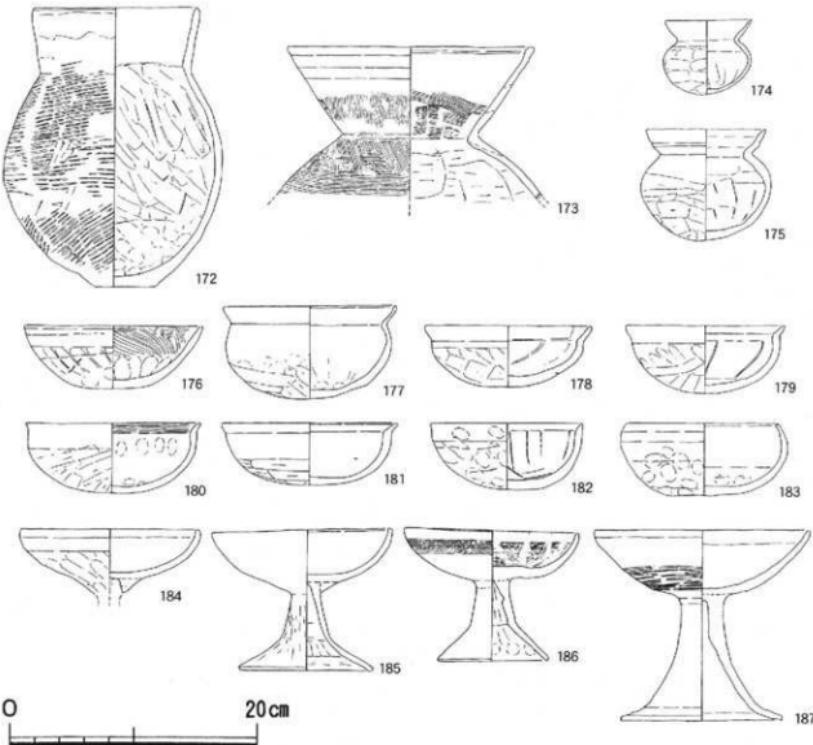


図44 C地区・旧河道3001出土 土器実測図2 (S=1:4)

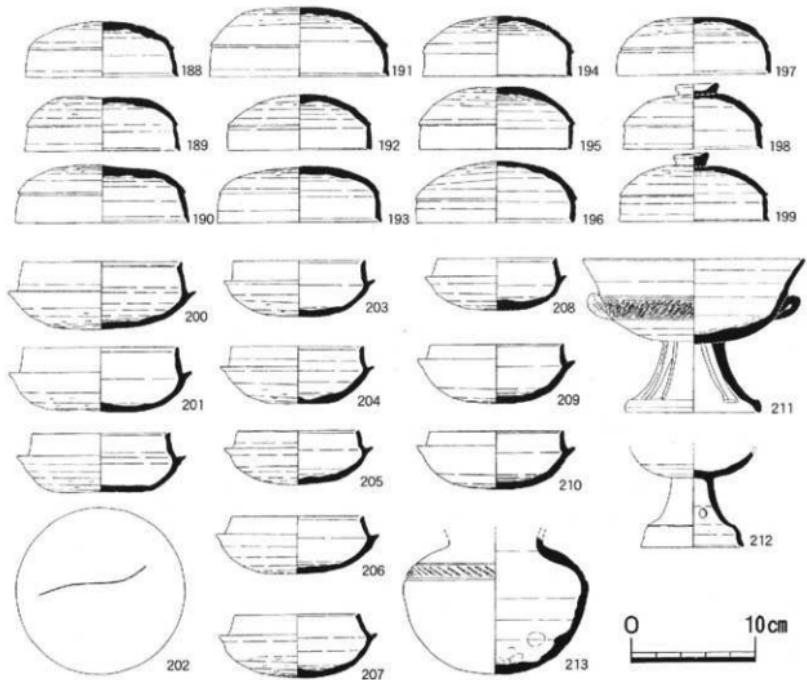


図45 C地区・旧河道3001出土 須恵器実測図 (S = 1 : 4)

214～217は土師器で、F地区・54トレンチから出土した。214は杯である。215は甕。216・217は把手付甕である。

218～221はF調査区・土坑3231で出土した。218はミニチュアコップ形土器。219は土師器の小甕。220は須恵器・高杯の杯部。221は須恵器・脚付椀の椀部。222～234はG調査区で出土した。222～227は土師器皿。228～234は墨書き土器である。228は「天」。229は「西」。230は「免」、もしくは「西」か。231は「羅」、もしくは「皿」か。232は「中」。233は「十」で、井戸3102から出土した。234は「中」であろう。235は土師器の皿である。

236・237は土師器の把手付甕で、井戸3500の土器転用井戸枠材である。把手と底部を打ち欠いて、237に236を重ねて使用していた。238は墨書き土器で、井戸3650から出土した。把手付甕の肩部に「一に〇」とある。239は土師器の甕で、溝3203から出土した。飛鳥時代の所産と考えられる。240～242は土師質土器の土釜で、旧河道3000河床で集水施設として転用されていた。いずれも鉢部より下半が欠損している。

243・244は格子叩目平瓦で、飛鳥時代後半の所産であろう。井戸3650の集水施設として転用されていた。

245～247はC調査区から出土した木製品である。245・246は鍤で、前者が旧河道3001、後者は旧河道3000から出土した。247は建築部材である。248～252はG調査区から出土した木製品である。248～250は曲物側板。井戸3501で井戸枠材として転用された。251は小型曲物底板。252は横櫛で、残存長5.4cm。253は銅製刀子、全長14.6cmを測る。252とともに井戸3501から出土した。

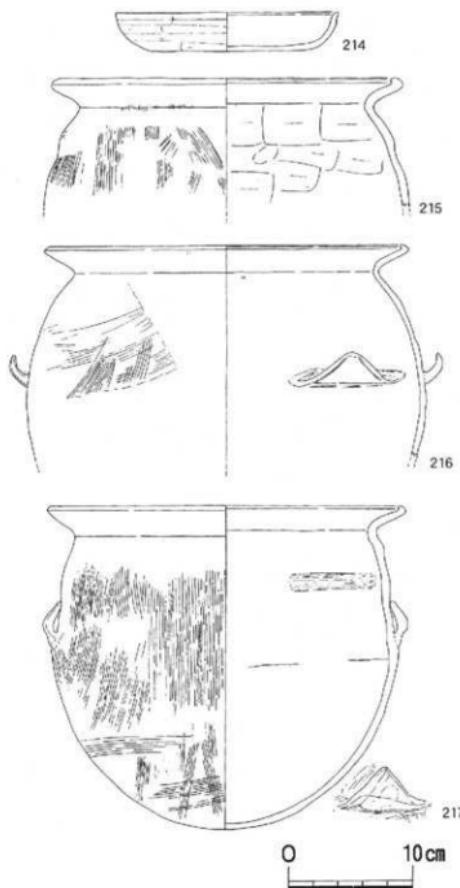


図46 F地区・第54トレンチ出土 土師器実測図 (S=1:4)



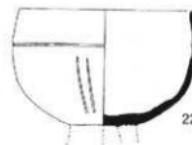
218



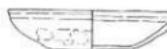
219



220



221



222



224



226



223



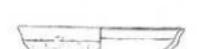
225



227



228



229



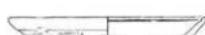
230



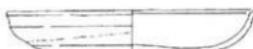
231



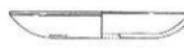
232



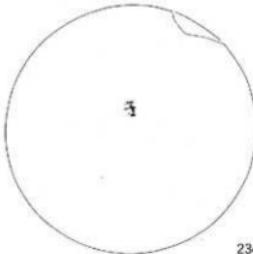
233



234



235



0

20cm

図47 F・G地区出土 土器実測図1 (S=1:4)

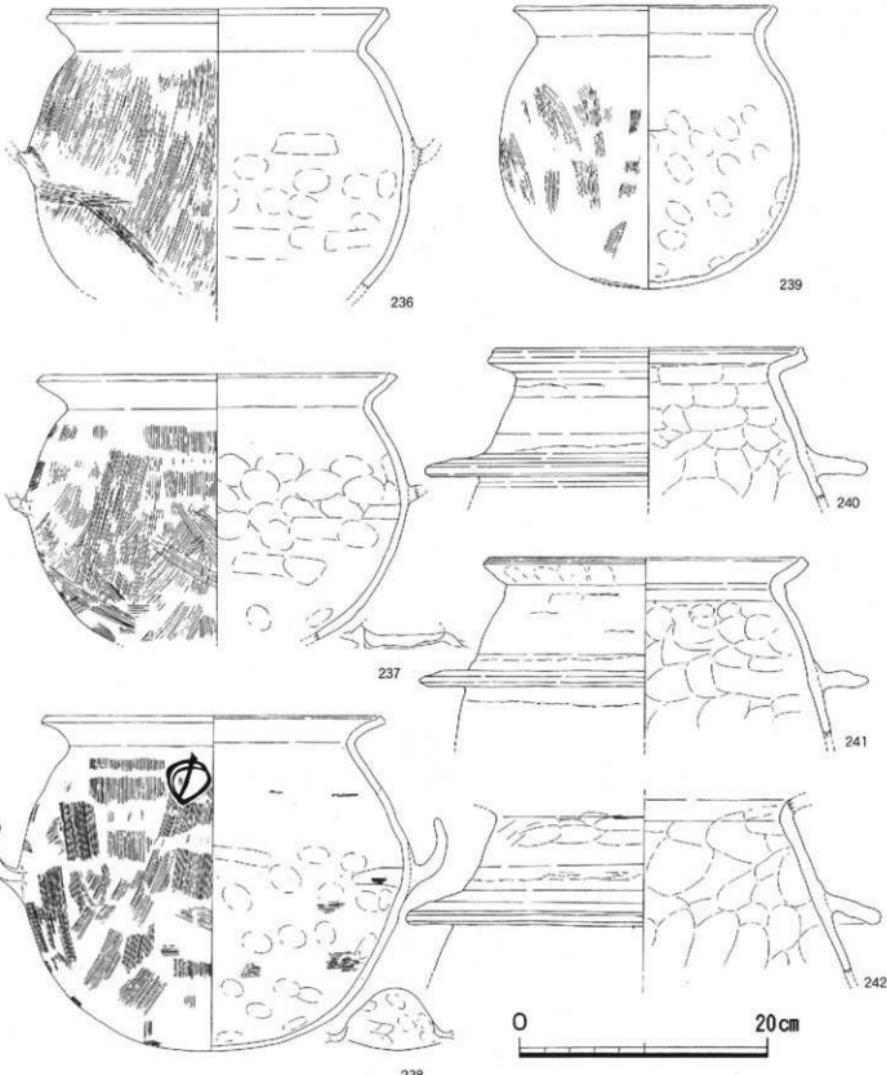
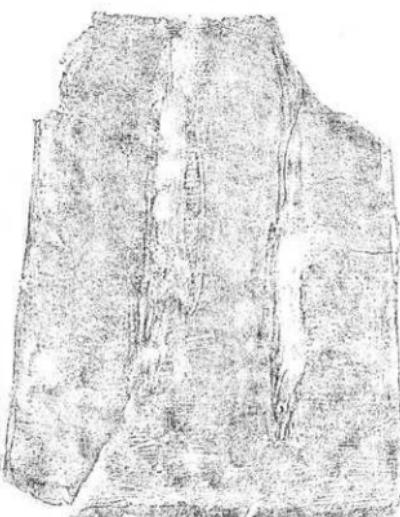


図48 F・G地区出土 土器実測図2 (S=1:4)



243



244

0

20 cm



244

図49 G地区・井戸3650出土 瓦実測図 ($S = 1:4$)

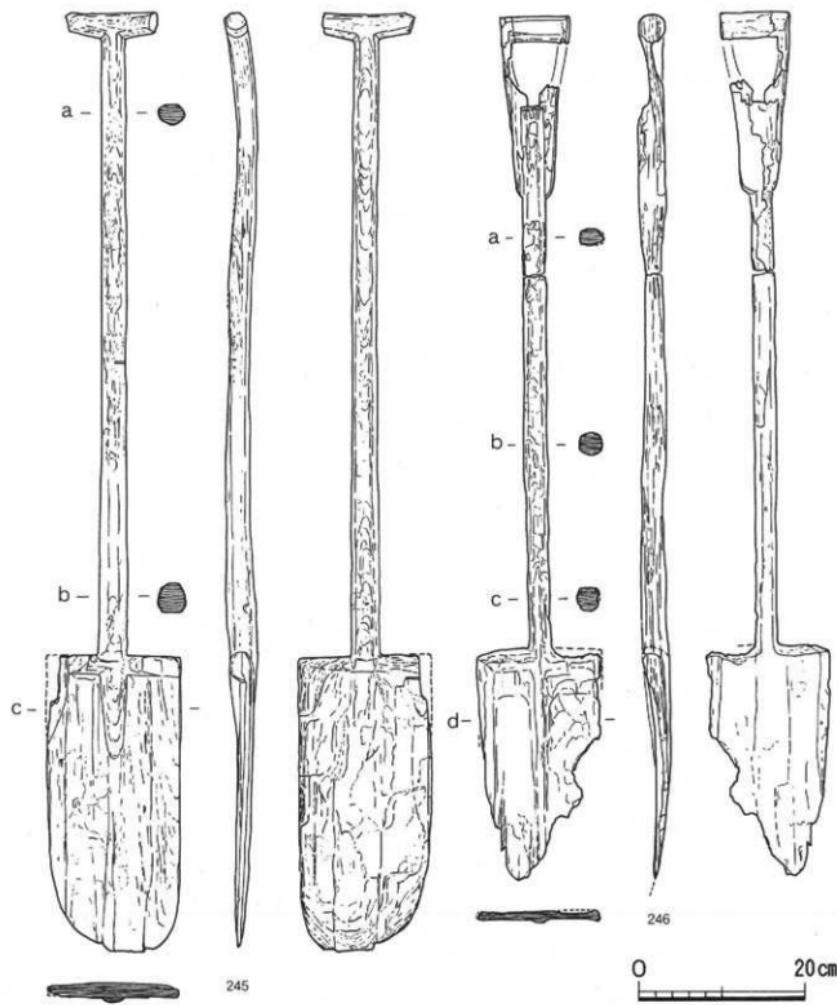


図50 五位堂区画第4次・C地区出土 木製品実測図1 ($S=1:6$)

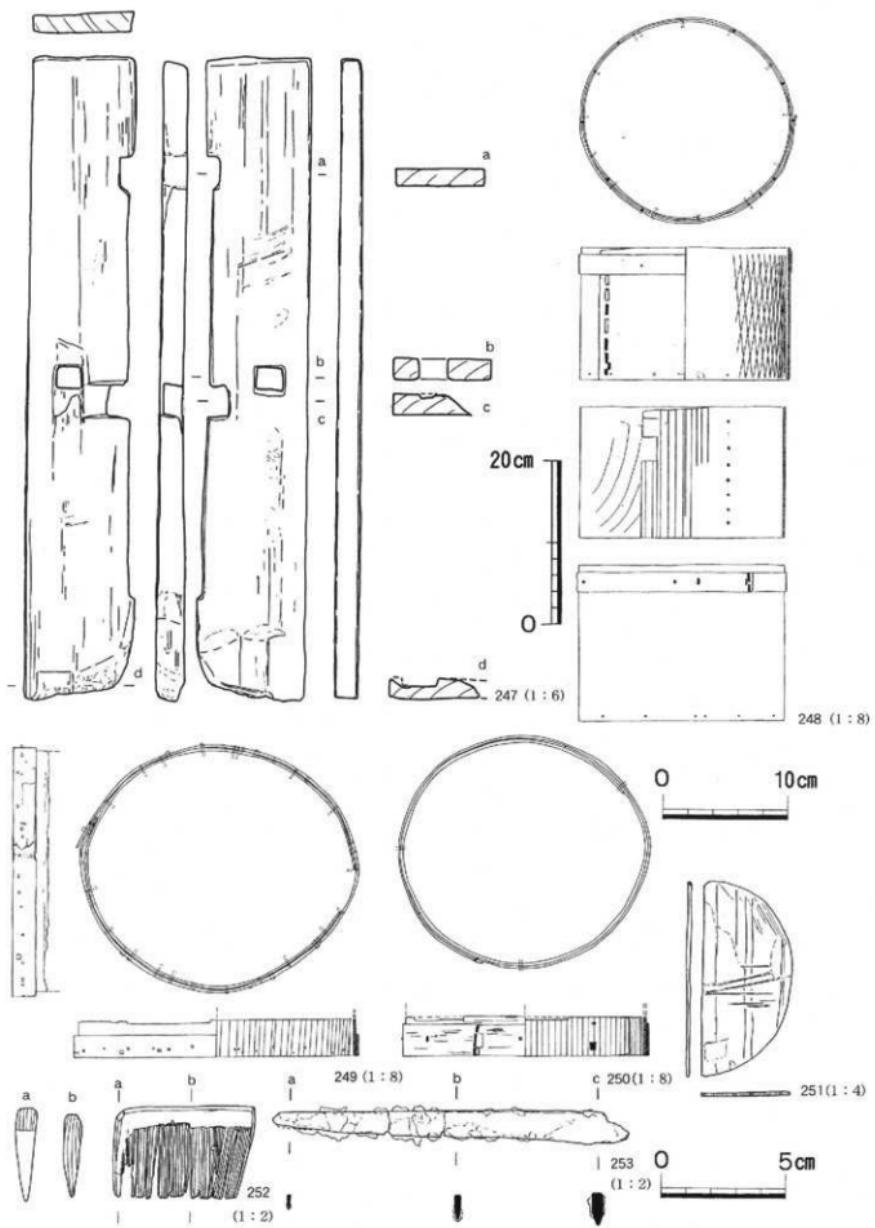


図51 五位堂区画第4次・C、G地区出土 木製品実測図2 (S=1:2, 1:4, 1:6, 1:8)

V まとめ

第3次調査では、事業地の東側と南側で新たに遺構が確認され、事業地全域が遺跡であることが判明した。現在でも付近では河川が合流し、多雨時に水害に悩まされてきたこの地域に遺跡は殆ど存在しないと考えられてきたが、覆る結果となった。

A・B地区では、旧河道の流路の他には顯著な遺構が存在しなかった。これは元來遺構の希薄な区域だった上に、後世の水田開墾に伴って削平を受けていることによる。また、E地区では本調査中央西区西端で埋没した旧河道9上に新たに柱建物62を検出した。西隣のB地区までの間に埋没河道上での遺構の存在を再考する契機となった。調査結果から、遺構は山崎川寄りで集中し、初田川寄りで希薄になることが判明した。

C地区では、C調査区で当初想定された古墳ないし古代寺院の存在は否定されたが、現河道に隣接して土壤化した堆積土上に多く遺構が存在し、特に調査区南半で未知の環濠居館を初めて確認したことは大きな成果であった。全体の北側を面的調査したこと結果、南北方向の濠がさらに南側に延び、これらを南側で東西方向の濠で結合する全体が条里地割に則って半町四方に配設される平面プランが「日」字型になることが予想される。濠に囲まれた東側区画と西側区画の成立については、それぞれを取り巻く濠の規模・形状が2タイプが認められるが、各土層の堆積状況は相似しており、また2タイプの濠の切り合い関係も認められないため、ほぼ同時に、つまり一度に環濠居館が形成されたと考えられる。今後の調査によって全体を明らかにする必要がある。環濠居館の機能していた室町時代前半のこの地域の支配者層は、岡氏一族・下山氏が挙げられ、これまでに丘陵側に下田城跡・瓦口城跡・岡氏居城跡が、平地側にヘ蒙ド城星跡・狐井城跡が知られている。これらとの関係の中で、その動きを明らかにするために重要な発見となった。

D地区では、全城に古墳時代から中世にかけての遺構の抜かりを確認できた。なかでも、耕作痕跡もしくは上地開発に関わるものとして考えられている素掘小溝が、蛇行している溝によって施工方向を規制していることは、一般的に直線状に区画されるのと異なるため、注目に値する。

第4次調査では、C調査区の下層遺構調査と隣接するF・G調査区を面的に調査した。C調査区では、旧河道2条（旧河道3000・3001）を大規模に調査することができた。流路方向が異なるが出土遺物から2つが同時期に機能していないと考えられる。

旧河道3000では、川岸に築かれた護岸・堤防状・橋脚の、それぞれの遺構の場所で人面墨書き器・土馬などを使用した律令祭祀が行われていたことが判明した。

この流路は、調査区すぐ東側で熊谷川と葛下川の合流点となっており、どちらかの旧流路と考えることができる。この場合、調査区内では鎌倉時代以降に流路が確認されないことや室町時代中期には、埋没後の旧河道上を基盤として調査区南半で環濠居館が築かれていることから、現流路は平安時代後半以降、少なくとも鎌倉時代には現在の流路が開削されたと考えられる。

このことは、当該地の条里型地割施行やそれに従って直線水路状に改修された付近の葛下川支流の開削時期決定の参考材料と成り得よう。旧河道3001（古墳時代前期～後期）→旧河道3000（飛鳥～平安時代）→現在の流路（鎌倉時代以降）と古代からの葛下川の流路の移り変わりを知ることができるようになった。

F・G両調査区では、旧河道3000の左岸一部を確認するとともに、そのすぐ西側には飛鳥～平安時代の柱建物群と井戸を検出することができた。F調査区の北側に下田東古墳があり、その南

東側には、南東から北西方向の旧河道が検出されている。今回検出した旧河道3000がその上流にあたる部分と確認した。柱建物は小規模ながら南北に中軸をもつてほぼ整然と配列されており、井戸からは墨書き器、瓦が出土している。すでに出土している円面鏡・石帶などの遺物から、識字者層の居住城であり、官衙的性格が考えられる。飛鳥時代の建物群は数棟ながら区画溝を伴い、整地層には瓦が含まれていることから、すでにその性格を持っていたと考えられる。その場合、葛下郡衙との関連が注目される。これまで葛下郡衙は、字「コオリ」が残る大和高田市材木町、南東約3km地点の葛城市新住家などが候補として考えられているが、調査による確認例はない。今回出土しているような都城的性格遺物は各所で出土するものではないため、当該地区に葛下郡衙が存在すると可能性が高い。今回検出した柱建物群の規模や配列では、葛下郡衙か郷衙の「雑舎」などの周辺施設、または莊園管理施設などが考えられる。なお、この建物群西方約100mの地点では、第2次調査で奈良時代から平安時代にかけての方位を意識した配列をもつ大型柱建物群を検出しておらず、ここが中枢的機能を果たした施設と考えられる。その拡張性はこの間に及ぶと考えられ、次年度調査で明らかにされよう（註1）。この地域の安定を願い、都に縁のある役人が祭祀に関わりながら統治していたのであろうか。平安時代に建物群が最も多く築かれるが、その後の12世紀末頃に素掘小溝が形成されて、全面が耕作化されていったと考えられる。

このように、事業地東側では飛鳥時代から奈良時代に全城で土地利用され、祭祀色の強い空間であることが判明した。

第54トレチの溝3200は、条里制の坪界線上にあたり、近世には下田村と狐井村、現在では下田東3丁目と大字狐井との境界として継承されている部分にある。このことから当該地の条里制に伴う溝の施行例として貴重と考えられる。また、奈良時代の遺物を含んでいることから該期に施行された可能性を指摘することができる。この西方延長上200mの地点は、第2次調査の本調査中央区にあたり、用水路が現代にコンクリート製擁壁に改修された際に破壊されており、条里制に関する遺構は検出できなかった。同時代の遺物を回収することもないため、この地点では溝は施行されていなかったと考えられる。

当事業地内では、平成13(2001)年度の北東域における試掘・確認調査(第1次調査)に始まって以降、西域での第2次調査、東城・南城の第3次調査においても縄文時代から中世にかけての遺構が存在し、遺物が包含されていることが確認され、全城に遺跡が拡がっていることが判明した。しかもその存在する密度は、西域の初田川付近を除いて非常に高く、今後も事業地域内における開発部分については発掘調査を計画的に推進していく必要がある。また、事業完了後に当該地域内における開発行為が予定された場合でも、引き続き然るべき発掘調査の手続きを取る必要があり、注意が必要である。

下田東遺跡の範囲については、西側の初田川付近は耕作地化以前の元来の地形が高くて遺構が希薄である。西端をこの付近とほぼ確定できるが、削平されている点を考慮しても、旧石器～縄文時代の遺跡である下田遺跡の東限にまで及ばない。事業地南側では、古墳時代から平安時代にかけての集落跡が展開することが判明した。近畿日本鉄道大阪線が横断して検修車庫が広がっているが、狐井遺跡の北限との関係を考えるべきであろう。当該遺跡とは近似した関係にあり、狐井丘陵の影響を受けた生活圏と、葛下川流域に制約された生活圏の区分が可能かどうか。今後、隣接する遺跡の性格などを考慮しながら、その範囲を確定していくことが肝要であろう。

註

(1) 本書および『概報Ⅰ』を編集した平成17年度は、五位堂区画第5次調査H地区において平安時代初頭の井戸から田植事と売買記録の文書木簡が出土し、「伊福部連豊足」なる人名の記載があった。このことは文書内容からも官衙の存在の確実性を証明した。



写真5 ふたかみ発掘体験 (2004.11.20)



写真6 市民の皆さんによる土器洗い風景

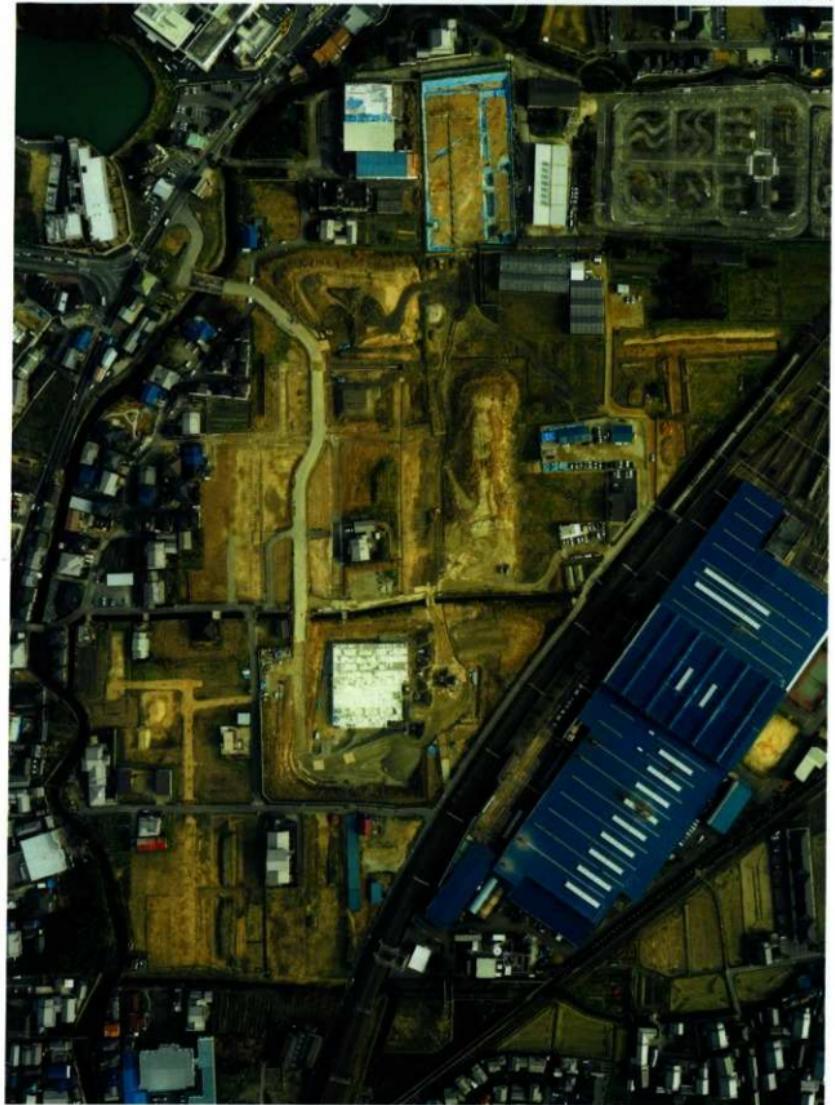


写真7 市民の皆さんによる発掘風景



写真8 蛇紋岩製勾玉が出たよっ！

図版1 下田東遺跡 五位堂区画第3・4次 (1)



調査地全景 (西上空から、平成15年12月16日撮影)

図版2 下田東遺跡 五位堂区画第3次（2）



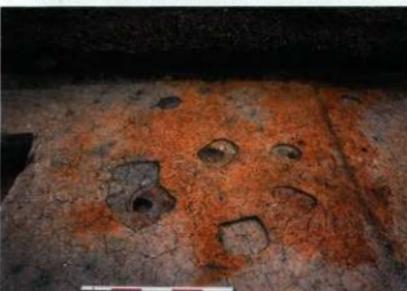
1 A・B地区全景（南上空から）



2 A地区 上層遺構検出状況（西から、奥：第35トレンチ）



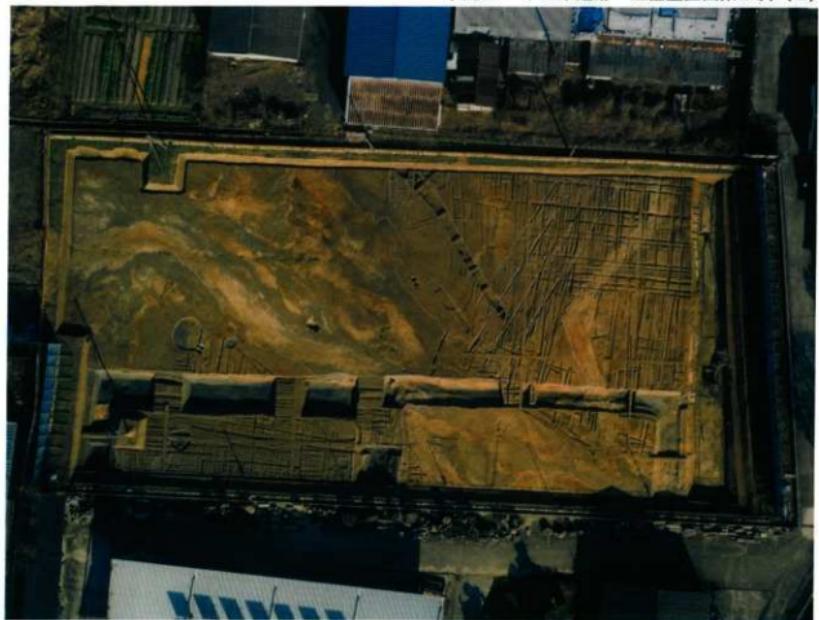
3 A地区 下層遺構検出状況（東から）



4 B地区・第38トレンチ ピット群完掘状況（北から）



5 第38トレンチ 溝1808土層断面（北から）



1 C地区全景（南上空から）



2 C・F・G地区 調査前風景（西から）



3 C地区 西土壌・第44トレンチ全景（東から）



4 C地区 北土壌・第46トレンチ全景（西から）

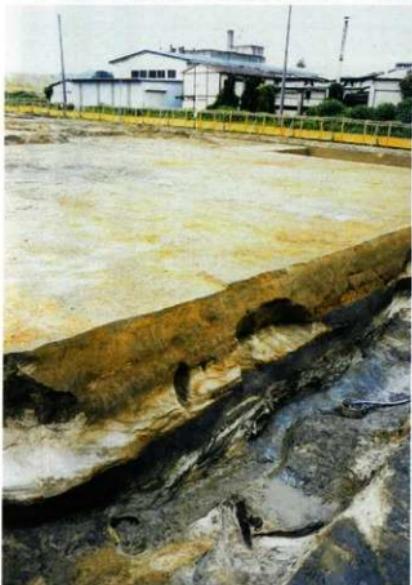


5 C地区 東土壌・第48トレンチ全景（西から）

図版4 下田東遺跡 五位堂区画第3次（4）



1 C地区 第50トレンチ全景（南から） 2 第50トレンチ 南壁土層断面（北から） 3 第50トレンチ 西壁土層断面（東から）



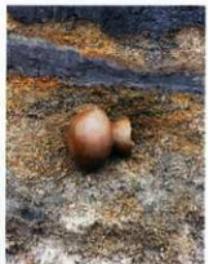
4 第50トレンチ 遺物出土状況（南東から）



5 木製鞍（東から）



6 古式土師器小型鉢（西から）



7 古式土師器直口壺（西から）



8 山陰系古式土師器甕（南から）



9 C地区 第51トレンチ全景（東から）

図版5 下田東遺跡 五位堂区画第3次（5）



1 C地区 環濠居館跡（東から、濠3010、3011）



2 濠3011-a·b断面（北から）



3 土師器羽釜（西から）



4 濠3011-c'断面（西から）



5 濠3010-h断面（東から）



6 濠3010-f断面（北から）



7 濠3010-j'断面（西から）



8 漆塗柾（北から）

図版6 下田東遺跡 五位堂区画第3次（6）



1 漢3011-1・m断面（北から）



2 環濠居館跡西側区画調査風景（東から）



3 柱建物2（北から）



4 溝井戸3017遺物出土状況（南から）



5 土坑3018半截状況（南西から）



6 井戸3016蓋検出状況（南から）



7 井戸3016枠材1段目検出状況（南から）



8 環濠居館跡下層遺構全景（東から）

図版7 下田東遺跡 五位堂区画第3次（7）



1 井戸3039遺物出土状況（南から）



2 漆器椀（西から）



3 潜井戸3035・3036半截状況（北から）



4 溝3030遺物出土状況（南東から）



5 斜行素掘溝NS 1000~1006完掘状況（南西から）



6 旧河道3000左岸・足跡群検出状況（南から）

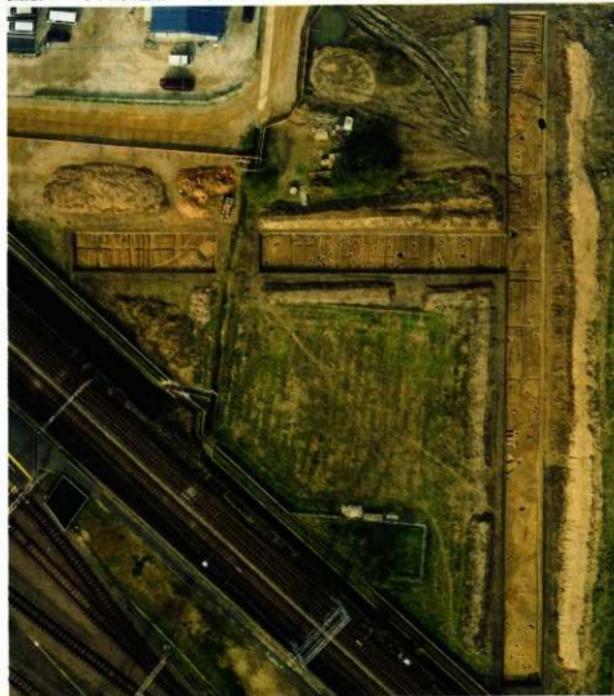


7 旧河道3000・3001検出状況（南東から）



8 旧河道3000遺物出土状況（北から、濠3011内法面）

図版8 下田東遺跡 五位堂区画第3次（8）



1 D地区全景（南上空から）



2 第40トレンチ造構完掘状況（北から）



3 第40トレンチ造構完掘状況（南から）



4 第40トレンチ北半 西壁土層断面（東から）



5 土器埋納造構102半截状況（南から）

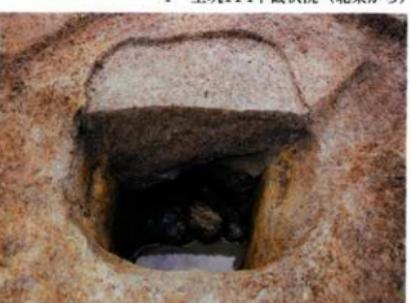


6 井戸232半截状況（西から）



7 井戸232枠材半截状況（西から）

図版9 下田東遺跡 五位堂区画第3次 (9)



図版10 下田東遺跡 五位堂区画第3次 (10)



1 E地区全景 (南上空から)



2 本調査中央西区全景 (西から)



3 本調査中央東区全景 (西から)



4 井戸2224・2225半截状況 (東から)



5 井戸2223枠材検出状況 (西から)



6 流路66上層検出状況 (南西から)



7 旧河道2203土層断面 e-f (南から)



8 本調査中央東区用水路北側部全景 (南から)

図版11 下田東遺跡 五位堂区画第4次（1）



1 C地区 旧河道3000検出状況（西から）



2 旧河道3000完掘状況（西から）



3 旧河道3000完掘状況（南東から、右：満3040）



4 堤防状遺構（南東から）



5 堤防状遺構杭列検出状況（南東から）



6 堤防状遺構遺物出土状況（南東から）



7 堤防状遺構木製礎出土状況（南西から）



8 護岸状遺構（南東から）

図版12 下田東遺跡 五位堂区画第4次（2）



1 護岸状造構杭列検出状況（南西から）



2 旧河道3000右岸・土器集中地点1遺物出土状況（東から）



3 凝灰岩切石（北から）



4 旧河道3000・杭列遺構3検出状況（北西から）



5 旧河道3000左岸・土器集中地点2遺物出土状況（北から）



6 土器集中地点2遺物出土状況（北から）



7 土器集中地点2遺物出土状況近景（東から）

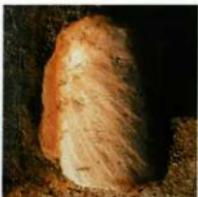


8 旧河道3000・河床内遺構（西から）

図版13 下田東遺跡 五位堂区画第4次（3）



1 円筒形埴輪



2 盾持人物形埴輪



3 人面墨書き土器



4 斎串



5 土馬



6 馬齒



7 複弁八弁蓮華紋軒丸瓦



8 均整唐草紋軒平瓦



9 黒色土器



10 黒色土器



11 蛇紋岩製勾玉



12 素文鏡



13 旧河道3001完掘状況（南東から）



14 旧河道3000・3001分歧点上層断面（南東から）



15 旧河道3001木製品出土状況（南東から）



16 木製構・建築部材（南から）



17 縁文土器複多角形底（西から）



1 F・G地区全景（西上空から）



2 第54トレンチ全景（西から）



3 F地区全景（西から）



4 F地区 東壁土層断面（南西から）



5 G地区 東壁土層断面（南東から）



6 柱穴3229・土坑3231半截状況（南から）



1 区画溝3203遺物出土状況（東から）



2 土坑3333-2遺物出土状況（北から）



3 G地区柱建物群（東から）



4 柱建物16（北から）



5 柱建物17（南から）



6 井戸3500枠材検出状況（北から）



7 井戸3500土器転用枠（北から）



8 井戸3501-a位置（北から）

図版16 下田東遺跡 五位堂区画第4次 (6)



1 井戸3501-b位置（北から）



2 井戸3501-c位置（北から）



3 木製横樋（北から）



4 井戸3501-f位置（北から）



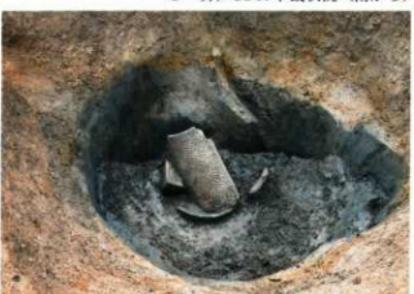
5 井戸3501-g位置（北から）



6 井戸3647半截状況（南から）



7 井戸3650上層半截状況（東から）



8 井戸3650遺物出土状況（西から）



9 井戸3650下層半截状況（東から）

報告書抄録

ふりがな	しもだひがしいせきはつくつちようさがいりまうに							
書名	下田東遺跡発掘調査報告Ⅱ							
副書名	五位堂駅前北第二土地区画整理事業にともなう							
巻次								
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	22							
編著者名	湖本 雅							
編集機関	香芝市二上山博物館							
所在地	郵便番号639-0243 奈良県香芝市藤山1丁目17番17号 電話番号0745-77-1700							
施行年月日	西暦2006(平成18)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			

下田東遺跡 (五位堂区画第3次)	奈良県香芝市 下田東3丁目・狐井	29210	98	34度 53分 90秒	135度 72分 46秒	20030603～ 20040331	8596m ²	大和都市計画・ 五位堂駅前北第二 土地区画整理事業
下田東遺跡 (五位堂区画第4次)	奈良県香芝市 下田東3丁目・狐井	29210	98	34度 53分 94秒	135度 71分 44秒	20040529～ 20050327	4743m ²	大和都市計画・ 五位堂駅前北第二 土地区画整理事業

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下田東遺跡 (五位堂区画第3次)	集落跡	縄文時代	旧河道	ナスカイト、縄文土器	A・B地区では近世の耕作痕跡、 C地区では古墳時代前期・後期と飛鳥時代～平安時代の旧河道を確認した。
		古墳時代	柱穴、土坑、井戸、構、 掘立柱建物、旧河道	土師器、須恵器、埴輪	
		飛鳥時代～ 奈良時代	柱穴、土坑、井戸、構、 掘立柱建物、旧河道	土師器、須恵器、瓦、 黒色土器、土製品、 石製品、金風製品	D・E地区では古墳時代～ 平安時代の集落跡を確認した。
		平安時代	柱穴、井戸、 掘立柱建物	土師器、須恵器、瓦、 黒色土器、石製品	
		中世～ 近世	裏掘小溝、井戸	土師器、瓦器、陶器、 瓦質土器、磁器	
下田東遺跡 (五位堂区画第4次)	集落跡	縄文時代	旧河道	ナスカイト、縄文土器	C地区では古墳時代前期・後期の 旧河道で多量の遺物を確認した。
		飛鳥時代～ 平安時代	柱穴、掘立柱建物、 土坑、井戸、構、	土師器、須恵器、埴輪、 黒色土器、墨書き土器、 人面彫刻土器、土製品、 瓦、石製品、金風製品	奈良時代～平安時代の旧河道から律令祭祀場を確認した。 F・G地区では飛鳥時代～
		中世	裏掘小溝、土坑	土師器	平安時代の集落跡を確認した。

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 22
五位堂駅前北第二土地区画整理事業にともなう
下田東遺跡発掘調査概報 II

- 平成15・16年度 -

2006年(平成18)年3月31日

編 集 香芝市二上山博物館
〒639-0243 奈良県香芝市藤山1丁目17番17号
TEL 0745-77-1700 FAX 0745-77-1601

発 行 香芝市・香芝市教育委員会
〒639-0244 香芝市本町1397番地
TEL 0745-76-2001

印 刷 堀内印刷株式会社

